

札幌国際大学
地域・産学連携センター一年報
第6号

札幌国際大学
地域・産学連携センター

札幌国際大学
札幌国際大学 地域・産学連携センター年報
第6号

目 次

<事業報告>

1. 令和3(2021)年度 浦河町・札幌国際大学地域連携事業
[子育て支援分野] 公開講座①「運動遊びイベント」、「幼児期からの学びの土台づくり事業講座」
[子育て支援分野] 公開講座②「英語遊びイベント」
[子育て支援分野] 公開講座③「造形遊びイベント」
林 二士・神林 裕子・朝地 信介 …………… pp1-6
2. 令和3(2021)年度 奨励研究 調査研究報告 [今金町]
地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究Ⅱ
～連携自治体におけるリーダー育成プログラムの検討～
佐久間 章・赤川 智保・田部井 祐介・横山 克人・栗野 祐弥・本多 理紗・
千葉 里美・金庭 香理…………… [pp1-2], pp1-40, [p1]
3. 令和3(2021)年度 奨励研究 調査研究報告 [ニセコ町]
ニセコ町における食と観光資源の多様性に関する研究
池ノ上 真一・藤崎 達也・杉江 聡子 …………… pp1-45
4. 令和3(2021)年度 奨励研究 調査研究報告 [札幌市清田区]
地域の魅力を活かした新スタイルのまちづくり・ひとづくり～清田区をフィールドとして～
河本 洋一・石田 麻英子・荒戸 譲治…………… pp1-26
5. 令和3(2021)年度 地域・産学連携センター共同研究 [一社)北海道商工会議所連合会]
一般社団法人北海道商工会議所連合会との人材育成に関する産学連携プロジェクト報告書
～早期の企業訪問による就業・キャリア意識向上についての研究～
千葉 里美・松浦 秀太・和田 早代・キャリア支援センター職員
一社)北海道商工会議所連合会 ……………pp1-8
6. 令和3(2021)年度 地域・産学連携センター共同研究 [日本航空株式会社]
産学連携で築く新たな観光ビジネス教育に向けた挑戦
-キャリア教育、国内インターンシップ、共同研究の検討-
千葉 里美
日本航空株式会社北海道地区……………pp1-18

2021(令和3)年度 浦河町・札幌国際大学地域連携事業

※2021(令和3)年度事業「公開講座」は例年通り計画・準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染拡大の状況や北海道のまん延防止措置の発出を受けて浦河町・大学の担当者間で実施の可否を協議し、中止することとなった。以下は「公開講座」で予定されていた内容と「学びの土台づくり」事業についてまとめる。

【2021(令和3)年度地域連携事業の目的】

[子育て支援分野]の取り組みとして、学生の保育技能向上に関わる課題解決型学習の成果発表の機会となる学生企画の「公開講座」と、子どもの学力・運動能力等の基礎力向上につながる「学びの土台づくり」講座を行う。また浦河町の保健衛生・福祉介護・子育ての人材誘致につなげる機会として、地域の特色や産業、就業環境への理解を深める。

【担当】

- 林二士 [子育て支援分野] 公開講座① 運動遊びイベント、幼児期からの学びの土台づくり事業講座
- 神林裕子 [子育て支援分野] 公開講座② 英語遊びイベント
- 朝地信介 [子育て支援分野] 公開講座③ 造形遊びイベント

【[子育て支援分野] 公開講座】 ※当初計画の内容

◇日程：2022年2月8日(火)・9日(水)・10日(木)

日時	スケジュール・場所	備考(食事等)
2/8(火)1日目		
9:30	ゼミごと打ち合わせ・準備	大学各教室
11:30	バス配車・荷物積み込み	大学
12:00	大学出発	休憩(新冠)
15:00	浦河町着・会場設営・両ゼミ合同リハーサル	文化会館
18:00	AERU着・チェックイン・夕食	AERU・レストラン
2/9(水)2日目		
7:30	朝食・各自準備など	AERU・レストラン
8:45	出発	
9:00	文化会館着・準備	文化会館
10:00	イベント①運動遊び(約30分)	※ファイターズ B☆B 参加
10:35	イベント②英語遊び(約30分)	↓
11:10	イベント③制作遊び(約30分)	
11:40	イベント終了・掃除	↓
12:00	昼食	弁当
13:00	学生向け研修(乗馬体験・乗馬療育学習) ※その他JRA施設見学、アイススケート体験、調理体験などから選択する形式で検討中	乗馬公園ほか
18:00	AERU着・夕食	AERU・バーベキューハウス
20:00	星空観察・記念撮影	JRA展望台付近
2/10(木)3日目		
7:30	朝食・各自準備など	AERU・レストラン
8:40	チェックアウト・出発	
9:00	文化会館着・準備	文化会館
10:00	イベント①②③ ※前日同様	※ファイターズ B☆B 参加
11:40	イベント終了・撤収作業	↓
12:30	昼食	弁当
13:30	浦河町出発	休憩(新冠)
16:30	大学着・荷物降ろし・解散	大学

◇会場：浦河町総合文化会館（浦河町大通3丁目52 TEL0146-22-5000）

文化会館ふれあいホール（メイン会場）、和室1・2・3（準備・控室）、第3研修室（学生控室）

◇参加学生：造形表現コース10名（朝地）、運動遊び指導実践コース10名（林）、
英語で遊ぼうコース9名（神林） 計29名

◇対象：1日目 雛菊保育所10名・くるみ保育所10名・フレンドようちえん15名 4～5歳児計35名
2日目 夢の国幼稚園・保育園 5歳児37名

◇担当：浦河町役場子育て医療課 小林課長、早坂さん

◇移動：大型バス（60人乗り）

◇宿泊：2月8～10日（2泊3日間）

うらかわ優駿ビレッジAERU（浦河町西舎141-40 TEL01462-8-2111）

◇費用：浦河町および札幌国際大学地域連携センター予算より支出

◇イベント実施前のコロナウィルス安全対策

※実施前の対策については、学科の実習時の事前準備に沿う。

※幼児教育保育学科の【新型コロナ対応フローチャート（チェックシート）】を参照し対応する。

・参加者（学生・教員）のイベント2週間前（1/25～）からの検温・体調記録、行動記録を行う。
⇒ゼミごとに、1週前の週末1/30(日)、直前の週末2/6(日)に、担当教員に報告する。

・イベント1週間前までに各自でPCR検査を実施し、結果を担当教員に報告する。

※ただし検査に要する時間や検査精度の関係で、抗原検査のみを行う方法に変更。

・2/8(火)（浦河への出発初日）の朝に各自で抗原検査を実施し、結果を担当教員に報告する。

・検温、体調チェック期間中に継続した発熱・体調不良があったり、イベント当日に発熱・体調不良がある場合は不参加。【相談・申告必須】

◇イベント開催時のコロナウィルス安全対策

・学生には1人ずつ、マスクを着用する。（必要に応じてフェイスガード）

・手指の消毒を徹底し、子どもへの接触への対策をする。

・複数の子どもや学生が触れるものはこまめな除菌をする。

・集合や整列、移動する際には各人の距離をとるよう動線を工夫する。

・対応する学生ができるだけ入れ替わらない（接触を減らす）ように担当範囲を決める。

・制作の際は、使用場所をシートごとに区切り、シート1枚ごとの子どもの参加人数を制限するなどして、子ども活動の範囲を決める。

・使用する用具は一式ごとに分けて用意し、参加者同士の用具の共有を減らす。

◇イベント時以外（移動・宿泊・食事）のコロナウィルス感染予防対策

・【三密回避、マスク、消毒】の徹底。

・原則として北海道の警戒ステージ（レベル3）に合わせた感染予防対策と、大学の対面授業実施と同様の感染予防対策、および使用する各施設の安全対策・安全基準に沿う。

◇イベント中止判断の検討

※以下の状況となった場合は、浦河町・国際大学担当者双方で実施判断を検討し方針を決定する。

・北海道の警戒ステージ4または緊急事態宣言に相当する状況になった場合。

・イベント前に大学の学生間で集団感染が発生した場合、および浦河町の関係者間で集団感染が発生、または町内で感染状況が拡大している場合。

◇公開講座① 運動遊び『スーパーヒーロー！！BB（ビックボス）を救え』 【約30分】

《主な内容》ビックボスを救うためにカラダを鍛え（サーキット）、敵を倒し（しっぽとり・爆弾ゲーム）、ビックボスを救う。

- (1)準備体操（さぁ！でかけよう）
- (2)サーキット遊びを通して、敵に勝つために体を鍛える
 - ・ケンパ・マット・巧技台・縄跳びなどのコースを作りサーキットをクリアする
- (3)敵の弱点をねらえ（しっぽとりゲーム）：敵の体につけられた「しっぽ」をとる
- (4)敵を倒せ（爆弾ゲーム）：新聞ボールを用意し、爆弾ゲームを行い、敵にたくさんのボールを投げる
- (5)敵からビックボスを救い出す

《事前準備》事前（12月21日）に付属認定こども園で予行練習を行い、その反省をもとに運動遊びの内容や指導方法の改善、準備を行った。



◇公開講座② 英語遊び『えいごであそぼう～かず・からだ～』 【約20分】

《主な内容》絵本の読み聞かせやゲームを通して、英語で数遊びをします。また、英語で体を使ったゲームやダンスをして遊びます。

- (1)英語絵本の読み聞かせ（プレゼンテーションで読み聞かせ）（プロジェクタ、スクリーン使用）
 - ・0～10までの数が出てくる英語の絵本について、学生が読み聞かせをする。
- (2)Number Bundle Game
 - ・絵本に出てくる歌を歌いながら、子どもたちは自由に動き回る。
 - ・音楽を止め、子どもたちは学生が言った数と同じ人数で素早く集まる。（他ゼミ学生は人数調整役として、適宜グループに加わる）
 - ・何回か活動を繰り返す。
- (3)Simon Says Game（船長さんの命令の英語版）（学生はステージを使用）
 - ・体を使ったまねっこをゲームの説明をする。“Touch your head.”と学生が言うと、その通りに子どもたちは行動する。
 - ・次に、まねっこをゲームがレベルアップした、Simon Says Gameの説明をする。学生が“Simon says, touch your head.”というと、子どもたちは学生の指示通りに行動するが、“Simon says”をつけないで言った時は、指示通りに行動しない、というルールを説明する。
 - ・何回か活動を繰り返す。
- (4)Hokey Pokeyの曲に合わせてダンスをする。（YouTube使用、可能であれば学生はステージを使用）
 - ・10～20名程度の大きな円を作る
 - ・子どもたちは歌を聴きながら、学生の動きに合わせて、ダンスをする。

《事前準備等》英語遊びの活動は“Tinny Boppers”という英語絵本の読み聞かせから始めることとした。選定の理由としては、小さくそして不思議な生き物であるポッパーたちが数を増やしながら飛んだり走ったりする楽しいストーリーであること、また簡単な英語表現が多く英語をはじめて聞く子どもたちも絵から内容理解ができることがあげられた。読み聞かせ練習では、ポッパーの「数とその動き」がよく分かるように、学生たちは繰り返し読むところや動きを見せる場面などについて熱心に打ち合わせを行った。

Number Bundle Game や Simon Says Game では、ルールの説明の仕方について学生たちは時間をかけて話し合っていた。また絵本との関連から数や体の動きに関する英語表現について、ゲームを通して子どもたちが聞いたり言ったりできるように心がけていた。

Hokey Pokey は右腕や左足などの体の部位を曲に合わせて動かす楽しいダンスである。子どもたちがタイミングよく体の部位を動かすことができるよう「Next. Left foot! 次は左足だよ。」と学生たちは子どもたちに伝える英語表現やその説明などを確認していた。

今回、子どもたちとの英語遊びの活動は実施できなかったが、臨機応変に実情に合わせて活動の内容を修正し考えたことは保育職に就くという近い将来に向けて実践力を高める1つのよい機会となった。



Hokey Pokey のダンスについて
模擬保育をしている様子

◇公開講座③ 制作遊び 『Child Artist ～えのぐパラダイス～』 【約40分】

《主な内容》大きな紙と絵の具を用意し、子ども達みんなで色々な道具を使ったり全身を使ったりして絵を描いて遊びます。

- (1)事前に大きいサイズの画用紙(230×240cm)を用意し、5か所(星形)に配置する。また星形の中央に絵の具を配る場所(絵の具工場)を作る。
- (2)学生からイベントの内容と遊び方(制作の仕方)を説明する。
- (3)汚れ防止のカップなどを着用する。
- (4)子どもを5グループに分け、それぞれに学生が2人ずつ付く。
- (5)5か所の大きい紙にグループごとに分かれ、子どもが使いたい用具と絵の具の色を選んで制作を進める。学生は制作の補助を行う。(他ゼミ学生は中央の絵の具工場に絵の具を配布)
- (6)あと片付け。作品はその場で乾燥させる(⇒園に飾る)。
- (7)完成した作品の前で、子どものグループごと、子どもと学生などで集合写真を撮影する。

《事前準備》学生同士がアイデアを出して話し合った結果、主な遊びの内容として大きい紙を使った絵具遊びをすることになった。試作を通して、色々な道具や材料で色の付け方を試しながら工夫や注意のポイントを見つけていったり、本番の紙のサイズをどのくらいにするかや、どう子ども達に遊んでもらい自分達が関わるか、材料や用具は何が必要かなどを相談した。また、大きい紙を使う以外の絵具遊びのバリエーションを学生が持ち寄り、子どもが扱えるかを確認しながら検討した。



【幼児期からの学びの土台づくり事業 概要】

報告者：林 二士

全国的に子どもの体力や運動能力の低下が指摘される中、北海道の子どもの体力・運動能力は全国平均を下回っている。また全道における日高管内の学力低下や、体力・運動能力の低下は著しい傾向にあり、浦河町においても深刻な状況となっている。浦河町ではその改善策として、子どもたちの学びに向かう姿勢や意欲、基礎体力の向上を目指すことを目的に、平成30年度より「幼児期からの学びの土台づくり事業」を開始した。この事業では「幼児の運動遊び」を契機とし、町内の幼稚園・保育所の幼児の運動能力調査、町内の保育士向けの講座、親子向けの講座、子育てサークルへの講座などを展開し、今年度で4年目の事業となる。

本年は、昨年と同様に新型コロナウイルスの影響から、予定されていた事業が中止となる中、各園で行われている運動能力調査、11月には荒牧光子氏（遊び塾はらっぱ）をお呼びし、親子向けの講座「親子ふれあい遊び」、保育士向けの実技講座「遊び心を楽しもう」を開催した。

*札幌国際大学 地域・産学連携センター年報（WEB）第5号 浦河町・札幌国際大学地域連携事業報告（令和2年度） 参照

【過年度事業内容】

◇2016(平成28)年度

- ・4/15 協定締結（浦河町役場）
- ・6/25・26 [観光分野] 地域PRプロジェクト 浦河かつめし・特産品販売（札幌国際大学）
- ・12/7・8 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇・ハンドベル合同公演（浦河町総合文化会館）

◇2017(平成29)年度

- ・6/24・25 [観光分野] 地域PRプロジェクト 浦河餃子羽根付き餃子丼・特産品販売（札幌国際大学）
- ・6/18 [スポーツ分野] 健康講座 「肩こり解消！ストレッチング」（浦河町総合文化会館）
- ・2/6・7 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演（認定こども園夢の国幼稚園・保育園、雛菊保育園）

◇2018(平成30)年度

◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業講座

- ・8/1 「子どもの体力や運動遊びについて 浦河の現状と課題」（浦河町生涯学習センター） 保育士等25名
- ・11/14 「幼児の運動遊び」実技講座（浦河町ふれあい会館） 保育士等25名
- ・11/14・15 「幼児運動能力検査」（浦河町ファミリーサポートセンター） 3歳～5歳児220名
- ・11/1 親子体操教室「家庭でできる運動遊び」（浦河町堺町体育館） 3～5歳児親子30組
- ・2/12 振り返りの講座（浦河町役場） 保育士等25名

◎2/12～14 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演（東町保育所、東部保育所、荻伏保育所）

◇2019(令和元)年度

◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業講座

- ・7/10～24 運動遊びの巡回指導実践（町内幼稚園・保育所6か所） 園児・保育士等30名
- ・10・11月 「幼児運動能力調査」 3歳～5歳児220名
- ・10/19 親子体操教室「家庭でできる運動あそび」（浦河町堺町体育館）3歳～5歳児親子30組
- ・11/13 乳幼児向け教室（親に向けてミニ講習） 3歳～5歳児親子30組
- ・2/18 振り返りの講座（浦河町役場） 保育士等25名

◎2/16～18 [子育て支援分野] 公開講座 人形劇公演（くるみ保育所、フレンドようちえん）

◇2020(令和2)年度

◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業講座

- ・ 10・11月 幼児運動能力調査（町内保育所等 3～5歳児対象 229名）
- ・ 2/17 振り返りの講座（浦河町役場） 保育士等 20名

◎2/8～10 [子育て支援分野] 公開講座（浦河町総合文化会館）

- ・ 公開講座① 運動遊び『レッツ！エンジョイ！うらかわオリンピック』
- ・ 公開講座② 制作遊び『みんなでへんしん！わくわく隊！』
- ・ 対象 2/9 荻伏保育所・東部保育所 幼児約 25名／2/10 東町保育所・フレンドようちえん 幼児約 30名

◇2021(令和3)年度

◎ [子育て支援分野] 幼児期からの学びの土台づくり事業講座

- ・ 10・11月 幼児運動能力調査（町内保育所等 3～5歳児対象 227名）
- ・ 11/11 親子向けの講座「親子ふれあい遊び」、保育士向けの実技講座「遊び心を楽しもう」を開催
講師：荒牧光子氏（遊び塾はらっぱ）

◎2/8～10 [子育て支援分野] 公開講座（浦河町総合文化会館） ※事業中止（当初予定の内容）

- ・ 公開講座① 運動遊び『スーパーヒーロー！！BB（ビックボス）を救え』
- ・ 公開講座② 英語遊び『えいごであそぼう～かず・からだ～（仮）』
- ・ 公開講座③ 制作遊び 『Child Artist ～えのぐパラダイス～』
- ・ 対象 2/9 雛菊保育所 10名・くるみ保育所 10名・フレンドようちえん 15名 4～5歳児計 35名
2/10 夢の国幼稚園・保育園 5歳児 37名

令和 3(2021)年度 奨励研究 調査研究報告

地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究Ⅱ
～連携自治体におけるリーダー育成プログラムの検討～

札幌国際大学

目 次

I 研究概要

- 1 研究の目的
- 2 研究組織
- 3 推進体制
- 4 調査研究方法・スケジュール

II 活動概況

- 1 健康チームフィールドワーク(11.20-21)
- 2 観光チーム ～先輩学生が後輩学生に繋ぐ地域課題解決と
自己成長を育む地方版インターンシッププログラムの試行～
- 3 健康チーム①「ノルディックウォーキング解説動画の作成」
- 4 健康チーム②「IMAKANE～スマイルダンス～解説動画の作成」

III 調査研究の成果と課題

- 1 町民の健康の維持・増進ツールの取組①
～ノルディックウォーキングの普及・促進を目指して～
- 2 町民の健康の維持・増進ツールの取組②
～「IMAKANE～スマイルダンス～」の発展的活用を目指して～
- 3 地域課題と自己成長を達成する地方版インターンシッププログラムへのアプローチ

IV 今年度の調査研究を終えて

【資料】

I 研究概要

1 研究の目的

本学と地域連携協定を平成 24(2012)年度に締結した今金町は、農業が盛んで日本一の「今金男爵」など多くの農産物をはじめ、美しい自然環境、歴史的史跡も数多く残されており、地域資源に恵まれた自治体である。しかし、少子高齢化や人口減少をはじめ、地域資源の有効活用など、地域課題が山積している状況にある。

そこで、前年度の奨励研究では、今金町の地域課題である高齢者の健康をテーマとして、リーダー育成モデルプログラム試案を検討すると共に、科目（活動）展開における資料等を得ることを目的として研究をスタートした。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、スケジュールの変更を余儀なくされた。

最終的には、今金町で FW を実施することができず、課題解決策として「健康体操動画」の企画・作成を行った。町職員による出前講義や道立青少年教育施設での宿泊研修、さらには、学内でのオンラインによる協議等を重ね、コロナ禍であったが、目的とした資料を一定程度収集することができた。

そこで、今年度は、今金町の地域課題について、昨年度実施することのできなかった現地での実践的な活動(FW)を中心に据え、学生自らが解決策の企画・実施等を通して、リーダー育成や新カリキュラムの展開における資料等を得ることを目的として実施する。

今金町の主要地域課題である健康をテーマとして、前年度制作の成果物の活用方策をはじめ、子供から高齢者までの健康増進事業の企画・実施等を行う。さらに、今年度は、観光学部の学生の参画によって、地域観光振興という地域課題へのアプローチも行い、プログラムを他学部で実施する場合の資料等も得ることとする。

なお、本研究にかかわる教員・学生の健康を第一に考え、新型コロナウイルスの感染拡大の際には、大幅な計画変更も視野に入れ、可能な範囲での研究や活動を進めることとした。

2 研究組織

本研究は、以下の者が担当する。

(代表)	スポーツ人間学部スポーツビジネス学科	教授	佐久間章
	スポーツ人間学部スポーツビジネス学科	教授	赤川智保
	スポーツ人間学部スポーツビジネス学科	講師	田部井祐介
	スポーツ人間学部スポーツビジネス学科	講師	横山克人
	スポーツ人間学部スポーツビジネス学科	助教	栗野祐弥
	スポーツ人間学部スポーツ指導学科	講師	本多理紗
	観光学部観光ビジネス学科	教授	千葉里美
	観光学部国際観光学科	教授	金庭香理

*今金町担当部署 今金町まちづくり推進課

3 推進体制

本研究は、スポーツビジネス学科所属教員が中心となり、学科のリーダー学生をモデルに、今金町をフィールドとして実践的な活動を試行実施する。なお、スポーツ指導学科所属本多教員については、健康増進をテーマにゼミ活動を展開していることから、スポーツビジネス学科学生へのピアサポートの効果を検証するために3・4年生のゼミ学生と共に参画する。また、観光学部の学生参画については、一昨年まで同プロジェクトメンバーであった観光ビジネス学科の千葉教員が学生の選出及び指導を担当する。なお、今金町は、まちづくり推進課が連絡調整の担当窓口となった。

4 調査研究方法・スケジュール

本研究は、研究担当者がそれぞれの学生グループを担当し、学生の活動を参与観察すると共に事前事後のアンケート調査やヒアリング等を通して、地域課題の解決に焦点を当てたリーダー育成モデルプログラムや、新カリキュラム作成の資料等を得る。

(1) 活動チーム

地域課題別に、2つのチームに分け研究・活動を推進した。スポーツ人間学部の学生は、健康をテーマとして、前年度制作の成果物の活用方策をはじめ、子供から高齢者までの健康増進という課題解決に取り組んだ。一方、観光学部の学生は、地域観光振興という地域の課題解決に取り組んだ。

【表1】参加学生と所属学科・学年

No	所属学科	学年	男女
1	スポーツ指導学科	4年	男性
2	スポーツ指導学科	4年	女性
3	スポーツ指導学科	4年	男性
4	スポーツ指導学科	4年	男性
5	スポーツ指導学科	4年	男性
6	スポーツ指導学科	4年	女性
7	スポーツ指導学科	4年	男性
8	スポーツ指導学科	4年	男性

No	所属学科	学年	男女
1	スポーツビジネス学科	3年	男性
2	スポーツビジネス学科	3年	男性
3	スポーツビジネス学科	3年	男性
4	スポーツビジネス学科	3年	男性
5	スポーツビジネス学科	3年	男性
6	スポーツビジネス学科	3年	男性
7	スポーツビジネス学科	2年	女性
8	スポーツビジネス学科	2年	男性
9	スポーツビジネス学科	2年	男性
10	スポーツビジネス学科	2年	男性
11	スポーツビジネス学科	2年	男性
12	スポーツビジネス学科	2年	男性
13	スポーツビジネス学科	2年	女性

No	所属学科	学年	男女
1	観光ビジネス学科	3年	男性
2	観光ビジネス学科	3年	男性
3	観光ビジネス学科	3年	女性
4	国際観光学科	3年	女性

(2) 調査研究スケジュール

昨年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、当初の調査研究スケジュールに即した実施ができず、大幅な計画の変更を余儀なくされた。特に、現地(今金町)において現状と地域課題の把握のためフィールドワークを実施することができなかったことが大きい。しかし、今金町の理解のために、同町職員による出前型の研修を行うなど、コロナ禍であっても可能な範囲で活動を行った。最終的には、健康増進プロモーションビデオ「今金版 いきいき健康体操～元気にエクササイズ～」を企画・作成し、同町への贈呈を行ない、一定程度の活動の成果は得られた。

今年度は、新型コロナウイルスの感染状況の推移をみながら、現地(今金町)での現状と地域課題の把握のためフィールドワークなど、現地での活動を重視した計画を行った。11月の現地フィールドワークは実施することができたものの、その後の活動については、前年度同様に計画を変更せざるを得ない状況となった。

■調査研究スケジュール(当初計画)

- 9月下旬 第1回フィールドワーク 現地見学及び現状と課題の把握(今金町)
- 10月中旬～ 第2回フィールドワーク プロモーションイベント等の実施(今金町)
- 2月中旬 今金町において活動成果の発表(今金町)

■調査研究のスケジュール(実施経過)

スポーツ人間学部(テーマ:健康)

- 11月7日～8日 第1回フィールドワーク 現地見学及び現状と課題の把握(今金町)
- 11月中旬～1月 学内においてシナリオの検討・台本作成等(於:大学)
- 2月中旬～3月上旬 演技練習・リハーサル及び撮影(於:大学)
- 3月29日 成果物の贈呈及び披露

観光学部(テーマ:地域観光振興)

- 9月3日-10日 今金町インターンシップ派遣(8日間)予定であったが、コロナ感染拡大による緊急事態宣言発令のため延期
- 10月15日-22日 今金町インターンシップ派遣・中間成果報告会
- 10月下旬以降 2チームに分かれての作業(～最終成果報告会まで)
- 12月16日 最終成果報告会・意見交換会

II 活動概況

1. 健康チームフィールドワーク 令和3年11月20日(土)～21日(日)

(1)目的 今金町の主要施設等の現地視察及び副町長の講話・意見交換を通して、現状と課題についての理解を深める。さらには、課題解決のために、健康・スポーツの学びを活かして、何ができるのかについて、考える。

(2)日程

▶11月20日(土)

9:00	集合	9:15	バス乗車・出発
13:00	クアプラザピリカ着		
		■今金町美利河地区の現地調査	
		クアプラザピリカ → ピリカ旧石器文化館 → ダム湖周辺	
15:30		■今金町市街地区の現地調査	
		町民体育館 → フットパスコース → その他	
19:00		■ミーティング・G 協議	
		・本日のふりかえり	
		・ラベルワーク(今金町の魅力、課題、解決のために)	
		・翌日の活動・日程について	

▶11月21日(日)

9:00		■グループ活動「今金町魅力の1枚」	
		*グループごとに散策しながら、町民センターに向かう。	
		課題「今金町の魅力を1枚の写真で表現する」	
10:00		■副町長講話、テーマ【小さな町の挑戦】	
		・「今金町魅力の1枚」の発表	
		・副町長との懇談 ～学生が考える今金町の魅力、ほか～	
12:30	町民センター	出発	
16:00	大学着	解散	

(3)活動概況

①今金町美利河地区の現地調査（ピリカ旧石器文化館、ピリカダム湖周辺）



②今金町市街地の現地調査（光大橋、デ・モーレン、総合体育館「あいきゅーぶ」）



③グループミーティング



④グループ活動「今金町魅力の1枚」



⑤副町長講話、テーマ【小さな町の挑戦】

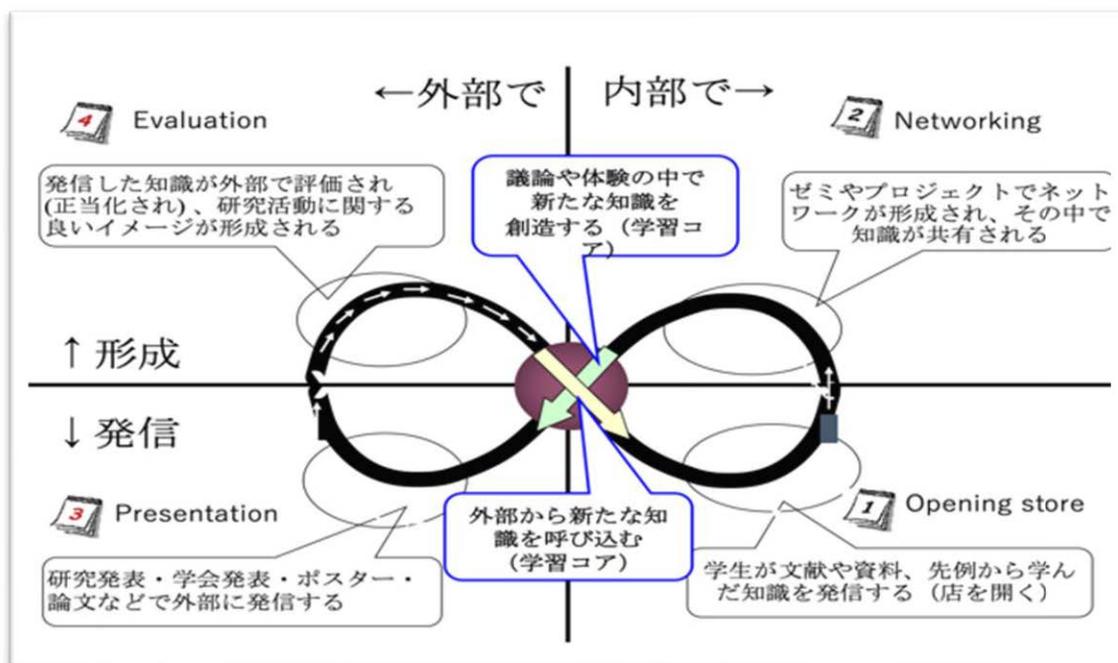


2. 観光チーム ～先輩学生が後輩学生に繋ぐ地域課題解決と自己成長を育む 地方版インターンシッププログラムの試行～

(1)本プログラム試行に向けたこれまでの経緯と活動目的

令和元(2019)年度奨励研究「連携自治体におけるインターンシップの可能性-課題設定と評価方法を中心に-」では、大学でインプットした知識をどう創造させ新しい需要を喚起させるかが常に問われる観光や地域づくり分野にとって、対象地域に暮らしながらの課題解決型インターンシップを敷田(2002)が提唱する学修モデル「知識創造サーキッドモデル」をベースに実施した。結果、このサーキッドモデルを意識したインターンシッププログラムを構築することで、エンプロイアビリティの醸成、状況把握力、汎用性等の学習コアと同時に社会人基礎力向上といった学生の自己成長も育むことができることを考察した。しかしながら短期での派遣では、内部(学生グループ)と外部(役場職員や地域住民)の議論や評価から生まれる新たな知識を創造する学修コアが高く積み上がりながら地域側が期待するほどの課題解決まで踏み込めないでいた点、現地で指摘を受けた事項を大学に持ち帰り再度ブラッシュアップさせて再提案するといったやり抜く力に課題を持っていた。加えて、2020年1月に世界を襲った COVID-19 感染拡大により働き方が変わりそれに必要な学生時代に身に付ける能力も変化するニューノーマル時代に突入した。このニューノーマル時代をサバイブするためにとの思いで発行された『新しいキャリアデザイン』(2021.見館他)によれば、学生時代に身に着ける5つの原則(マインドセット、エクスペリエンス、リーダーシップ、データ、スキル)が提唱されている。

そこで2021年度の本プロジェクトは、大学インターンシップ科目にて公募した観光学部学生4名を対象に、今金町役場で実習を受けながら地域の課題解決に取り組み、参加学生が後輩学生に繋ぐ地域課題解決と自己成長が達成できるリーダーシップ育成インターンシッププログラムを作成し、次年度インターンシップの募集活動・選考までを実施することを目的とする。



(2)参加学生

観光学部観光ビジネス学科 3 年 3 名、 観光学部国際観光学科 3 年) 1 名

(3)スケジュール

本活動は、2022 年春学期開講「インターンシップ」にて後輩学生募集活動・選考までとすることから 4 月以降の活動には「予定」と記載する。

◇2021 年

5 月初旬 インターンシップ公募開始

5 月中旬 インターンシップ事前教育(～7 月下旬まで)

6 月初旬 インターンシップ派遣先選考・面接・発表

7 月下旬 参加学生のための事前教育

9 月 3 日-10 日 今金町インターンシップ派遣(8 日間)予定であったが、コロナ感染拡大による緊急事態宣言発令のため延期

10 月 15 日-22 日 今金町インターンシップ派遣・中間成果報告会

10 月下旬以降 2 チームに分かれての作業(～最終成果報告会まで)

12 月 16 日 最終成果報告会・意見交換会

◇2022 年

2 月中旬 今金町から学生評価の提出

今金町から次年度インターンシップ採用プランの発表(フィードバックコメント含む)

4 月初旬 学生へ評価と採用プランに関する情報共有(予定)

2022 年度インターンシップ募集に向けた取り組み準備(予定)

(4)活動概況

5 月から 7 月下旬に実施したインターンシップ事前学習は、大学の正規授業科目としての教育プログラムである。本報告書では、本活動の根幹部分となる 10 月に実施したインターンシップ派遣・成果報告会と 12 月に実施した最終成果報告会・意見交換会についての概況を報告する。

インターンシップ派遣・中間成果報告会(10 月 15 日-22 日)

次の表は、今金町よりご用意頂いた参加学生の 8 日間研修プログラム内容である。今年度研修プログラムでは、美利河地区の宿泊施設「クアプラザピリカ」が季節限定で運営するキャンプ場を体験し、その促進案を考えることも活動内容として予定していたが、悪天候となり 2 日目のキャンプ場視察は実施できなかったが、宿泊体験はできていない。研修中の宿泊先は、2 年前に実施したインターンシップ同様、今金町役場より徒歩 2 分のワーキングステイ@いまかねとし、学生 4 人の共同生活とした。

	9~10	11~12	12~13	13~14	14~15	15~16	16~17:15	
DAY1 「オリエンテーション」 10月15日(金)	9:00 大学出発 13時着予定		昼休	庁舎挨拶 庁舎見学・町内視察 フットバスコース	国際大との 域学連携の歩み ※町の視点から見る 域学連携の意義		課題の提示 今日のまとめ	
DAY2 「キャンプ・美利河」 10月16日(土)			昼休	地域資源を 生かした体験① ・スタンプラリー ・サイクリング	15:00チェックイン キャンプ体験		今日のまとめ クアブラキャンプ 宿泊	
DAY3 「キャンプ・美利河」 10月17日(日)	○クアブラ業務インターン 9:00~11:00頃まで 地域資源を生かした体験② 旧石器文化館		昼休 贈り付き クアブラ昼食・帰宅					
DAY4 10月18日(月)	9:00~10:30 役場の仕事/職員とは① 副町長より講話	総合計画 からみる 役場の仕事	昼休	13:30~15:00 今金男しゃく選果場 ほ場見学	地域おこし協力隊 の制度について 地域おこし懇談		今日のまとめ	
DAY5 10月19日(火)	8:30ミーティング後 美利河へ出発 9:00着	クアブラザビリカ業務インターン 昼贈り付き 温泉掃除・客室清掃・イチゴハウス収穫等・ リフト取り付け作業等 (着替え・タオル・暖かい恰好)				16:40美利河出発		今日のまとめ

	9~10	11~12	12~13	13~14	14~15	15~16	16~17:15
DAY6 10月20日(水)	ビリカプロジェクトから見る 今金の観光課題① ・グランピングアイデア		昼休		ビリカプロジェクトから見る 今金の観光課題② ・美利河地区の資源活用		今日のまとめ
DAY7 10月21日(木)	インターンの振り返り ~アンケート・課題作成~		昼休	インターンの振り返り ~アンケート・課題作成~			学生発表
DAY8 10月22日(金)	退去手続き 午前中今金出発						

■ 庁舎挨拶まわり



■ 地域資源を生かした体験①-魚道



■ 地域資源を生かした体験②-旧石器文化館



■ 今金男しく選果場ほ場見学



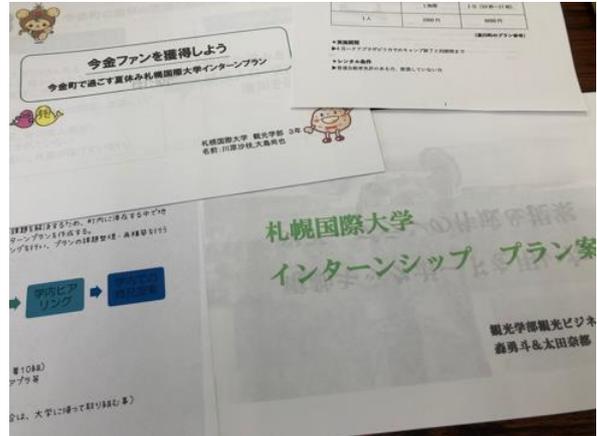
■ クアプラザピリカ業務インターン



■ 研修中グループワーク



■中間報告会-発表・学生作成配布資料



■中間発表後の振り返り

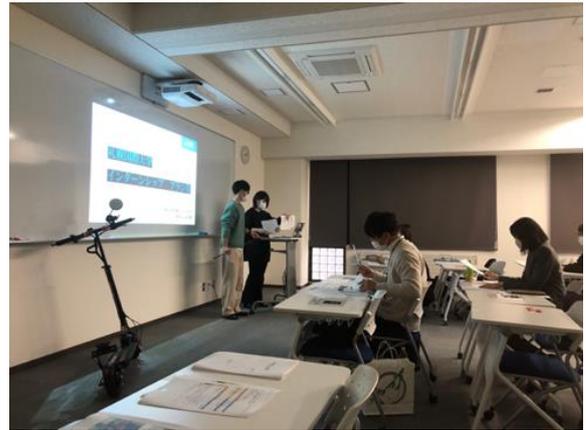


最終報告会(12月16日)

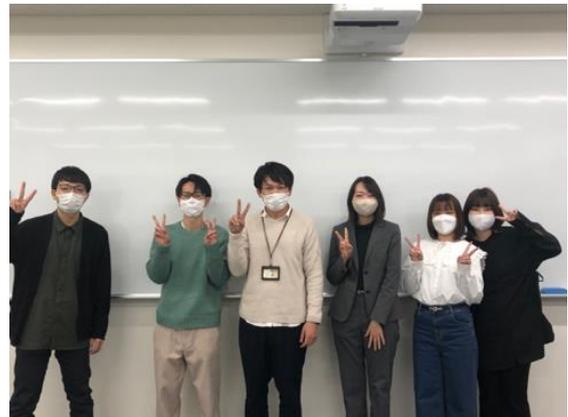
最終報告会開催場所は札幌国際大学とし、今金町からはインターンシップ指導職員の木元様と加藤様、大学からは本研究代表の佐久間先生、観光ビジネス学科長の藤崎先生、国際観光学科長の齋藤先生、その他学生が招待した教職員が最終報告会に参加して頂いた。また最終報告会后、最終報告に関する意見交換会の場を設けた。

なお、当日の最終報告会で使用したパワーポイントや補足資料は、資料編にて掲載する。

■最終報告会時の発表



■意見交換会と記念撮影



3. 健康チーム①「ノルディックウォーキング解説動画の作成」

- ▶ 2021年12月4日(土)8時～13時

市民向けのノルディックウォーキングを実践し、ポールの使用方法、歩き方、指導方法等を実践の場を通して再確認を行なった。



ノルディックウォーキング実践①



ノルディックウォーキング実践②



←活動の振り返り

- ▶ 2021年12月15日(水) 13時～16時10分

DVD を制作するためのチーム編成を行った。どのような内容のチーム編成にするかを話し合い①ノルディックウォーキングについて②正しい歩き方について③準備体操・整理体操の3つのチームを編成した。チームは、3,4年生合同で編成し、4年生がリーダーシップを取りつつ、3年生が主体的に活動できるよう4年生が配慮しながら活動を開始した。

- ▶ 2021年12月22日(水) 13時～16時10分

各チーム毎に参考書や文献等を調べ話し合いを進めた。実践してきた内容をさらに細かく確認をし、各チームの大きな内容を決定した。



ノルディックウォーキングについてチーム→



正しい歩き方についてチーム



準備体操・整理体操チーム

▶ 2022年1月26日(水)9時半～15時半

各チームに分かれて具体的な内容を決定し、出演者、動き、テロップ、ナレーションのセリフ等を絵コンテに書き出し、リハーサルを行いながら確認を行った。



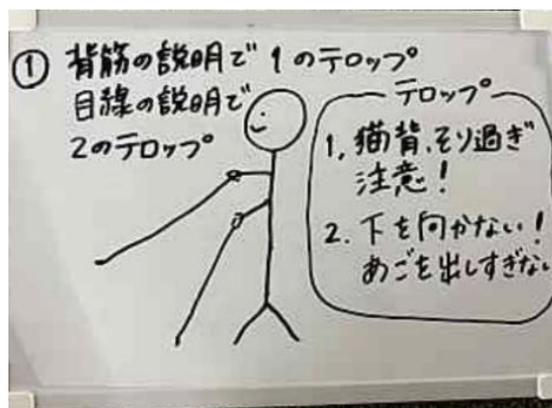
ノルディックウォーキングについてチーム



整理体操・準備体操チーム



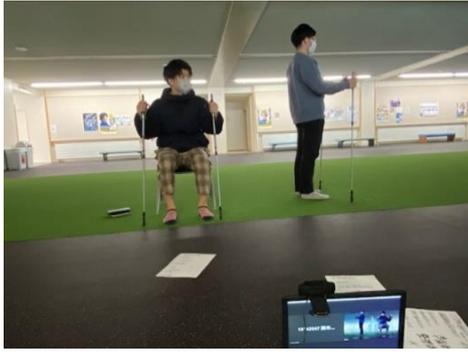
歩き方チーム



絵コンテ

▶ 2022年1月27日(水)13時半～16時

26日(水)に終了しなかった2チーム(正しい歩き方チーム、準備体操・整理体操チーム)が集まり、詳細を確認した。



準備体操・整理体操の確認



準備体操・整理体操の修正・確認



←正しい歩き方の確認

▶ 2022年2月14日 10時～15時

「ノルディックウォーキングについて」、「正しい歩き方」、「準備体操・整理体操チーム」の順番に撮影を行った。



ノルディックウォーキングについて撮影



正しい歩き方について撮影



準備体操・整理体操の撮影



DVD 導入の撮影



DVD 導入の撮影



静止面の撮影(道具について)

- ▶ 2022年2月28日(月)10時~12時
動画の最終チェックと、DVDのパッケージのデザインを
考案した。

ZOOMでの打ち合わせ →



- ▶ 2022年3月1日(火)14時半~15時半
DVDのパッケージの写真撮影・DVDの説明用紙の撮影を行った。



DVDのパッケージの写真撮影①



DVDのパッケージの写真撮影②



DVDのパッケージの写真撮影③



DVDのパッケージの写真撮影④

4. 健康チーム②「IMAKANE～スマイルダンス～解説動画の作成」令和4年3月1日(日)

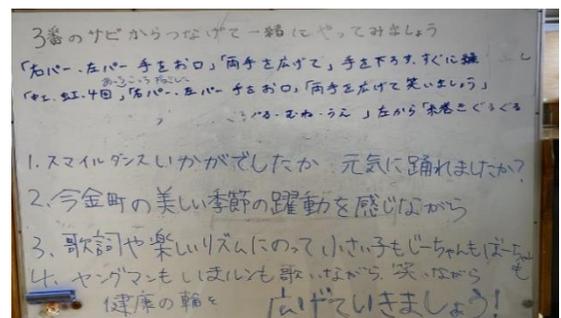
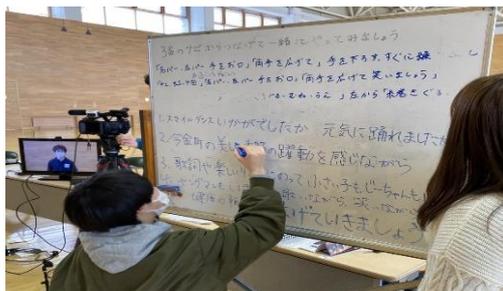
撮影場所(札幌国際大学第一体育館)へ撮影機材を搬入、セッティング後、進行台本をもとに、本日の撮影の進行について打ち合わせを行う。



2名の学生によるナレーションの読み合わせを、撮影シーンに添って行う。



演技とナレーションを同時に進行するため、台詞を書き出したボードと、横並びの演技者の振りが見えないように確認するための特大の可動式ミラーを、演技者の対面に設置する。



ナレーターは台本を、演技者はボードに書かれたセリフを、それぞれ確認しながら、何度も合わせ稽古を重ね、カメラテストやリハーサルを念入りに行う。



ダンスの振付の解説は前半と後半に分けられ、さらに「立って踊るバージョン」と高齢者のための「座って踊るバージョン」とし、ダンスの説明を受けて、実際に言葉で説明しながら進行する。



振付の動作を共通の言葉で、観る人の世代に関係なく伝わるように表情も意識しつつ、音楽のリズムに乗りながら4名でフルバージョンを踊る。



学生ダンスバージョンでは、他学科の学生も参加し、ドローンも使って撮影、ダンスの楽しさが伝わるように構成する。



学生ダンスバージョンの振付のレクチャーは、学生によるピアサポートを受けて撮影に臨む。



特色のある歌詞は覚えやすく、ダンスの楽しさに自然と笑顔が溢れる収録となる。

Ⅲ 調査研究の成果と課題

1 町民の健康の維持・増進ツール作成の取組①

～ノルディックウォーキングの普及・促進を目指して～

(1)ノルディックウォーキングとは

ノルディックウォーキングは、専用のポールを使用し、年齢・例別・身体能力にかかわらず、誰もが無理なく始めることができ、自分のペースで楽しむことができるフィンランド生まれのスポーツである。ノルディックウォーキングは、通常のウォーキングよりも運動量が多くなるにもかかわらず、膝や足への負担は大きくならないため、生活習慣病やメタボリックシンドローム、ロコモティブシンドローム等の運動療法等として期待が寄せられている。また、高齢者の歩行能力に対する効果やリハビリテーション効果などの様々な効果があり、安全に運動効果をより実感できるものである。なお、現在はコロナ禍での活動制限・運動不足やストレスから、心身に悪影響をきたす健康二次被害が懸念されており、適度な運動やスポーツを行うことが推奨されている。ノルディックウォーキングは、コロナ禍でも密を避け楽しむことができるスポーツである。北海道では、「北海道ノルディックウォーキングネットワーク」や「NPO 法人ノルディックウォーキング学校」の団体が中心となり、指導者の養成やイベント等を通してノルディックウォーキングの普及・促進を目指している。

平成 27 年度、平成 28 年度に今金プロジェクトとして、フットパスコース（ふれあいコース・所とフットパスコース・くもかぜコース・田園コース）を作成した。今金町の市街地や田園風景を楽しみながら歩けるフットパスコースをノルディックウォーキングをすることで、より安全で、運動効果が期待できる。そのために、ポールを正しく使用し、楽しく歩くためにノルディックウォーキングの基本がわかる DVD の作成に取り組むこととなった。

(2)学生の取り組み

4 年生においては、コロナ禍において、活動の中止や制限が多くあったものの、ゼミのフィールドワークとしてノルディックウォーキングは行っており、各地域で行われているノルディックウォーキング教室（年 2 回～4 回）や健康体操教室に参加し、子どもから高齢者までの幅広い年齢層への対応や実技指導を経験している。3 年生においては、コロナ禍において活動が十分ではなく、数回のノルディックウォーキング教室に参加したのみであり、参加者への対応等もまだ不十分である。このことをふまえて、ノルディックウォーキングの運動指導や今後の活動において 3 年生が主体的に自主的に活動ができるよう 4 年生が 3 年生を育成を行った。

DVD の作成にあたり、3 つのチーム「ノルディックウォーキングについて」「正しい歩き方」「準備体操・整理体操」に分類し、4 年生が 3 年生を直接指導できるように構成をした。

「ノルディックウォーキングについて」チームは、基本的な概要や効果、ポールについて、使用方法等を書籍や論文等の文献をもとに作成を行った。「正しい歩き方」チームは、歩く姿勢や歩き方について書籍等をもとに実践を繰り返しながら作成をし、「準備体操・整理体操」チームは、実践してきた内容にアレンジを加え、座位と立位での体操ができるよう作成を行った。

(3)まとめ

1)3年生を育成するために工夫したことや努力したこと

- ①リーダーを育成するという視点において4年生は、3年生の意見を上手く誘導し、出てきた意見を肯定しつつ、できる限りその意見を活かし作成を進め、4年生が活動を通して経験していきたくことや知識を伝える努力を行った。
- ②ノルディックウォーキングの技術や知識のみならず、指導を受ける側の立場も考え、どのようにすれば伝わりやすく、わかりやすいのかを考えることが大切であるということも伝えるように心掛けた。
- ③4年生のチームとしての進行の仕方や情報のまとめ方などを見ながら3年生に学んでもらえるように自ら積極的に行動をした。
- ④今後、3年生が主体的に行動・活動ができるように話を振り、それを広げたり、考えさせ、答えを導いた。動画の出演も3年生を中心にし、責任感を持たせた。

2)4年生の視点から3年生が成長したこと

- ①積極的に意見を述べるができるようになり、主体的に取り組む姿勢がみられた。
- ②自分のやるべきことに責任を持ち参加するようになり、お互いの意見を尊重しあうようになった。

3)4年生自身が成長したこと

- ①自身で作業を背負いこんでいたこともあるが、指示を出し、効率的に物事に取り組むことができるようになった。
- ②3年生と一緒に1つのことを作成する上で、自分の意見をしっかり伝えることができるようになった。
- ③ノルディックウォーキングの理解が深まったとともに人に伝える力がついた。

4年生の今金プロジェクトへの振り返りにより、3、4年生が合同となり活動をする中で3年生は、4年生の活動に取り組む姿勢を目の当たりにし、より積極的に活動を行い、指導者側、DVDを見る側の視点から主体的・自主的に行動するようになるなどの行動変容がみられた。また、4年生においても自身の指導力の向上やリーダーを育成するにあたり、実践を通してできることが多くあり、成長ができたと考えられる。このように今後も実際に様々な活動の経験を積んだ上級生からのピアサポートは、リーダー育成においても大切であると考えられる。また、コロナ禍において活動が制限される中での、ピアサポートの在り方も課題としてあげられるのではないかと考える。

(本多 理沙)

【参考文献】

日本ノルデックフィットネス協会監修 ノルディックウォーキング 三浦望慶 竹田正樹 高橋直樹 富岡徹 藤田和樹

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop05/jsa_00010.html

2 市民の健康の維持・増進ツール作成の取組②

～「IMAKANE～スマイルダンス～」の発展的活用を目指して～

今年度は「今金町まちづくり推進課」(今金町担当部署)より、昨年度プロジェクトで制作した「I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」を、さらに幼児から高齢者に向けて広く健康増進のため活用したいという依頼を受け、「I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」(以下スマイルダンスと呼ぶ)の振付を分かりやすく説明するツール(映像やナレーション、文面での解説)作成に取り組むこととなった。この「スマイルダンス」は、本学科の専門科目である「ヘルスプロモーション演習」においても取り上げ、様々な立場や世代を超えて、健康増進のために楽しんで体を動かす学びや研究を積み上げた学生たちが、さらに学びを発展させ、深めることができる機会でもあった。

(1) 「I・MA・KA・NE～スマイルダンス～」とは

この「スマイルダンス」は、昨年 2020 年、今金町の地域課題である高齢者の健康をテーマに企画・作成した、高齢者のための健康増進プロモーションビデオ「今金版 いきいき健康体操～元気にエクササイズ～」の一環として考案したオリジナルのダンスである。

ダンスには、心や体を同時にリラックスさせ、癒す効果があり、言葉を用いず他者と一緒に踊ることで気持ちを共感することができる、ノンバーバルなコミュニケーションツールである。また、自分の身体能力に合わせて無理をすることなく、音楽のリズムに合わせて歌いながら体を動かすという適度な有酸素運動は、意識することなく自然に、鼻から息を吸って口から息を吐くという、身体のために望ましい呼吸法となり、交感神経と副交感神経のバランスを整え、自律神経を安定させることで心身をリフレッシュして、ストレスの解消にもつながる。

振付は簡単な日常の動作(ジャンケンのグーやパー)をモチーフとし、指を広げる、肘を伸ばす、腕をあげる等が組み合わさっており、これらの上半身の腕と手指を心臓より高い位置で動かすことで、心臓に血液を戻し、手指のむくみを取り、肩こりの解消などにも効果が期待できる。また、この「スマイルダンス」は立ったままだけでなく、椅子に座ったり、ベッドに仰向けに寝たままだったり、その時の体調に合わせたわずかな場所や空間で踊ることが可能で、約 3 分間のダンスを 3 回繰り返すと約 10 分間の有酸素運動となるよう設計されている。また、1 番から 3 番まで振付は変えず同じ動きを繰り返していることもこのダンスの特徴で、誰でも 10 分間、ただ黙々と運動するのは単調で続かないものだが、歌詞に思いを馳せることであっという間に時間が過ぎ、また踊りたくなる元気がわき上がるように工夫されている。何より、音楽自体が今金町をイメージした歌詞となっているので、地元の人にもすぐに馴染むことができ、高齢者から幼児まで幅広い世代の方々が同時に、一緒にリズムに乗って楽しみながら、健康増進に役立てられるように考案されている。

(2) 映像で解説するにあたって

この「スマイルダンス」の振付を活かしながら、幼児から高齢者まで幅広く解説するツールを作成するにあたり、担当するチームのメンバーで事前に話し合いが行われ、幼児から高齢者まで様々な世代の方が「楽しく」「分かりやすく」「覚えやすい」解説ツールにするために、動画による説明と、文書での解説の二つを作成することにした。新型コロナウイルス症蔓延防止対策が発令されているさなか、濃厚接触者となり自宅自粛など活動制限下にあるメンバーが後を絶たないこともあり、オンライン、対面、メールやライン等を組み

合わせて、作業ができる機会を有効に活用し、それぞれの回路で情報交換しながらスケジュールを立て、映像の撮影まで2年生を中心に活動を開始した。

この「スマイルダンス」を分析すると、1番から3番まで同じ振りの繰り返しで、歌詞の1番は今金の特産物、2番は今金の風物詩、3番は今金の四季と、それぞれ今金町の豊かな自然の恵みが表現されている。ただ、この歌詞に直接振付(あて振り)すると、2番、3番と歌詞が変わる中で混乱を招く可能性が考えられたので、そうならないよう、動きそのものを共通の言葉で分かりやすく伝えることを念頭において、進行台本を作成した。その際、使う言葉が分かりやすいかどうか、動きにマッチし覚えやすいか、説明する言葉選びを大切に、お互いの意見を出し合いながら進行台本をまとめた。

撮影当日でも、例えば、「右グー、左グー、脇3回」や「虹、虹、虹4回」など、8カウント内でリズムに乗って言葉で表現することを心掛け、実際に声に出して話してみるとリズムに合わない場面もあったので、それらの状況にも臨機応変に対応しながら本番の撮影に臨んだ。(動画の作成に関しては前ページ参照)

「スマイルダンス」の解説映像の構成は、①解説をすべて見る、②解説～前半～、③解説～後半～、④フルバージョンの動画、⑤学生ダンサーズ、⑥子どもダンサーズ、と6つのチャプターに分け再生できるようにした。解説は前半と後半に分け、曲をかけずに言葉と動きだけで説明し、最後に曲をかけてフルバージョンで踊る形になっている。その他、大人数で踊る大学生と子どものバージョンをプログラムに入れた目的は、ダンスの楽しみ方である「創る」「踊る」「観る」という特性から、解説だけではなく、学生や子どもたちが元気に踊るダンスを「観て」楽しんでもらうことも必要だと感じ、それぞれにダンスの持つ可能性を感じてもらいたいのである。また、すべてのチャプターの出演者は、映像を見た人が混乱せず右側から手足を動かして踊れるように、見る側からの鏡合わせとなるよう、全て左側から踊ることを条件として振付した。

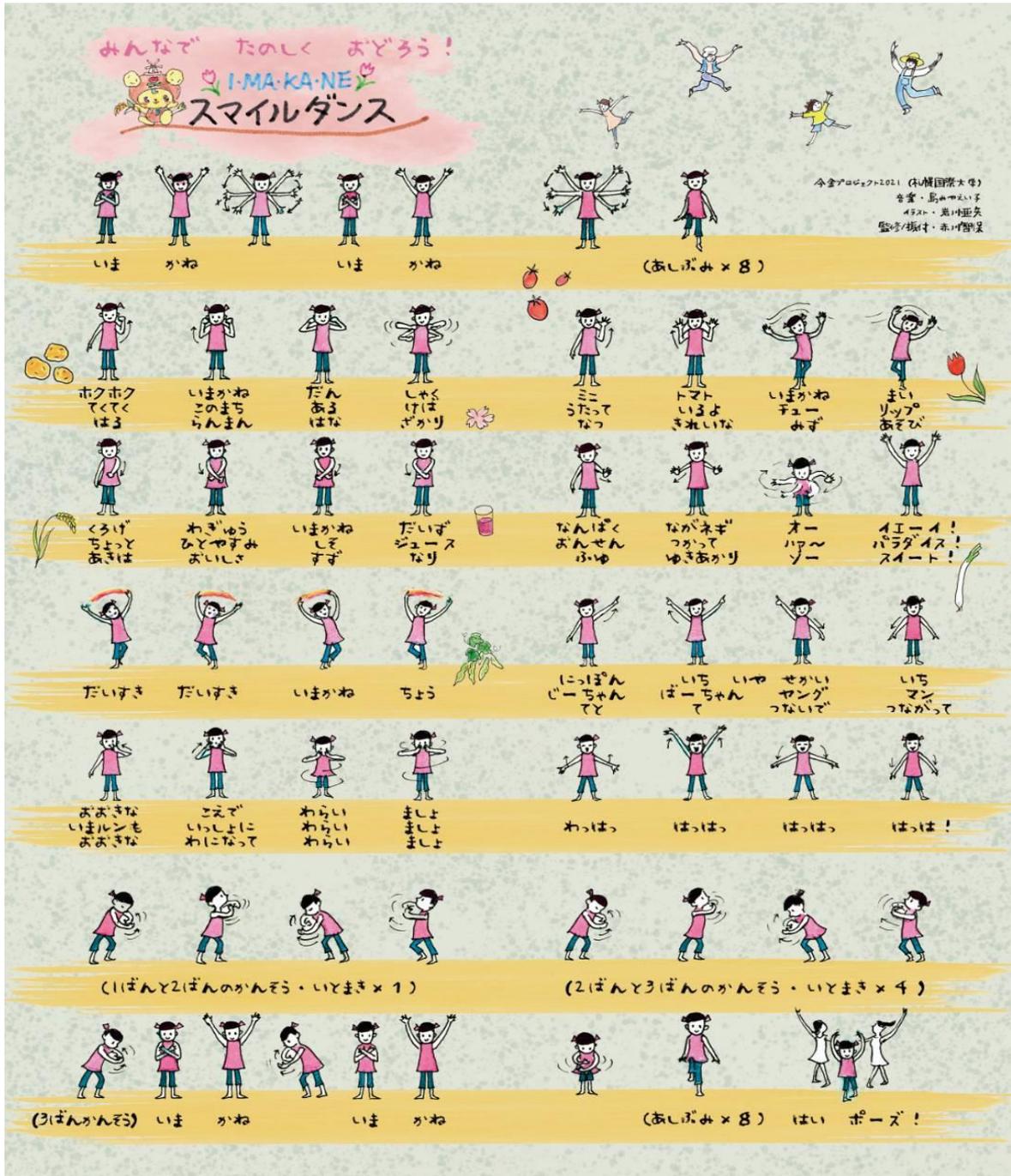
「子どもダンサーズ」17人による自撮り映像の編集動画



(3) 舞踊譜(紙面)で解説するにあたって

舞踊譜とは、ダンスの振付など「動き」を、楽譜のように紙面で視覚化してわかりやすく記録し、保存することである。音楽で言う楽譜と同じく、言わば現実に眼前で上演、演奏されている三次元でのできごとを二次元の紙面の上で記録し、表現するという意味において、映像で機器を介して撮影する記録より、はるかに難しい作業である。身体全体の運動をできる限り記録する専門的な譜面になると、それはオーケストラのスコアのように膨大な情報量となるが、今回のような簡単なダンスは記号、イラスト、写真等に言葉を添えて記譜される。かつてある時期までの民謡や音頭など、踊りの伴奏音楽のレコードで、ジャケットの裏側やライ

ナーノーツに、具体的な踊り方の指導が動きを表現する人のイラストと共に、ある種の続きものように描かれて添えられていたのを記憶される方もいると思うが、あのようなものと思ってもらえればわかりやすいだろう。それと同じように、今回は上半身の限られた動きと、誰にでも分かりやすいことを目的としているので、イラストによる表現にしている。また、今回の「スマイルダンス」は手を使った振付が多いこともあり、手に持ちながら解説書を見るのではなく、手をフリーにしておきながら「見ながら踊れる舞踊譜」を念頭に、B3の大きさの紙面を畳んでDVDケースに収め、それを広げると壁に貼れるポスターサイズ(電車などの中刷りのサイズ)とすることで、紙面を見ながらの踊りやすさを重視した舞踊譜を作成してみた。歌詞からのイメージを大切にイラストは、幼児から高齢者まで楽しくワクワクするようなデザインである。



「I・MA・KA・NE ～スマイルダンス～」の振付の解説書(舞踊譜)

(4) 発展的活用について

「誰であっても何度か繰り返して踊りたくなるスマイルダンス」は、この音楽を担当したシンガーソングライター・島みやえい子氏が、昨年7月に札幌市内で開催した「Aquarius Live 2021(環)」というライブで、地域貢献の一環として作詞作曲した楽曲として披露した。このライブで、今金町の特産物や自然の恵みの素晴らしさ、高齢者の健康維持のための取り組みなどが本人より語られ、今金プロジェクトに参加した学生5名(3・4年生)が全国から集まった観客の前で生演奏でダンスを披露したが、期せずして観客全員が一緒に着席したまま踊り出し、会場内は一体感に包まれた。また、このライブの様子は道内外にネット配信され、この楽曲についての問い合わせが寄せられ、これまた想定外に今金町を広くPRする形になった。この現象からも今後、さらにさまざまな機会を介して、多様に発展する可能性が期待できる。このことを踏まえ、この「スマイルダンス」は、フォークダンスや盆踊りのように人が集まる場所、祭り・運動会・学習発表会・キャンプ・交流会などさまざまな機会、場所や時間の制限を受けずにいつでも見ることのできるオンデマンド形式でもネット配信し、年齢や踊りの得手不得手や上手い下手に関係なく気軽にコミュニケーションをつなぐツールとして活用が期待される。

また今後は、「腰・大幹」「足・下半身」「座位でのストレッチ」など体の部位によって集中して鍛えられる振付や、バラード、スローやアップテンポなど、楽曲の調子やリズムを変えて、それぞれの世代が求める自作自演のダンスコンテストの開催など、さらなる健康増進と今金町のPRも兼ね、総合的で複合的な、観客参加と相互性に富んだ新たな地域発信のコミュニケーションツールとして、多様な発展的活用へつなげる可能性を感じるものである。



進行台本(ナレーション)より

「みなさん、こんにちは。この「スマイルダンス」は、今金町在住の幅広い世代の皆さんの健康維持・増進のために考案したオリジナルダンスです。歌詞は、今金町を代表する特産品や、美しい季節の流れを盛り込んでいます。今金町の大自然の恵みを思い描きながら、楽しくダンスしていきましょう。このスマイルダンスは、幼児から高齢者、椅子に座ったまま、ベットに寝たままでも踊ることができ、一曲踊ることで約三分間の有酸素運動の効果が得られます。その日の自分の体調に合わせて、無理をせずに日々持続することでストレスを解消し、心と体の健康を育むきっかけになれば幸いです。」

今金プロジェクト2021(札幌国際大学)健康チーム

「みんなで楽しく踊ろう！I・MA・KA・NE～スマイルダンス」解説動画作成

***キャスト**

内野絵衣弥 中南慶俊

上野博文 久保田伊吹

***ナレーション/構成台本**

三浦 涼 桃井万莉

***大学生・ダンサーズ**

(スポーツ人間学部/観光学部)

川村玲雄 上西柚凪 高橋太一

團 広太 早坂駿輝 中村公亮

松川新汰 元茂大希 毛内彩月

高田晴奈

***協力**

赤川智保モダンバレエスタジオ

***イラスト**

岩川亜矢

***音楽**

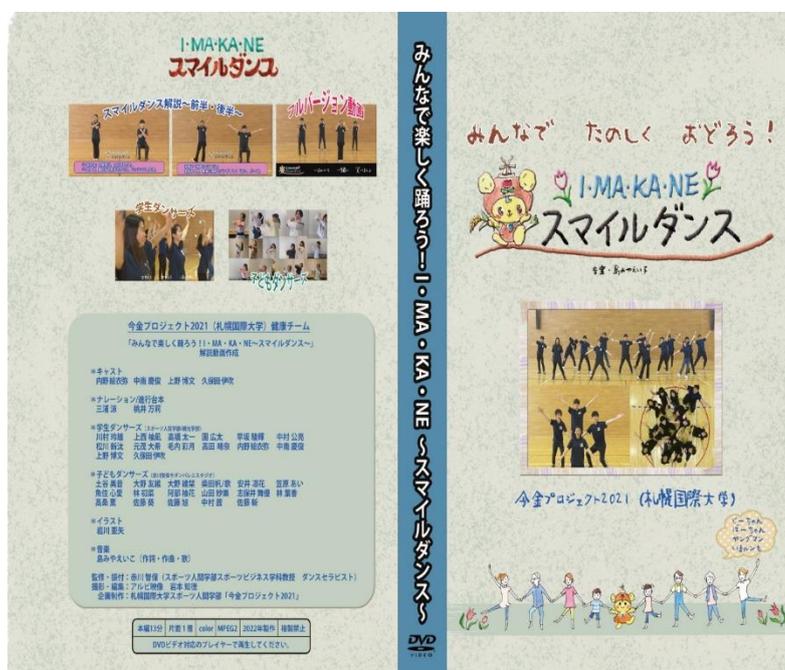
島みやえい子(作詞・作曲・歌)

SHINNKAI(編曲)

***監修・振付:**赤川智保(スポーツ人間学部スポーツビジネス学科教授 ダンスセラピスト)

***撮影・編集:**アルビ映像 岩本知徳

***企画制作:**札幌国際大学スポーツ人間学部「今金プロジェクト2021」



(赤川 智保)

3 地域課題と自己成長を達成する地方版インターンシッププログラムへのアプローチ

活動概要部分でも述べたが、観光チームのプロジェクトの最終成果は、地域の課題解決をインターンシップで補うプログラムを学生等が作り、次年度インターンシップ希望学生に繋ぐことである。なお、2019 年度奨励研究の課題を踏まえ、今金町役場での研修で終わるインターンシップではなく、内部と外部の発信や形成を何度も回して学習コアを高められるよう、中間発表で頂戴した評価を大学に持ち帰り再議論や各グループでの独自調査、最終成果発表と次年度インターンシップ募集など、長期間に渡るインターンシップとして設計している。本節では、学生の最終成果とそれに対する今金町から頂戴した結果、この長期インターンシップを通しての学生の成長についてまとめる。

(1)成果と結果

参加学生 4 名は 2 グループに分かれて活動し、12 月の最終報告会にて以下 2 つのインターンシッププランが発表された。プラン概要と今金町からのフィードバック内容を示す。なお当日使用した学生のパワーポイントは、資料を参照のこと。

■プラン 1:「【爆誕】今金 PROJECT-北海道の辺境地で 4 単位を掴み取れ」(森・太田 G)

- ポイント-
- ・このインターンシップは、企業が学生に求める能力 Top3(コミュニケーション力、主体性、チャレンジ精神)を習得することができる圧倒的な成長体験の場である
 - ・地域が抱えるクアプラザピリカの人員不足問題解消のため住み込みで半日働き滞在費をうかせ、クアプラザピリカ発の電動キックボードを活用した体験メニューの作成にチャレンジできる
 - ・今金町と学生の双方が WINWIN の関係でいられるインターンシップ

今金町	学生
*観光学部の学生が世間で話題のキックボード体験プラン案を作成	*電動キックボードの体験プランを作成する経験が得られる
*外部の人間の視点や気づきを得られる	*地域の魅力を味わうことができる
*継続的な交友関係の構築	*メンタル面での成長
*ピリカ地区の PR 活動を行うことができる	*ガクチカ、先輩との繋がりができる

■プラン 2:「今金町からの脱出-楽しくて出られない-」(大島・川原 G)

- ポイント-
- ・SWOT 分析より札幌ではできない経験を今金町でももらえるイベントプランづくり+食を通じた郷土教育の提供により今金町のファン(交流人口・関係人口)を作る

	プラスの要因	マイナスの要因
内部環境	強み 観光資源(食・人) 食育	弱み 町の収入減少 町の知名度
外部環境	機会 脱出ゲームの需要増加 ふるさと納税の利用者増加	脅威 少子高齢化 人口減少 コロナ

- ・キャッチーなイベント開催でまず今金町を訪問してもらい、ディープで魅力的な今金町を知ってもらい、楽しくて脱出できなくする今金町脱出ゲームイベントとご当地メニューカレーづくりの開催
- ・先輩学生が今金町と産学連携事業で提案した「フットパスコース」を活用した脱出ゲーム

➡上記 2 つのインターンシップ案を今金町側で検討頂いた結果、「【爆誕】今金 PROJECT-北海道の辺境地で 4 単位を掴み取れ」(森・太田グループ)が次年度後輩学生につなぐインターンシッププランとして採用となった。2 つのインターンシップ案に寄せられたコメントは次の通りである。

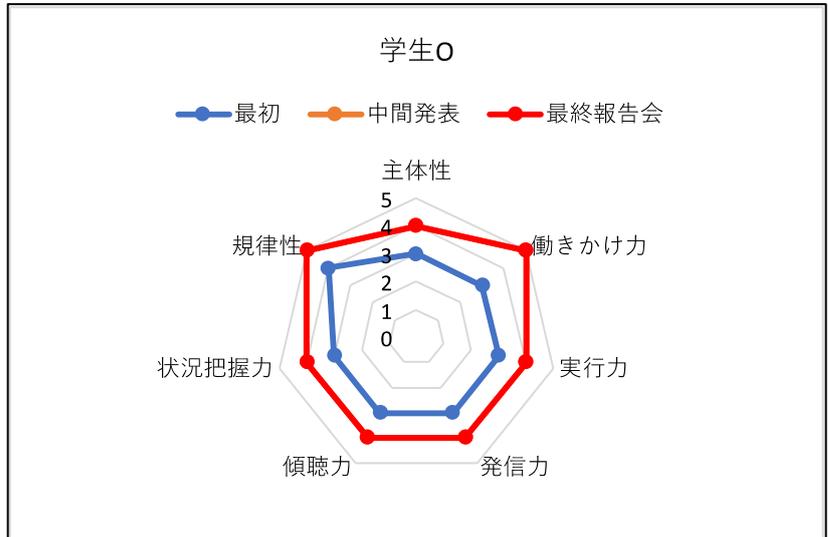
	コメント
プラン 1	<p>【採用】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クアプラザ就労◎ ・なるべくお金のかからない方法での実施 ・宿泊先はピリカ交流センター+ワーキングステイ住宅+クアプラザピリカ ・学生自らの力でインターンシップ期間を乗り越えてほしい 期間中のサポートは行うが、今回のような形で指導等を行わない方針 ・電動キックボードで何をする？何を見せたいのかわからない。課題を明確にしR4参加学生に考えてもらうこと ・R4にキックボードの購入はできない R4はクアプラザにある自転車を利用してコースづくりを行うこと ・インターン中の宿泊先は要検討。 クアプラザでの就労があるため、数日はクアプラでの宿泊を想定。 ・電動キックボードの安全性等は要確認。購入にあたっては不安が大きい。
プラン 2	<p>【不採用】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成いただいたプランは、今回不採用としたが、インターンシッププランよりはイベントとしてユーモアのある提案をしていただいたと感じている。 ・今金カレー作りは、大学生向けに開催したり、札幌市内で大学生が今金のPRをすると言ったイベント開催も想定できる。また、電動キックボードプランに参加する学生が、今金町を知るきっかけとしてカレー作り体験を組み込む事もOK。 ・家族で子どもたちを参加させるが、札幌から来てもらうリスクは高い。大学生責任のもと行えるようなイベントにはならない。 ・イベントは 1 発打ち上げ花火になりがちで、インターンシップのプランとしては継続性が求められる。

(2)発表場面ごとに振り返る自己成長評価結果

II-2-(3)で前述した通り、本インターンシップでは、10 月の研修最終日に実施した中間報告の発表と、中間報告後の指摘事項を修正して挑んだ 12 月の最終報告会と、グループ内での内部活動に対して外部の評価を得る機会が 2 回あった。そこで、それぞれの場面ごとに自身の自己成長を社会人基礎力の 7 項目を用いて 5 段階(5=優、1=劣)で評価してもらった結果が以下のレーダーチャートである。

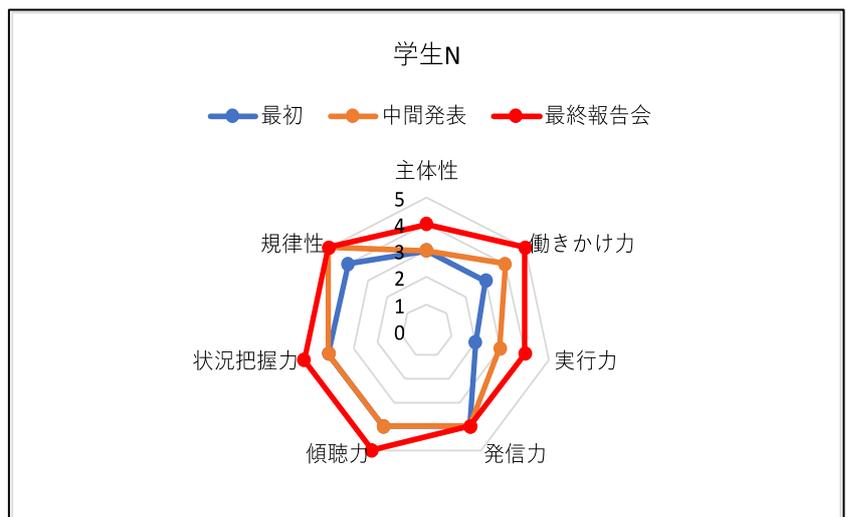
■学生 O

自己評価に厳しい学生 O の特徴は、「働きかけ力」「実行力」以外の 5 つの力については成長を感じているものの、「働きかけ力」と「実行力」については中間発表後に一度成長を感じたものの、最終報告会后では研修前と同様の評価 3 にする複雑な心境が見て取れる。これは、プロジェクトが長期化し周りの学生個人の働きかけ力が高くなると同時に、失敗や衝突を恐れた少し他人事な意見共有など何となく進めてしまふところがあったことを課題として掲げていることからによる評価である。一方、学生 O の個性を發揮しながらのプレゼンテーションや外部との意見交換ができたことから、「傾聴力」「発信力」は最終報告会時においても高く評価している。



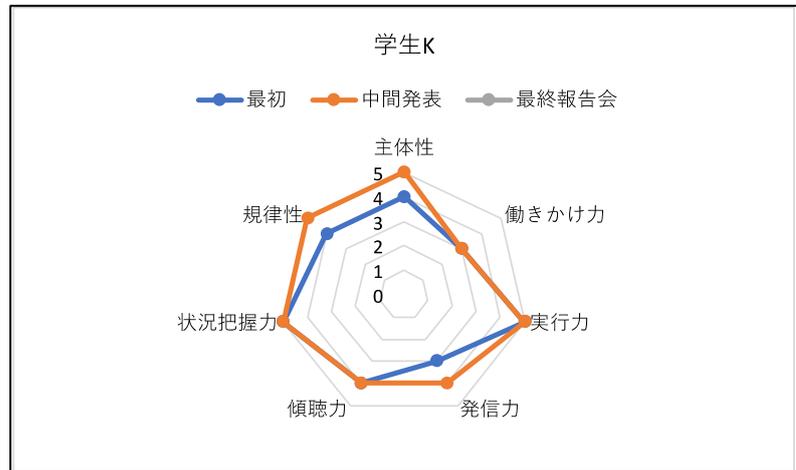
■学生 N

学生 N の特徴は、7 つの力の全てにおいて成長が感じられている点である。特に研修前に自己評価が低かった「働きかけ力」は 3 から 5、「実行力」は 2 から 4 と 2 ポイントアップしている。「働きかけ力」の成長コメントを日誌で確認すると、授業内で実施する単純な課題解決とは違い単純ではないことから、焦る気持ちと就職前だからこそ絶対に成功させてやり遂げたいという気持ちが後押しし、LINE 機能を使ってグループで打ち合わせできない時も効率よく隙間時間で何かできるように動く様子が見られ、学生 N 自身もそこを評価している。「実行力」に関する成長は、これまで順序立てて目標に向かって取り組むことが苦手だったようであるが、常にアウトプットする日にちを意識し逆算して活動できるようになったことが高評価の理由でした。この他、もともと高く評価していた「状況把握力」については、グループ活動を通して個々の得意不得意を理解した上で仲間の意見を尊重する方法がとれたことから7つの力の中で一番発揮できたと評価している。



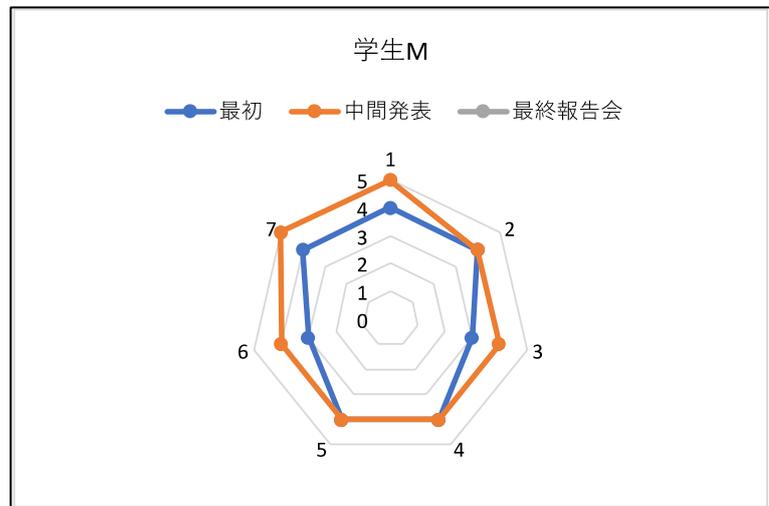
■学生 K

学生 K が大きく成長を感じられた部分は、「働きかけ力」である。研修前と中間発表では 5 段階中 3 と評価しているものの、自主活動では 4、最終報告会では 5 である。この成長について学生 K は、3 と評価している時はチームでの目的達成において共有や常に周りを意識した協働への心がけが大事であることの気づきはできているもののそれを表現する声がかげができていなかったと評価している。しかし時間経過と共に声がかげできるように成長しており、諦めそうになりながらも何度も何度もグループ内で色々な案を練り直す様子が日誌にも記載されている。こうした経験から「状況把握力」「実行力」「主体性」も連動して高く評価していると見て取れる。一方、「傾聴力」「発信力」の成長はあまり見られない。この理由については、外部の方との意見交換の際、相手への優しい雰囲気づくりや要点を絞った説明が緊張時にできていないことが記されている。



■学生 M

本プロジェクトのリーダー学生 M の特徴は、「規律性」以外ほぼ全ての力において段階的な成長が感じられている点である。しかし、教員の目も含めた外部の目が入らない自主活動時には中間発表のようなモチベーションが続き、研修前より評価が低い力も見受けられる。しかしながら、自主活動時の 2 チームでの情報共有会議などを主体的に開催し、参加学生の目的意識を常に意識づける働きかけをしている様子が日誌から読み取れた。



(3) 学生の自己評価から見た長期インターンシップでのリーダーシップ育成に向けて

ニューノーマル時代へ向けて発行されたキャリア教育書籍『新しいキャリアデザイン』によれば、「リーダーシップ」は学生時代に身につける 5 つの原則の 1 つとして掲げられ、その意味を「セルフマネジメントを行いながら、多様な人々と多様なツールを駆使してコミュニケーションを行い、リーダーシップを発揮すること」とし

ている。ハーバード・ケネディ・スクールでリーダーシップを指導しているロナルド・ハイフェッツェ教授は、社会で起こる問題を 2 種類に分け、1つは既存の知識や方法で解決できる技術的問題、もう1つは人と人との関係性で生じる適応課題と指摘し、後者の問題こそ様々な人々が絡み合いいくら自分が努力しても解決できない問題だからこそその解決策に「対話」、すなわちコミュニケーションが必要で、そこには相手を認め、話を聴き、オープンクエスチョンを投げかけフィードバックし新しい関係性を作ることの重要性を挙げている。また早稲田大学の日向野教授は、対話を通して自分達がいま達成すべき目標は何かを共に共有し、自らの行動でメンバーに良い影響を与え、仲間にも動いてもらうよう働きかけたり、時にはサポートすることがリーダーシップ最小 3 要素だと述べ、こうしたスキルはリーダーだけではなく誰もが持つべきスキルであると述べている。こうしたリーダーシップスキルの視点から学生の社会人基礎力の自己評価を確認すると、使用する言葉は違えどリーダーシップとしての学生個々のアプローチが見て取れる。特に今金町役場での中間発表後の最終課題に向けた自主活動では、役場からのフィードバックコメントを共有した新たな関係性を作り、自らの行動でメンバーに良い影響を与え、仲間と諦めずにやり遂げている。このように長期間での地域課題の取り組みを外部からの評価を何度も入れることで 2019 年度よりも地域に寄り添った課題解決案にもつながった。今後は、後輩学生のインターンシップ募集とサポートに期待したい。

(千葉里美・金庭香理)

IV 今年度の調査研究を終えて

今年度は、健康をテーマとしたスポーツ人間学部の学生を中心とした取組のほか、地域観光振興をテーマとした観光学部の学生の取組も展開した。地域観光振興をテーマとした取組については、本報告書のⅢ-3を参考にさせていただき、ここでは前年度から継続している健康をテーマとしたスポーツ人間学部の取組について取り上げる。

昨年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、当初の調査研究スケジュールに即した活動ができず、大幅な計画の変更を余儀なくされてしまった。特に、現地(今金町)において現状と地域課題の把握のためフィールドワークを実施することができなかつたことは、学生の活動意欲を喚起する点においても大きな影響があった。しかし、今金町の職員による出前型の出張講座を行うなど、コロナ禍であっても可能な範囲で活動を行った。最終的には、健康増進プロモーションビデオ「今金版 いきいき健康体操～元気にエクササイズ～」を企画・作成し、同町への贈呈を行なった。これには、学生も大きな達成感を感じていた。さらに、調査研究の目的であるリーダー育成に関する成果も一定程度得られた。

今年度も、新型コロナウイルスの感染状況の推移をみながら、細心の注意を払ってのスタートとなった。前年度実施することができなかつた現地でのフィールドワークは、11月の遅い時期となってしまったが実施できたことは前年度との大きな違いである。やはり、現地で実際に見て、聞いて、感じて、現状と課題を学ぶことは、学生のフィールドワーク後の活動に対するモチベーションが大きく違うことを実感した。コロナ禍で十分な活動ができないまでも、地域課題に焦点をあてた PBL には、現地でのフィールドワークは欠くことができない活動といえる。

本来であれば、現状把握のフィールドワーク後、課題の解決方策の検討や解決方策の試行的実施等に、現地でさらなるフィールドワークを重ねることで、実効性の高い取組へとブラッシュアップしていくことが理想である。しかし、年も押し迫った11月のスタートであったため、それ以後の現地フィールドワークは難しいことから、現地ではなく大学内での活動を中心に据え、限られた期間で成果が得られるような取組へと変更せざるを得なかつた。

第1回のフィールドワーク(11月20日～21日)で、現地での視察や説明を受け、さらに中島副町長の講話と意見交換を通して、今金町の現状を理解するとともに、抱える課題について学んだ。そこで、課題解決のために、健康・スポーツの学びを活かして、何ができるのか、さらには大学での活動という視点から今後の取組とスケジュールを検討した。

最終的には、高齢化の進展する今金町において、町民の健康の維持・増進の一助となるようなツールを制作し、提供することとして、二つの取組を行った。

一つ目は、ノルディックウォーキングの解説動画・資料の制作である。今金町には、過去に本学とのプロジェクトで設計開発した「フットパスコース」があることを、学生も現地フィールドワークで確認している。今回参加しているスポーツ指導学科本多ゼミの学生は、ゼミ活動として近隣自治体のノルディックウォークによる健康事業に平素より参加している。そこで、今金町においても、ノルディックウォークの普及促進を図ることが、町民の健康の維持・増進につながると考え、ノルディックウォーキングの解説動画・資料を制作し、提供することとした。

二つ目は、「IMAKANE～スマイルダンス～」の解説動画の制作である。昨年、制作した健康増進プロモーションビデオ「今金版 いきいき健康体操～元気にエクササイズ～」は、好評であったのだが、巻末に収録

した「スマイルダンス」については、動きがわからない等の声があり、わかりやすく動作を解説した資料の提供は今金町からも要望があったところである。そこで、「スマイルダンス」の普及促進を図ることで、町民の健康の維持・増進に貢献できるものと考え、解説動画を制作し、提供することとした。

いずれの活動も学内で行ったが、学生の活動への意欲も高く、積極的に取り組む学生の姿が多くみられた。現地を訪問したのがたった一度であったにもかかわらず、その後の学内での活動に積極的に参画できたのは、今回の取組と活動が「何のために」「誰のために」といった目的が、明確でわかりやすかったことにあるのではないかと考える。活動することが目的となるのではなく、目的を常に確認し明確に示すことこそが、活動へのモチベーションを高めることにつながる。活動することが目的、すなわち「手段」が「目的」とならないように、常に「目的」を意識させながら活動を展開していくことの重要性をあらためて認識した。

そして、3 月末には、前年度と同じく今金町において、成果物の贈呈を行うことを予定している。成果物を自分たちの手で、贈呈することによって、町長をはじめ関係の方々からの感謝とともに贈られる今後の活用を約束する力強い言葉は、学生に大きな達成感と充実感を与える。まさに、こうした贅辞こそが、学生の自己有用感を高め、次の活動への大きな原動力となるのではないかと考える。

本調査研究の目的であるリーダー育成という点を振り返ると、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が 2006 年に提唱した「社会人基礎力」の「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力が確実に伸長していることが、観察の中からも実感できる場面が多々あった。しかし、今年度は、学生だけの活動が中心であったということを考慮する必要がある。コロナ禍以前のように、今金町の町民との直接対話や協議をすることができなかつたため、学生集団の中での限定的な能力の伸長と言わざるを得ない。これが多様な世代、価値観、背景をもつ町民の方々との活動であったならば、どのような能力が伸長するのか、興味深い結果が得られるのではないかと考える。

コロナ終息の際には、現地において、多様な世代、価値観、背景をもつ方々と活動を共にし、実際に見て、聞いて、感じて、現状を学び、課題について考える取り組みを展開したい。これこそが、実際社会で生きるリーダーとして求められる基礎力の伸長につながるのではないかと考える。

コロナ禍において、今年度も学生が、地域課題を詳細に理解し、自らの手で多角的に課題解決の方策を考え、主体的に活動を展開することができたとは言い難い。しかし、制約された時間の中で、作り上げた製作物は十分に評価できるものである。今年度のプロジェクトメンバーの学生には大いに感謝したい。

次年度は、製作した動画の活用方策やプロモーションについて検討し、今金町の住民の健康の維持増進に資する活動を、学生が中心となって展開することができればと考えている。

最後に、突然の計画変更にも快く対応いただき、本調査研究にご協力くださいました今金町まちづくり推進課の職員の皆様をはじめ関係の皆様、心より御礼申し上げます。

(佐久間 章)

【資料】

ノルディックウォーキングとは？

ノルディックウォーキングは、フィンランド生まれのスポーツです。専用のボールを使って、年齢・性別・身体能力にかかわらず、誰でも無理なく始められ、自分のペースで楽しむことができます。




札幌国際大学 今金プロジェクト2021 プロジェクトチーム
 「ノルディックウォーキング」について制作チーム
 内野 絵衣弥 松田 竜樹 向山 阿保星 渡野 乃の華
 出演：泉 陽樹
 ナレーション：園 広太

「正しい歩き方」について制作チーム
 早坂 駿輝 松川 新汰 藤原 広樹
 出演：内生 優斗
 ナレーション：上西 純臣

「準備体操・整理体操」チーム
 川村 玲雄 高橋 太一
 出演：藤本 祐他 (座位) 元渡 大希 (立位)
 ナレーション：中村 公亮

担当教員：スポーツ指導学科 本多 理紗 (健康運動指導士)
 撮影・編集：アルビ映像 若本 知雄
 企画制作：札幌国際大学スポーツ人間学部 「今金プロジェクト2021」

本編15分 | 片面1層 | color | MPEG2 | 2022年製作 | 複製禁止
 DVDビデオ対応のプレイヤーで再生してください。

楽しく始めよう！

ノルディックウォーキング

楽しく始めよう！ノルディックウォーキング




『ボールの持ち方について』

ボールの長さは身長や体格に合わせて調整します。
 身長×0.68=ボールの長さ プラスマイナス3センチは許容範囲です。
 (初心者は、身長×0.64=ボールの長さ)

身長	ボールの長さ
150 cm	100 cm
155 cm	105 cm
160 cm	110 cm
165 cm	110 cm
170 cm	115 cm
175 cm	120 cm
180 cm	125 cm

長さの目安は、肘が90度になるよう調整します。

ストラップは、右用 (R) と左用 (L) があります。人差し指と親指で軽く挟むように握ります。取り外すこともできます。

『歩き方について』

踏み出した足と逆の手のボールを軽く地面につきます。肘は自然に曲げ、身体を前に移動させると同時にボールで体を押し出すように前進します。押し出した側のボールが脇を過ぎたら、後ろ側の手をグリップから離します。

初めは、ボールを持っていることを意識しすぎないことがポイント！

楽しく始めよう！ノルディックウォーキング

ノルディックウォーキングとは？

ノルディックウォーキングは、フィンランド生まれのスポーツです。専用のボールを使って、年齢・性別・身体能力にかかわらず、誰でも無理なく始められ、自分のペースで楽しむことができます。

『ノルディックウォーキングの効果』

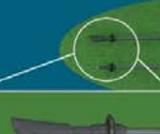
- ① フィットネス運動
- ② 歩幅が広がり、脚筋力や脚筋持久力が向上
- ③ 姿勢がよくなる。
- ④ 関節可動域が広がり、柔軟性が向上
- ⑤ バランスの保持・転倒予防になる。
- ⑥ ロコモティブシンドロームの予防

まだまだたくさんの効果があります！

ボールを持つと足腰にやさしく安全

『ノルディックウォーキングのボールについて』

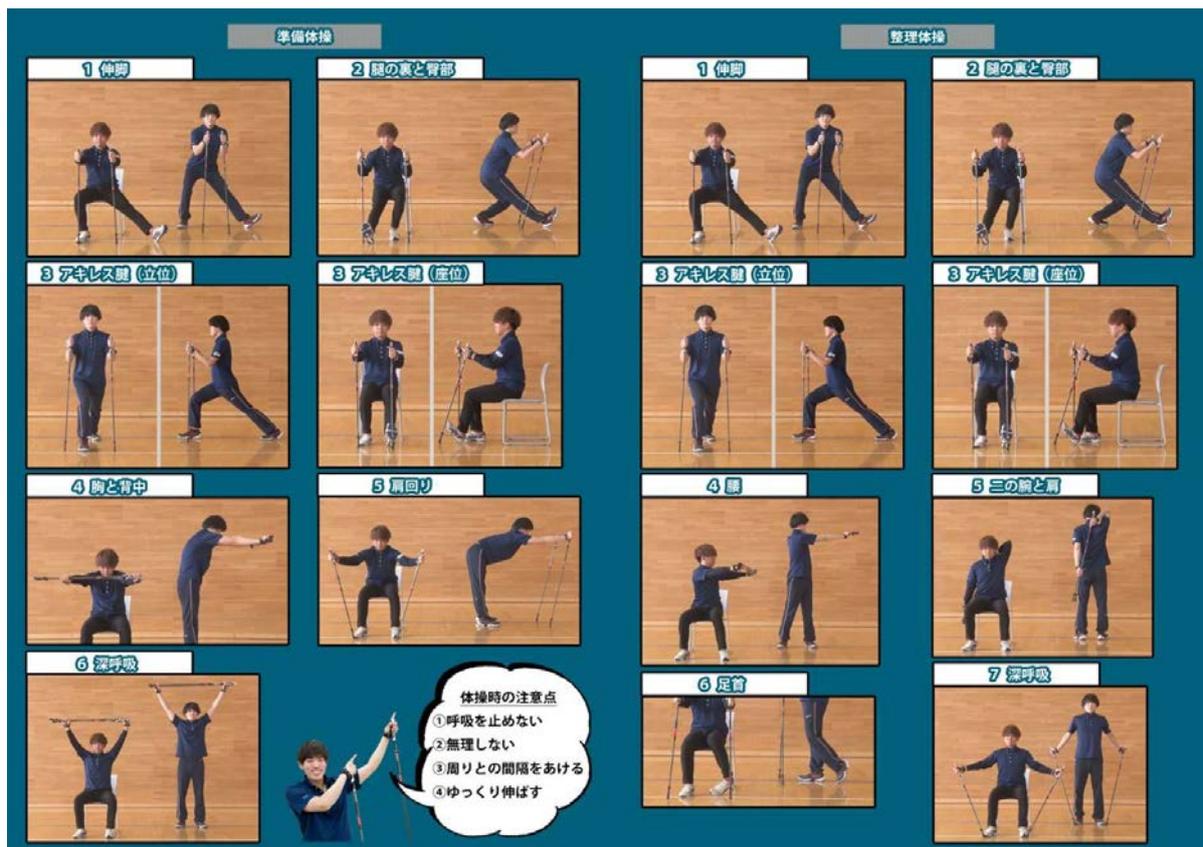
ボールは、様々なメーカーから販売されている。
 ・カーボン製…耐久性が高い
 ・アルミ製…地面からの感触がよい



アスファルトバトン (アスファルト等の地面)



スパイクチップ (土や雪の地面に使用)



【DVD 制作を終えて(学生の声)】

○初めての取り組みで、みんなで考えたものが形になるんだなと思ったらとても楽しく活動することが出来ました。

○今回 DVD の作成にあたり、今金町に実際に訪問し地域の実態を知った上で作成にあたり、ノルディックをこのような形で普及していくことを今回知ることができ、新しい普及の仕方を知ることができて良かったです。この経験を活かせるように今後も精進していきたいと思えます。

○ノルディックウォーキングは約 2 年間ゼミ活動で使用する場面があり、慣れていることも多くあるとは思っていたが、DVD を作成するにあたって色々な本を参考にしてこんなに詳しく学ぶことができたのは良い経験になったと思う。また自分たちだけのものではなく、今金町の方が見るものになっているのでわかりやすく伝えることに重点をおいて班のみんなで作成することができた。最後にこのような活動ができて本当に良かったと思う。

○昨年度に引き続きコロナ禍の影響で思うような活動ができなかったが、最後に全員で活動ができてよかった。また、きちんとした業者の方に撮っていただける機会も中々ないため、貴重な経験となった。

○DVD の作成は想像以上に大変で難しく、時間がかかったのですがひとりひとりがしっかり役割を持ち、その役割をサボることなくみんなで協力しながら行っていくことが楽しかったしとても大切だと思った。とても良い DVD が完成し、達成感も感じられたので良かった。この DVD が多くの人に広がり、たくさんの人に見てもらえたらいいなと思った。

○初めてゼミ全体で大きな活動をすることができ、とても嬉しかったです。また 3 年生とも最後に交流を深めることができたのでとても良い活動になったと思えます。活動中だけでなく、休憩時間でも 3 年生と話すことができ普段聞けないような話も聞くことができ距離を少しでも縮めることができたなと思えます。DVD の作成に携わることができとても貴重な体験になりました。

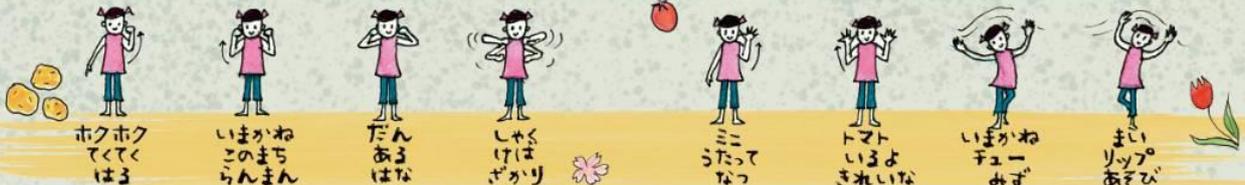
みんなで たのしく おどろう！

I-MA-KA-NE
スマイルダンス

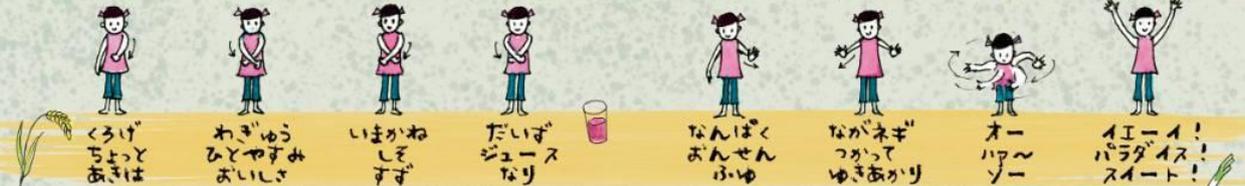
今年プロジェクト2021 (札幌国際大学)
音楽・島村ゆい子
イラスト・尾川亜矢
監修/振付・赤川智晃



いま かね いま かね (あしぶみ × 8)



ホクホク てくてく はる いまかね このまちらんまん だん あま はな しゃくは ざかり ミニ うたて なつ トマト いるよ されいな いまかね チューみず まいリップ あそび



くろげ ちよと あきは わきゆう みとやすみ おいしよ いまかね しそ すず だいず ジュース なり なんぼく おんせん ぶゆ ながネギ つかって ゆきあかり オー パア ソー イエーイ！ パラダイス！ スイート！



だいすき だいすき いまかね ちよう にっぽん じーちゃん てい いち はーちゃん て いや せかい ヤング つないで いち マン つながって



あおきな いまも あおきな こえで いっしょに わになっ て わらい わらい わらい ましよ ましよ ましよ わっはっ はっはっ はっはっ はっはっ！



(1ばんと2ばんのかんぞう・いとまき × 1) (2ばんと3ばんのかんぞう・いとまき × 4)



(3ばんかんぞう) いま かね いま かね (あしぶみ × 8) はい ポーズ！

【参考】今金町と札幌国際大学の地域連携事業

今金町と札幌国際大学の地域連携事業に関する協定書(平成24年10月16日)

(目的) 第1条 この協定は、両者が包括的な連携のもと、産業、文化、まちづくり、学術の分野等において相互に協力し、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目的とする。

(協力事項) 第2条 両者は、次の事項について協力する。

- (1)産業振興に関する協力 (2)地域文化の育成・発展に関する協力 (3)まちづくりに関する協力
- (4)人材育成に関する協力 (5)学術に関する協力 (6)その他必要と認める事項

平成24-26年度

本学の有するノウハウや研究の蓄積及び関係機関とのネットワークを活かし、観光による地域産業の活性化、交流人口の増加を目指して本学学生と地元住民(今金町人流創生プロジェクト協議会)が協力し、今金町の魅力を探り、その魅力を町外に発信する「地域資源発掘・再発見事業」、や「田舎暮らし体験事業」をはじめ、外国人留学生をモニターとしてインバウンドの可能性について検証する「外国人留学生による今金インバウンドモニターツアー」、冬季の旅行商品開発のための「冬の今金モニターツアー」などのプロジェクトに取り組んできた。

■ 札幌国際大学生と今金町の若者による“シャベリ場”「今金を語ろう」

ワークショップをととして、地元住民(若者)が感じている今金の魅力を大学生に伝え、次回のフィールドワークの参考とすることを目的として、今金町民センターで開催した。

■ 札幌国際大学生受入事業報告 札幌国際大学今金研修 ～今金を探ろう！～

今金町の魅力・地域資源発掘・再発見を目的に、前回の冬に実施した体験プログラムをベースに企画した旅行プログラムを、実際に学生自身が体験し評価・提言を行った。

平成27年度 奨励共同研究(特別教育プロジェクト)

フットパスの可能性に関する研究 ―今金町を中心に―

地域連携事業の協定を結ぶ檜山管内今金町をフィールドとして、フットパスモデルコースの設計・検証を行ない、地域観光振興のツールとしてフットパスの可能性についての共同研究を行った。

平成28(2016)年度 奨励研究

地域資源を活用したまちづくりに関する研究 ―今金町フットパスの活用方策について―

前年度の研究成果を踏まえ、今金町においてフットパスプログラムを取り入れたモニターツアーを実施し、成果と課題を明らかにするとともに、同町のフットパスコースの今後の活用方策について検討する。

平成29(2017)年度 奨励研究

学科の学びを活用する能動的学修の展開 ～今金町美利河地区の地域課題を焦点に～

今金町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を、次代を担う今金町の子供たちと協議し、提案する。学科の学習を生かすことができるように、キーワードとリンクする学科から学生を選抜し、ファシリテーターとして子供たちの学びの支援にあたる。こうした活動により、学内での学びを生かした学外での能動的学修(アクティブ・ラーニング)展開の方法についての資料を得ることを目的とする。

平成30(2018)年度 奨励研究

住民との協働による能動的学修の展開 ～今金町美利河地区をフィールドとしたプロジェクト学習の推進～

昨年度、同町美利河地区をフィールドとして「健康」「歴史」「観光」をキーワードに、地域課題の解決方策を同町の中学生や町民と協議し、提案を行った。今年度は、提案内容(プロジェクト)を現実のものとするための情報収集、試行検証を重ねる。こうした課題設定、計画立案、実施、反省・評価の一連の過程を通して、プロジェクト学習の教育効果や推進のための資料を得ることを目的とする。

令和元(2019)年度 奨励研究

連携自治体におけるインターンシップの可能性について～課題設定と評価方法を中心に～

本研究は、課題解決型「インターンシップB」の実施について、本学と地域連携協定を結ぶ自治体における活動の可能性を検証する。本学では、現在道内7つの市町村と連携協定を結んでいるが、平成24年(2012)度の協定締結後、多彩な連携事業を展開してきた実績のある今金町をフィールドとして、自治体における課題解決型インターンシップを実施する上での課題設定、活動内容、評価方法等の資料を得ることを目的とする。

令和2(2020)年度 奨励研究 調査研究報告

地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究 ～リーダー育成モデルプログラムの検討～

地域課題の解決に焦点を当て、リーダー育成モデルプログラムを検討し、新カリキュラム作成の資料等を得ることを目的として実施する。特に、人口減少と高齢化のすすむ小規模集落における高齢者の健康をテーマに、健康の維持及び介護予防の観点から、解決方策の検討に取り組む。

令和3(2021)年度 奨励研究 調査研究報告

地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究Ⅱ ～連携自治体におけるリーダー育成プログラムの検討～

地域課題テーマに、前年度実施できなかった現地での実践的な活動を中心に据え、学生自らが解決方策の企画・実施等を通して、リーダー育成や新カリキュラムの展開における資料等を得ることを目的として実施する。今金町の主要地域課題である健康をテーマとして、前年度の成果物の活用方策をはじめ、子供から高齢者までの健康増進事業の企画・実施等を行う。さらに、観光学部の学生参画によって、地域観光振興という地域課題へのアプローチも行なう。

令和3(2021)年度 札幌国際大学 奨励研究
地域課題に焦点を当てたリーダー育成に関する実証的研究Ⅱ
～連携自治体におけるリーダー育成プログラムの検討～

調査研究報告書

令和4年3月

札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目 4-1

TEL 011-881-8844(代表)

令和3年度 奨励研究 調査研究報告

ニセコ町における食と観光資源の多様性に関する研究

札幌国際大学

目 次

I 研究概要

- 1 研究の目的
- 2 研究組織
- 3 研究の方法・実施計画等

II 調査研究の内容

- 1 ニセコの食文化に関する調査研究
担当者 池ノ上 真一
- 2 ニセコにおけるアウトドアビジネスに関する調査研究
担当者 藤崎 達也
- 3 ニセコの観光資源の多様性を生かす言語内容統合学習に関する研究
担当者 杉江 聡子

III 成果と課題

I 研究概要

1 研究の目的

ニセコ町は国の「SDGs 未来都市」に選定され、『北海道ニセコ町 SDGs 未来都市計画』には2030年のあるべき姿として、観光の質の向上、目的税の創設など地域循環・還元する観光業、農家レストランや直売所の新たな展開など環境と調和した農業、そして国際化を前向きに捉え有島武郎の遺訓「相互扶助」を礎とした社会、住民自治意識の高い地域の実現が挙げられる。しかし、現状では国策に沿った政策理念が先行していると感じられるため、今後は具体論を明らかにすることが課題である。

そこで本研究では、ニセコ町との包括連携協定に基づき、ニセコ町における持続可能な観光の実現に寄与するため、ニセコにおける観光発展の経緯と課題を明らかにすると共に、地域特性を生かした持続可能な観光の具体方策について検討した。特に今年度については、北海道でも先駆的に展開してきたニセコエリアのアウトドアビジネスの発展経緯、自然環境と人の関係により形成される農村地域における食文化や食産業がグローバル化の中でどのような展開を見せているか、そして、インターナショナルスクール設置や国際交流員配置をはじめ先駆的に異文化コミュニケーションに取り組む当地において、外国語の新たな教学モデル構築を目指した授業設計と教授法を検討した。

2 研究組織

本研究は、3つのテーマについて以下の者が担当する。

(代表) 観光学部観光ビジネス学科 教授 池ノ上 真一

「ニセコの食文化に関する調査研究」

観光学部観光ビジネス学科 准教授 藤崎 達也

「ニセコにおけるアウトドアビジネスに関する調査研究」

観光学部国際観光学科 准教授 杉江 聡子

「ニセコの観光資源の多様性を生かす言語内容統合学習に関する研究」

3 研究の方法・実施計画等

2で前述した研究の目的を達成するために、具体的には、次の3つの研究プロジェクトに取り組んだ。また実施においては、ニセコ町役場をはじめ、地域関係者と連携すると共に、観光学部の学生の学びの場としても活用した。

1. ニセコの食文化に関する調査研究（池ノ上）

かつて農村として形成されてきたニセコであるが、近年はグローバル化が進み国内外からの移住者が増加している。また、飲食店や食料品店等の品揃えについても、札幌と比較しても多様な食文化を垣間見ることができる。そこで特に本年度は、近年増加傾向にあるニセコの伏流水や土、風や太陽といった自然環境を利用する醸造所・蒸留所に着目し、地元の旅行業者や食関連事業者と連携した調査研究を実施した。

2. ニセコにおけるアウトドアビジネスに関する調査研究（藤崎）

北海道ではアウトドア事業が盛んであり、30年前ごろから本格的にビジネス化が進められてきた。その中で、同様の時期に立ち上がったニセコの事業は、独自の発展を進んでいると考えられる。それはこれまで外国人経営者の感覚による独特な事業センスで語られてきたところであるが、一方で多くの日本人経営者も活躍しており、実態が十分に把握されていないためである。そこで、知床等における事例に詳しい藤崎がインタビュー及び対談を行うことにより、ニセコと他地域を比較しながら、何が同じで何が違い、これからの北海道観光において応用可能な点について元同業経営者としての視点から概観した。

3. ニセコの観光資源の多様性を生かす言語内容統合学習に関する研究（杉江）

伝統的に第二言語習得では、母語話者を理想像として伝統的な言語知識や運用技能の習得を目指すことが志向されてきた。しかし、日本の社会構成や外国語教育環境を考えると、ICTや様々な学習リソースを活用しながら「第二言語話者としての一定レベル」に到達することを目指し、学習の過程で適切に学習意欲のデザインを考慮し、自身の文脈で自分のことばを語れるようになることが重要である。とくに世界的に言語内容統合学習（CLIL）やCBI（Content-Based Instruction）の潮流があり、外国語に直結する要素だけでなく、学習者の関心や専門を最大限に活かす学習活動を展開することが必要である。そこでニセコの観光資源の多様性の理解をとおり、第二言語習

得に関する学習活動をデザインし、教育実践を通じて、教授設計を評価することを目的とした。

○実施期間

令和3（2021）年10月1日～令和4（2022）年3月31日

○協定先

ニセコ町（連携協定 有）

○協定名称

ニセコ町と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の包括的連携に関する協定

○研究経費総額

1,003,000 円

II 調査研究の内容

1 ニセコの食文化に関する調査研究

担当者 池ノ上真一

(1) ニセコと発酵

当該調査研究は、「ニセコ町と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の包括的連携に関する協定」（以下、連携協定とする）を締結したニセコ町をはじめ、蝦夷富士の名で親しまれる羊蹄山（日本百名山）と、主峰・ニセコアンヌプリなどで構成されるニセコ連峰を抱く倶知安町と蘭越町の3つの自治体を対象とした。この3つの町を合わせたニセコエリアの面積はおよそ900km²で、大阪府の半分近い面積である。

この地域の特徴としては、世界的スキーリゾートとしてニセコアンヌプリなどが有名である。パウダースノーと呼ばれる世界的にも上質な雪質により、オーストラリア人をはじめ多くの外国人が訪れるため、外国にいるような風景を見ることが出来る。特に、倶知安町のひらふ地区などでは、国外の企業や投資家によるコンドミニアム建設ラッシュが見られ、都市化に伴う地価の上昇など変化の大きな地域である。

気候としては、国による「特別豪雪地帯」に指定され、スキーリゾートとして十分な環境を持つ。他方で、春から夏にかけては温暖で晴天の日が多く、山の上では冷涼なため、避暑地としても最適な環境である。そのため、夏はラフティングやゴルフなどのアクティビティも盛んで、清流日本一にも選ばれた尻別川があり、サケやマスが遡上するなど、山岳リゾートとしての発展も見られる。さらに、羊蹄山は活火山であることから、湯元・昆布川・新見・五色など10余りの温泉が点在しており、泉質は白濁した硫黄の湯から、透明感のあるナトリウム泉と多彩に揃っている。

このエリアにおける人との関わりについては、旧石器・縄文時代から見られる。しかし、尻別川の流れが急なこともあり、アイヌ民族を含め、居住エリアではなく、狩猟の場であったと言われている。居住が進んだのは近世からで、1890年頃から本格的な移住が行われた。

そのような環境のもとで、発酵文化の展開が進んでいる。大正5（1916）年創業の二世古酒造をはじめ、クラフトビールやワイン、ウイスキー、ジンジャービアなどを醸造・蒸留する事業所、チーズや生ハム・サラミ、ピクルスなどの発酵加工品を製造する事業

者などが数多く展開している。ひとつのエリアで、日本酒、クラフトビール、ワイン、ウイスキー、ジン、ジンジャービア、チーズ、発酵加工品などの多種多様な展開が見られる地域は、全国的にも希少である。

(2) 活動内容

そこで、近年増加傾向にあるニセコの伏流水や土、風や太陽といった自然環境を利用する醸造所・蒸留所に着目し、地元の旅行業者や食関連事業者と連携した調査研究を実施した。具体的に今年度は、以下の活動を実施した。

○目的：

ニセコエリアにおける発酵業界の現状把握、およびニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げを支援すること。

○体制：

ニセコ発酵ツーリズム推進協議会（代表・水口渉）と連携した調査研究を実施した。

ニセコ発酵ツーリズム推進協議会は、発酵をキーワードにニセコ地域の食品・飲食・観光事業者などの有志メンバーにより、2021年に設立された。ニセコ地域の新たな楽しみ方としてツーリズムやイベント等を提案することを目的とする。

○フィールドワーク：

学生を伴ったフィールドワークを以下のとおり実施した。

▽1回目：7月25日(日) 学生7名参加

・概要：

最初のフィールドワークとして、池ノ上ゼミの学生7名とともに、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の初期立上げメンバーの事業所を訪問し、現地調査を実施した。



まずは、醸造家である高浩一氏の案内でクラフトビールを製造販売するルピシアを訪問し、工場内で醸造の現場を案内してもらった。高氏の詳細な解説がとても分かりやすく、醸造について初心者であった学生も十分に理解することが出来た。



次に、日本酒の八海山で知られる八海醸造がウイスキーやジンをつくるニセコ蒸留所を見学した。まだグランドオープン前であったが、特別に所長自ら案内して頂いた。観光にも対応した洗練された施設や品揃えがとても印象的であった。



そして次に訪れた高橋牧場では、店長の高井裕子氏に牧場や店舗、観光客への対応の状況等について説明頂いた。ニセコ町内でも、牧場の風景はもちろんのこと、羊蹄山が一望できる絶好のロケーションのため、人気の観光目的地となっており、コロナ禍にも拘わらず、比較的多くの観光客が訪れていた。



最後に訪れたのは、倶知安町にある二世古酒造である。当該酒造は大正 5 年創業の老舗で、当時から続く酒蔵の建物で現在も営業を続けている。伝統的な手法を継承しながらも、最新の技術を取り入れ、さらに時代に合わせた味や商品展開に取り組む杜氏・水口渉氏の具体的な取り組みや熱意が伝わる案内であった。



▽2回目：11月6日(土)～11月7日(日) 学生29名、大学院生11名参加

・概要

2回目のフィールドワークは、池ノ上ゼミ生だけでなく「リゾート概論」の履修生や、大学院の「観光産業・事業研究演習」の履修生を加えたメンバーで実施した。2回目のテーマは、マップ制作のための情報収集であった。そのため、地域魅力再発見班、アクティビティ開発班、情報発信班の3グループに分かれ、それぞれの観点からフィールドワークを実施した。ニセコ発酵ツーリズム推進協議会メンバーへのインタビューや食の体験、動画撮影等を行った。



また、情報発信として、地元のコミュニティ FM であるラジオニセコの公開生放送「ニセコラジオカフェ」に出演し、学生が活動内容やニセコの感想等の話しをした。概要はその他の欄に掲載する。

また、合わせてニセコ発酵ツーリズム推進協議会のメンバーの集まりにも参加させて頂き、マップ制作の打合せや協議会の目的の確認や今後の発展方針に関する意見交換をするとともに、関係者間の交流を深めることが出来た。

▽上記以外についても、当該企画やフィールドワーク、マップ制作等に関する打合せや個別調査を適宜実施した。

○その他

・情報発信

ニセコ町との包括連携協定締結の際、コミュニティ FM・ラジオニセコの宮川氏と意見交換をさせて頂いた。そこで、学生の活動について、町民への周知や情報共有のためにラジオ出演についてお誘いを受けていた。そこで、ゼミと授業のフィールドワークを実施した 11/6 にグループ毎に出演をさせて頂いた。以下のとおりである。

11月6日(土)12:30~13:35

ラジオニセコ公開生放送「ニセコラジオカフェ」出演

3組 10名

○12:30~12:45

出演者：米坂 守人、肖 迪、中井 晴大

札幌国際大学池ノ上ゼミ（2年生）

トーク内容：ニセコ発酵ツーリズムマップ制作（情報発信チーム）

○12:45~12:57

出演者：王 芸君、杉本 響、王 嘉琦、戴 博深

札幌国際大学大学院「観光産業・事業研究演習」履修生

トーク内容：中国人留学生から見たニセコ

○13:20~13:35

出演者：松岡 亜紀、品川 愛樹、大谷 円香

札幌国際大学「リゾート概論」履修生

トーク内容： 大学生が見たニセコのイメージ



・マップ作成

前述したとおり、マップ作成の目的は、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げであった。具体的には、コミュニケーションの円滑化と関連情報の収集と編集、一覧できるツールとしてのマップ制作である。利害関係の少ない学生によるフィールドワークをきっかけとし、関係者が交流し、協議会の目的の確認等をおこなってもらうことを意図した。

また制作について、学生はもちろんのこと、当該協議会メンバー、制作協力者としての小川基氏（アイヌデザイナー）、中根宏樹氏・中根萌氏（ライター・デザイン）らで取り組んだ。

(3) 活動成果

今年度の活動の成果としては、前述したとおり、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げ、情報の発信、マップの制作を達成した。

以下に制作したマップを掲載する。そこに当該協議会メンバーの一覧、地理情報等を掲載した。また制作に関しては、北海道遺産協議会の WAON 助成も活用した。



**NISEKO
HAKKO
MAP**

ニセコ発酵ツーリズム推進協議会
Niseko Fermentation
Promotion



ニセコの発酵家

赤石 泰洋
シャルキュトリー アカイン
ニセコ町字星見 11-26
090-2072-2666

「食べる」を彩り、豊かにする。その特別な瞬間のために時間をかけて、素材の持つおいしさを引き出します。長時間熟成した生ハムやサラミ、チーズを彩るパテやレバーペースト、ピクルスなどのフレンチチリをお楽しみください。

水口 涉
ニセコ酒造
倶知安町旭47
0136-22-1040

大正5年創業。加水調整をしない原酒、水、空気、酵母にこだわる加減。ニセコワイズ山崎の常滑水と、羊蹄山の「湧出し湯水」を使用しています。また、全銘柄で醸造酒度を100%使用。この他、この蔵ならではの味わいを生み出しています。

近藤 裕志
ニセコチーズ工房
ニセコ町字近湯425番地6
0136-44-2188

世界コンテストでスーパーゴールドを受賞した「仁志古 袴 (bonji)」、国内コンテスト、ブルーターズ部門で3連覇した「ニセ古 空 (ku)」など、羊蹄山の生乳を使った、国内外コンテストで多数受賞したチーズが自慢の蔵です。

矢吹 彰子
羊蹄山麓ビール工場
ニセコ町羊蹄山麓地
070-2182-3437

世界のお茶の専門誌「ピビア」の食に関するブランド「ピビア グルマン」によるルビシア「羊蹄山麓ビール」。ニセコの赤湯と醸造家のこだわりから生まれた、新世代のブルマンのためのオリジナル・クラフトビールです。無添加にこだわった新鮮なビール本来のおいしさをどうぞ。

前田 伸一
HAKKO GINGER
倶知安町居尾44-55
0136-25-4730

本物を味わって欲しいという思いから生まれた、日本初の自家製ジンジャーbeer。生姜、レモン、唐辛子など健康増進材料と、こだわりのいい酵母で発酵させたヘルシードリンクです。

鈴木 隆広
ニセコ蒸溜所
ニセコ町ニセコ478-15

倶知安に湧き出るようにたずむ美しい湧出所。ニセコアンタリの良質な硬水を抽出し、大麦、麦芽などを原料とするモルトウイスキーを主に製造しています。原料と製法が楽しめるバーカウンターのほか、ウイスキーのように樽の経過とともに色調が深まるような工芸品の販売も。

櫻井 繁
ニセコビール醸造所
Niseko Brewery
ニセコ町本通4-11
0136-55-5664

2013年に開業した、ニセコ町で唯一のクラフトビール醸造所。小規模ながらこだわりの新築ビルで、世界的に人気のニセコでも人気を集め、醸造所の2階には、ニセコ産物の販売が広がるグリフリアーカフエバーが併設されています。

服部 吉弘
LoLaLa Farm
ニセコ町字星見 68-1
090-2262-3814

目に見えないエネルギーを呼び込んで物語を変化させる「発酵」の法則を活用し、自然を壊さない持続可能な農産物のあり方を提案する小さな農場です。純粋な水、豊かな空気、農産物の産地の差が生まれる。また品質を高め、食べながら笑顔になれるよう思いを込めて野菜を育てています。

長島 昌志
Black Fox Beer
黒狐 家酒
倶知安町北沢東西3丁目15-1
0136-55-8919

北海道産の醸造所。011でつくられた醸造所は個性が溢れる空間で、特に3人缶から加工した醸造所は「異国産の原料にこだわらず手間と時間をかけて醸造するのは、一歩違った「011」ならではのクラフトビールです。

遠藤 威
ニセコ高橋牧場
ニセコ町曾我888-1
0136-44-3734

牧場に使用している牛乳は、ニセコ高橋牧場からしぼりたてを搾りています。良しを作り、良質な牧場を育て、食せると共に飲む。添加物も力づけ、素材を活かしたシンプルなおいしさを目指します。

本間 泰則
ニセコワイナリー
ニセコ町近湯 194-8
0136-44-3099

羊蹄山の麓で原料となる有機ブドウを栽培し、醸造する醸造所です。ワイナリーを加工して作る小さなドメーヌです。環境に優しい新しい醸造スタイルを大切にしながら、醸造された果実とフレンチプレスや様々な醸造法が楽しめる特別なお酒を醸造、販売しています。

ニセコ発酵ツーリズム推進協議会

地域の食品、飲食、観光事業者などの有志メンバーにより、2021年に設立しました。ニセコ地域の新たな楽しみ方として「発酵」をテーマとしたツーリズムやイベントを提案します。

制作協力：札幌医科大学観光学部

このマップは「ニセコ発酵ツーリズム推進協議会」の協賛により制作しました。

(4) 今後の課題

当該調査研究は、ニセコの食文化を探求することを目的として企画した。今年度は、水と緑が豊かな山岳地域であるニセコ地域の特徴的な食文化である“発酵“に着目した。そして、研究目的の単なる情報収集ではなく、大学と地域との連携の良さを活かすため、今後のニセコ地域でのツーリズムの発展やまちづくりへの展開を意図し、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げの支援に取り組んだ。

ただ、コロナ禍もあり、当該協議会と学生との十分な交流機会を設けることが難しかった。また、調査研究としても当初の目的を十分に達成したわけではない。ニセコの発酵文化については、現状の列挙に留まったため、なぜ発酵文化がこれだけ展開しているのか、観光や商品といった商業展開はもちろんのこと、郷土食としての現状や課題の把握など、より深掘りすることが今後の課題である。また、当該協議会の活動を支援する上で、それらの情報を共有し、活動への活かし方についても一緒に検討することが出来ると良いと考える。さらに、発酵文化以外のニセコ地域の食文化についても明らかにすることも重要であると考えている。

謝辞

本研究の実施にあたり、ニセコ町との連携にご尽力を頂いたニセコ町教育長の片岡辰三様、研究企画と連携体制、およびフィールドワークにご協力頂いたニセコ町商工観光課課長の齊藤徹様、同主幹の高橋葉子様、コロナ禍にも拘わらずフィールドワークにご協力頂いたニセコ発酵ツーリズム推進協議会（代表・水口渉様）の皆さま、情報発信にご協力頂いたラジオニセコ放送局放送局長の宮川博之様と小林愛菜様、宿泊でお世話になったモイワリゾートオペレーション合同会社（LODGE MOIWA 834）の吉村政哉様と長島佳純様、マップ制作でお世話になった ToyToy 屋の小川基様、エゾシカ旅行社の中根宏樹様と中根萌様、その他各施設の関係者やスタッフの皆様に心より深謝申し上げます。

2 ニセコにおけるアウトドアビジネスに関する調査研究

アウトドアガイド育成についての研究～アイヌ文化のアウトドアプログラムへの応用とニセコ地区での実装に向けた考察

担当者 藤崎達也

1.経緯

北海道観光におけるアウトドア事業の活動は全国に比べて活発ということが出来る。その中でもニセコ地区は特にガイド事業者の数やプログラム数も充実しており、北海道のアウトドア観光の先進地と呼ぶことができると思われる。

一方その歴史は浅く、90年代の後半から北海道各地にアウトドア事業者が生まれ現在に至っている。ニセコ地域も例外ではなく、特にオーストラリアから移住したロス・フィンドレー氏の NAC が牽引したと言えるが¹、同時代に立ち上がった新興の事業と呼ぶことができる。筆者も98年に知床にアウトドア事業を立ち上げ（知床ナチュラルリスト協会 shinra 1998年～）、また、北海道のアウトドア観光を支えた北海道のアウトドア振興条例に基づくアウトドア資格制度の立ち上げにも関わった。このような経験から、北海道のアウトドア事業者の多くの事業者と交流があり、経営事情等に明るい。筆者と同世代の経営者が多いことから、今後、引退や次世代への継承の時期に来ていることが想像され、経営環境に深く突っ込んだ調査を行ったところ、コロナ禍の2019年には廃業の意思を示す事業者が全体の2割いることが明らかとなった²。

現在、北海道の観光を支える切り札として「アドベンチャーツーリズム」が行政を中心に導入が進められている。しかしその担い手は脆弱な経営状態であることはこれらの調査や、事前のインタビュー等でも予想できた。観光を研究する機関によりアウトドアプログラムの作成や地域への導入などは行政等を中心に進められてきているが、現在活動している事業者へのサポートや新たな人材確保の対策が十分に行われているとは言えない。

そこで筆者は、自身のノウハウを活用しニセコ地域での新たなアウトドアプログラム開発や人材開発を検討するプロセスの中から、今後の北海道観光のアウトドア事業育成についてのオルタナティブを見出すことを構想した。特にアウトドアプログラムの盛

¹『北海道観光50年の奇跡』2022.3 一般財団法人北海道開発協会

²「アドベンチャートラベル担い手の危機」藤崎達也『観光文化』246号(2020年8月)

んなオーストラリアやニュージーランド、カナダなどに比べ、先住民族の文化をプログラムに反映させる取り組みが少なく、異文化交流などに日常的に関心を持つ欧米からの観光客に対して訴求力を持つコンセプトとして、アイヌ民族文化とアウトドアを捉えることとしてこの研究を始めた。

2. アイヌ民族文化とアウトドア観光

筆者は17年間にわたって知床を拠点とするガイドとして観光の現場に立ってきた。1998年に知床ナチュラルリスト協会を立ち上げ15年間代表者を務めた。この間、2003年には岩手県田野畑村で体験プログラムを提供する番屋エコツーリズムの立ち上げに参加するなど、日本各地でのアウトドアプログラムの開発にも関わっている。そのような中で、知床では「先住民族エコツーリズム」というものの立ち上げに関わった。

そこでは北大名誉教授でアイヌ民族の活動にも深く関わっていた小野有五先生とともに「SIPETRU/シレットコ先住民族エコツーリズム研究会」を立ち上げ、世界自然遺産としての登録が目前となっていた知床・斜里町で、アイヌ民族によるエコツーリズムを立ち上げた(2005年)。ツーリズムではアイヌ民族の伝統的な歌や踊りの紹介をするのみではなく、ハワイやニュージーランドなどでの先住民族による先進的なエコツーリズムへの取り組みを参考にし、アイヌアートプロジェクトの結城幸司氏らと具体的なツアー作りに取り組んだ³。当時知床半島はIUCNの勧告を受け世界自然遺産に登録される見通しであったが、IUCNの評価書の中には管理体制へのアイヌ民族の関与の必要性についても触れられていた。SIPETRUでは5月、他のアイヌ民族のグループと共に環境省やIUCNなどに対して、知床世界遺産管理におけるアイヌ民族の関与の重要性を訴える意見書を提出しており、IUCNの評価書はそれらの意見書を反映したかたちとなったことは、観光が単なる旅行者の案内にとどまらず、民族共生に寄与し一定の評価がされた。さらに当時SIPETRUの調査によると知床には「チャシ」と呼ばれる先住民族の遺跡が多数現存しており、樺太アイヌや北海道アイヌといったいくつかの民族が、それらを聖地のように語り継いでいることも明らかとなり、ツーリズムの計画そのものが地域の文化再興に役立つことが分かった。

ニセコ地域においては、全国のアウトドアビジネスの参考となることから、アウトドアプログラムの開発というアプローチから地域の文化を見直し、さらにそのスピリットをプログラム自体にフィードバックするプロセスを通して、例えばアイヌ文化をモチ

³ シレットコ先住民族エコツーリズム研究会 プレスリリース

「世界自然遺産知床～先住民族がエコツーリズムを開始します」2005.7

ーフとしたプログラムが開発されれば、全国の手本となると考えた。

とはいえ、知床での経験から、そもそもアイヌ民族として生活するアイヌ民族の人は少数であり、その上さらに観光に従事しようとなると人材は絞られ、その中からアウトドアの資質やインストラクターとしてプログラムを支えていくことは、ただでさえ人口減少の昨今において非常に狭き門であることが想像される。昨今では国によるウポポイ民族共生象徴空間が設置され、充実した集客と人材育成体制が生まれたと言えるが、アウトドアプログラムのノウハウは既存の事業者等との連携が望まれる。また予備調査を進めると、そもそもの現存アウトドア事業者の持続可能性に課題があることがわかり、本調査ではアイヌ民族のツアーに限らず北海道のアウトドア観光がおかれている状況について、ガイド事業の実情とそれを支える諸制度の課題を明らかにすることとした。

3.調査の概要

当初ウポポイスタッフとアウトドアガイドとの意見交換等を直接的に行うことも考えたが、コロナ禍で実施が不確実なため、筆者が知床時代にガイドとして雇用していた者などがウポポイでの解説員として就職していることもあり、彼らの意見をメールなどで聞き取ったり、カヌープログラム等ニセコにも関係の深いアイヌ民族に伝承される技術にまつわる聞き取りなどを関係者から行うこととした。そこで、特に①新たなカヌープログラムの導入に関すること②新たなアウトドア人材の育成プログラムに関することを、カヌーの専門家や制度設計を担うコンサルタントなどに対談・インタビューを行うことにより明らかにした。

<対談・インタビューを行った専門家>

■井尾 文継 氏

職業 株式会社スポーツジョイ 代表取締役

大分県大分市出身。大分県内でのカヌー競技第一人者。地元大分にて学生時代を過ごし、高校卒業と同時に広島大学に進学。その後稼業を継ぎスポーツの推進とともにスポーツツーリズムに携わる。アウトドア用品の開発販売を手がけることから、最新のアウトドア事情に詳しい。さらに大分県のアウトドアガイド資格制度の研究会を立ち上げ、北海道の事例を客観的に調査している。

■板谷 貴文 氏

個人事業「ダイビングショップ・オーシャンデイズ」から (株)オーシャンデイズ設

立。代表取締役。支笏湖地域を中心にカヌーやダイビングなどのアウトドアプログラムの展開を手がけている。

■酒本 宏 氏

株式会社 GLOCAL DESIGN 代表取締役 人口減少社会のまちと暮らしのデザインをテーマにするまちづくりプロデューサー。観光まちづくりや地域コミュニティの活性化・再生、エリアマネジメント、地域ビジネス、シビックコミュニケーションなどを手がける。北海道のアウトドア資格制度を運営する北海道アウトドア協会事務局の草創期を担う。

■小林茂雄 氏

南富良野まちづくり観光協会の小林茂雄理事 (有) ビーバーカヌー代表取締役
北海道で本格的なアウトドアビジネスを定着させた然別湖ネイチャーセンター初代スタッフ。OLD TOWN カヌーの輸入代理等を行う傍ら、カナディアンカヌーのセルフビルドを北海道に定着させ、数多くのカヌービルダーを育成した。アイヌ民族をはじめとする先住民族のカヌー文化にも明るく、将来のアイデア等を伺う。

4.井尾 文継氏×板谷 貴文氏

日時：2022年3月10日

場所：支笏湖 (株) オーシャンデイズ事務所他

内容：支笏湖のバイカモを観察しながら SUP 体験ができるように、透明な SUP を制作開発した板谷氏のツアー造成や SUP 開発のビジネスの裏側を伺うことにより、ニセコや周辺地域でのアウトドアプログラム開発におけるヒントや課題を抽出する。ボイスメモをとり筆者がまとめたものである。

4.1.アウトドア事業の現況について

コロナ禍を受け外国人旅行者などは激減したが、実は 2021 年度はコロナ前よりも売り上げが向上している。事業規模としては 5,000 万円程度だが、最高益を予定している。これは、コロナ禍により近場のアウトドア需要が増え、札幌圏からの旅行者に動きが見られたことや、かねてより取引を続けていた各旅行会社からの支援によるところが大きいとのこと。

4.2.アウトドア事業の人材継承について

他地域と同じく人材の確保には苦勞をしており、学生向けにアルバイトを募集するなどを行なっている。また昨年より北大と連携してのインターンシッププログラムを導入している。観光産業はトップシーズンに売り上げが集中することもあり、労働環境はお世辞にも良い状況とはいえない。しかし、特にガイド業は毎日お客様の笑顔に触れることができ、観光という楽しむことを目的にくる接客業はサービスが好きな若者にとっては最適な仕事だと信じている。例えば優勝のインターンシップなどで、トップシーズンのガイドを体験することにより、将来はフリーガイドとして副業として観光に関わるなど可能性が広がると考えている。以前はいわゆる「丁稚奉公」や「経験を積む」というプロとして活躍できない期間は、本人の修行の段階であるという認識があり、それも許される風潮があった。他にもガイドが地域に根ざし、地域の文化継承の担い手になるなど、地域の空気感を纏うことが重要であり、そのような育成スキームを作ることができないか試行錯誤している。

しかし、法人としてできることは給料体系やさまざまな福利厚生を整備などであり、まして起業をすとなれば、家庭の大黒柱になる気概が求められる。現状では行政の補助事業で食いつないでいるような事業者も多くプロ意識が育ちにくいと危惧している。

4.3.行政等によるアウトドア振興に関する感想

北海道ではアウトドア振興条例を作りアウトドアガイド制度を創設したが、実質的に機能していない。現状ではガイド個人を育成する資格制度という意味合いが強く、そもそもガイド事業自体が根付いていきにくい状況。また、地域に根ざした自然や文化を扱うという性格上、事業者が一般的な地域活動から一步踏み込んだ存在として期待されていることを捉え直す必要がある。例えばPTAや自治会活動といった地域活動をガイド事業者の若いスタッフが担うことにより、カヌーの降り場周辺の除雪や、事故の際の相互扶助といった地域で担わざるを得ない役割に対して理解を得ることができる。さらに、外部から利用だけで入ってくる事業者には地域の人々からの冷ややかな目があるが、地元の事業者が中心となってそれらも含めたルールなどが根付いていくことが今後重要になる。筆者がガイド事業を始めた20年前はそのようなことを自然と行っている事業者が多かったが、最近の若いガイドには自覚が少なくトラブルも多い。最近は気軽にツアーの形やお金になるということで簡単に始めてしまう。

4.4.明文化されていないようなローカルルールへの遵守とそのアイデア

例えば沖縄のガイド事業者などはみさきごとにある祠の維持清掃などを地道に行う事業者が理解されて、結果売り上げも上がっている。自然を借りてビジネスをする以上そのような姿勢は重要だが、明文化されたルールではないだけに浸透しない。

それは文化面でも言えると同時に、例えば保険の補償額や地域の自然保全活動など、定量化しにくい活動を行政等の制度で引き上げる工夫を求める。以前は旅行会社がそういったガイドの資質を見極めてきたことがあったが、インバウンドブームで参入がしやすくなり、ICTの普及により商売もしやすくなった反面、無法状態といっても良い状況。

地域での保全活動などについては、例えば基金をきちんと創出して「事業者は年間〇〇円の積み立て」といった分かりやすい制度も必要である。支笏湖の場合は国立公園なので保護と利用の枠組みの中で検討中。お金を払ってでも楽しんで地域の自然を守りたいという旅行者を増やし負担をしていただく仕組みを作るべき。単純に利用する自然を地域で借り上げるなどやり方はあるはずだ。

<制度を検討するとしたら>

次のような評価基準を盛り込むなどのアイデアが考えられるのでは・・・

- ・ 鮎釣りなど地域の清掃活動などで協力し合う仕組みなど
- ・ 法人か個人か地域の観光連盟や警察消防に届出がある
- ・ 他の事業者に声かけをしやすい仕組み（ガイドステーションなどの整備）
（支笏湖に出入りしている事業者の数約30事業者）
- ・ 資格を発行することでお墨付きを与えることでガイドに免罪符を与えるわけではない
- ・ 人気の景勝地は利用できる事業者やガイドをセレクトできるような仕組み
- ・ 入れる場所は自治体や地域などで買い取って有料にするなど

5.井尾 文継氏×酒本 宏氏

日時：2022年3月11日

場所：(株) グローカルデザイン事務所

内容：北海道アウトドア資格制度の立ち上げ当初の話を伺うことにより、アウトドアプログラムスタートアップの際のさまざまな障壁について調査。90年代と現在との違いを考えながら、今行う際の課題を抽出する。

5.1.KITABA がアウトドアや観光に関わるきっかけ

まちづくりのコンサルタントとして活動していて、各地の自治体から依頼されて観光コンテンツを作るなどをしていた。たまたまアウトドア協会を作った時も道庁から依頼。しかし、アウトドア振興条例やアウトドア資格の制度設計事態がスタート時から様々な問題を抱えていた。それは例えば次の通りである

- ・資格取ったからといってガイドにとって何のメリットもない。試験も研修も受けてもアウトドア協会のホームページで紹介される程度。
- ・制度自体が民間で自走できる状態ではなかった（保険の仲介料収入等独自財源を作ることが難しかった）

そこで、当時のアウトドア協会は研修の実施、試験の実施といった北海道からの委託事業に集中し、プロモーションとガイドのバックアップに徹した。それによって、観光産業の中でのガイドの底上げには役に立った。

一方、当時は旅行会社が旅行商品の流通を担っていたが、旅行会社はどこのガイドが受かったか？が気になるものの資格がなくても安いガイドに契約が流れるという現実があった。資格がなくても営業できることはそもそも問題だと感じた。

5.2.北海道アウトドア資格制度の枠組み

当時は伏島先生などを座長とし地域政策系の事業として進められていた。知事の直轄事業であった頃は知事に直接意見はできたが、政権が移譲しそこら辺がうまくいかなかったことを覚えている。また制度の作文自体は行政が中心となって作ったため、ガイド業・ビジネスを盛り上げるという視点には欠けるものであった。ニュージーランドのようにガイドがいないと観光ができないという仕組みにつなげる必要があると感じた。

当時、ニュージーランドの QUAL マークという品質保証を提案したが、そこでは研修主催団体として収入がしっかりしており、持続的に運営されている。

6.まとめ

板谷氏のヒアリングでも述べられている通り、アウトドア事業はもともと地域の資源をいわば「無料で」拝借しビジネスにしているという性格がある。そのため、その資源の保全に関わろうとする態度を、実際に保全に関わっている行政や地域のコミュニティから求められている。一方、行政によるルール化では北海道では「北海道アウトドア

振興条例」に基づく、北海道アウトドア資格の制度があるにもかかわらず、様々な問題が浮き彫りとなった。また、ガイド事業者に求めることとしてユニークな点は、筆者も当時制度設計に関わる中で、地域の祭りや文化を十分に理解し支えるという姿勢が求められることだ。その点、アイヌ民族の文化をツアーとして育てていくに際しても同じことがいえ、今回はコロナ禍での広範な調査ができなかったこともあり、アイヌ文化をプログラム可する際のアイデアとして、文化を支える人々とともに作り上げるカヌープログラムのあり方を提言する。

北海道におけるアウトドア黎明期から今までを知る小林氏より下記のような可能性をサジェストいただいた。それは、アイヌ民族やアウトドアガイド事業者等が連携し意味のあるトレーニングを行える体制を構築することによって実現が可能と考えられる。今回のインタビュー等で得た知見を活用し今後プロジェクトとして推進体制を検討したい。

例えば、下記のようなプログラムを実施することと、調査対象の方がおっしゃっていた「地域の伝統的な文化」「コミュニティ」「ガイド育成」という視点を組み合わせたプログラムが可能と考える

<アイヌ文化のアウトドアプログラム創出プロジェクト>

「アイヌの本物の丸木舟のレプリカ制作と長距離漕行」

「タイムカプセルから本物の丸木舟を呼び出す」--勇払原野から出土した丸木舟の原寸採寸。

「ストリップカヌー工法(細い板とFRP)による丸木舟のレプリカ製作」--重さも推測により再現する。

「実際に丸木舟が漕げるアイヌ探し」--ポロト湖白老アイヌ、塘路湖のアイヌ土佐良範さん

「櫂、棹づくり。パドリング、ポーリング、ポーテージ(担いで移動)練習」

「太平洋から日本海へ」--太平洋-ウトナイ湖-美々川-千歳川-石狩川-日本海への長距離漕行。⁴

⁴ 「ムカルさんへの伝言」小林茂雄 2021年



板谷氏と井尾氏の対談(2022年3月12日)



丸木舟と近い操法の SUP (筆者)



伝統的な丸木舟を操るムカル氏
(2019年ウポポイ)

3 ニセコの観光資源の多様性を生かす言語内容統合学習に関する研究

担当者 杉江聡子

研究計画概要：

伝統的に第二言語習得では、母語話者を理想像として伝統的な言語知識や運用技能の習得を目指すことが志向されてきた。しかし、日本の社会構成や外国語教育環境を考えると、ICT や様々な学習リソースを活用しながら「第二言語話者としての一定レベル」に到達することを目指し、学習の過程で適切に学習意欲のデザインを考慮し、自身の文脈で自分のことばを語れるようになることが重要である。とくに世界的に言語内容統合学習（CLIL）や CBI（Content-Based Instruction）の潮流があり、外国語に直結する要素だけでなく、学習者の関心や専門を最大限に活かす学習活動を展開することが必要である。そこでニセコの観光資源の多様性の理解をとおり、第二言語習得に関する学習活動をデザインし、教育実践を通じて、教授設計を評価することを目的とする。具体については以下を想定する。

- ①日本人学生と留学生のチームで、ニセコ町の観光資源の多様性を調査する（まなざしの交換）
- ②調査の過程で、ICT ツールを活用しながら多言語を用いた異文化間コミュニケーションや資料作成を行う
- ③成果発表のための映像作品を制作する（音声または字幕による多言語対応）

1. 教授設計

1.1 授業のねらいと活動計画

2021（令和3）年度秋学期の2年演習（以下、ゼミ）及び修士論文指導演習の活動の一環として、ニセコ町の国際化と多言語活動の取り組みに関する現地調査を取り入れた（表1）。ゼミ全体の到達目標は、北海道の地域の魅力を伝えるための観光プロモーション動画の企画、制作、発信ができるようになることであった。そのため、プロの映像クリエイターをゲスト講師に迎えて4回の遠隔ゲストレクチャーを実施し、動画制作の基本、企画書の作成、テーマと全体構成の考え方、動画編集アプリの操作方法を学び、作品に対する講評を得て完成した作品を北海道主催の動画コンテストに応募した。修士論文指導では、現地観察調査、聞き取り調査、質的データ分析の実践を通じて研究手法を学ぶことをねらいとした。

2年ゼミ生の構成は、日本人3名（男3）とベトナム人5名（男2、女3）、修士論文指導演習の構成は、中国人3名（男1、女2）であった。

表1 秋学期2年ゼミの授業計画

時期	授業回	活動内容	参加者	授業形態
9月	1	ガイダンス	2年ゼミ生	対面
	2	ゲストレクチャー①映像制作の基本	2年ゼミ生	遠隔
10月	3	映像の企画（コンセプト、ターゲット、伝えたいこと、公開プラットフォーム、映像規格等）	2年ゼミ生	ハイブリッド
	4	ゲストレクチャー②企画書作成、テーマ決定、全体構成の検討	2年ゼミ生	ハイブリッド
	5	企画書の作成、ニセコ町事前学習（高橋牧場の6次産業経営について、国際交流員と図書館の多言語交流活動まとめ）	2年ゼミ生 +修士院生	対面
	6	ニセコ町事前学習（グループ調査計画と行程表作成）	2年ゼミ生 +修士院生	対面
	30日・ 31日	ニセコ町フィールドワーク1回目	2年ゼミ生 +修士院生	対面
11月	7	ニセコ町事後学習（成果報告とまとめ）	2年ゼミ生	ハイブリッド
	8	ニセコ町事後学習（成果報告とまとめ）	2年ゼミ生	ハイブリッド
	13日	ニセコ町フィールドワーク2回目	修士院生	対面
	9	撮影した素材（写真・動画）の整理と共有	2年ゼミ生 +修士院生	対面
	10	ゲストレクチャー③動画編集アプリの操作方法	2年ゼミ生	遠隔
12月	11	動画作成（シーン構成、画面効果、テロップ、字幕、BGMの追加等）	2年ゼミ生	遠隔
	12	動画作成（シーン構成、画面効果、テロップ、字幕、BGMの追加等）	2年ゼミ生	遠隔
	13	作品視聴、相互評価、修正コメントフィードバック	2年ゼミ生	遠隔
1月	14	作品視聴、相互評価、修正コメントフィードバック	2年ゼミ生	遠隔
	15	学年合同成果発表会 ゲストレクチャー④作品発表・講評会、最終修正	2年ゼミ生	遠隔
	16臨時	コンテスト応募準備（応募締切1/31）	2年ゼミ生	遠隔

1.2 授業形態

過年度から続く新型コロナの感染拡大により、授業形態は対面、遠隔、ハイブリッドを適宜切り替えての実施となった。ゲストレクチャーの回は、講師が東京在住であるため遠隔授業を行い、学生は各自の自宅や大学の共用パソコン室から受講した。通常授業は、秋学期冒頭は対面授業でスタートしたものの、途中で遠隔授業に切り替えることとなった。対面授業の回も、体調不良を理由に遠隔受講を希望する者がいた場合にはハイブリッド授業とした。ニセコ町フィールドワークは2回とも、少人数であること、屋外や広い空間でソーシャルディスタンスを維持できる活動が中心であること、シーズンオフのスキー場隣接ホテル（LODGE MOIWA 834）を貸し切りにして宿泊できたこと等の条件を満たし、消毒、黙食、マスク着用などを周知徹底することで、対面で活動することができた。なお、10月～11月は学生の新型コロナワクチン接種時期であったため、日本人学生1名は出発日に副反応が強く出てしまい欠席した。

2. 調査の実施

2.1 行程

ニセコ町のフィールドワークは2回に分けて行った。1回目は10月30日（土）・31日（日）の1泊2日で、2年ゼミ生を中心に実施した。2回目は11月13日（土）の日帰りで、修士院生を中心に実施した。調査地と行程表は表2の通りである。1回目の移動手段は、大学バスが部活動等の利用で予約できなかったため、千歳相互観光バスを予約手配した。

表2 ニセコ町のフィールドワーク行程表（上：1回目、下：2回目）

行き先			ニセコ町現地調査 1泊 2日 (札幌国際大学奨励研究+2年ゼミ動画素材撮影)		引率教員:杉江聡子 ドライバー:寺島 様	携帯:090-6446-1684 080-1893-6552	車番 29-37	配車大型バスに変更
日	年月日	曜日	旅程					
1	10月30日	土	【行程】 札幌国際大学 ===== ニセコ着 ===== ミルク工房 ===== マンドリアーノ ===== ニセコ役場 =====					
			【時刻】 8:30集合/8:45出発 10:45 11:00~12:00 12:00~12:45 13:00~14:30					
			【備考】 1号館玄関集合 施設見学・聞き取り調査 昼食(ピザ・各自自由) 全体説明・国際交流員聞き取り等					
			【行程】 ===== ニセコ図書館あそぶっく ===== コンビニ立ち寄り ===== ホテルIN/ゼミ活動 ===== 甘露の森 ===== 自由行動・就寝					
			【時刻】 (徒歩移動) 14:40~16:10 16:30頃 17:00~18:00 18:00~19:30 19:30~					
			【備考】 図書館内見学・越瀬様聞き取り等 調査報告と翌日の確認 日帰り温泉 HTLで食事等 *あそぶっく訪問・調査が早く終われば、ラジオニセコ立ち寄り、宮川様挨拶					
2	10月31日	日	【行程】 ホテルOUT ===== プリーフィング ===== グループ調査 ===== ニセコ駅集合 ===== 道の駅ニセコ					
			【時刻】 9:30 9:30~9:45 10:00~13:00 13:00 13:15~15:00					
			【備考】 朝食を済ませておく グループ調査行程確認等 2班に分かれて自由行動・昼食込 グループごと調査報告・買物					
			グループ調査【DUONG班】第二有島だちょう牧場→有島記念館→ニセコ駅 【貴太郎班】第二有島だちょう牧場→ニセコ駅周辺カフェ・店舗調査					
			第二有島だちょう牧場 https://ostrichfarm.mystridngly.com/ 〒048-1543 北海道虻田郡ニセコ町壺里239-2 電話090-8273-8324					
			【行程】 ===== ニセコ発 ===== 札幌国際大学着・解散					
【時刻】 15:00 17:00頃								
【備考】								

曜日	旅程					
土	【行程】 真駒内駅 == ニセコ着・ニセコ道の駅 == ニセコワイナリー == ラジオニセコ == ニセコ発 == 真駒内駅着					
	【時刻】 8:45集合/9:00出発 11:00~12:00 12:30~14:30 14:45~15:45 16:00 18:00					
	【備考】 改札外集合 昼食 本間真由美様聞き取り調査 宮川様聞き取り調査					

学生らは全員、ニセコ町を訪れた経験がなく、ニセコ観光圏についても知識がなかったことから、全体調査で聞き取り調査やニセコの国際化と多言語活動について共通認識を得ることとした。その上で、動画の素材として自分たちの関心や魅力を感じるものを発見できるようグループ調査の時間も設定した。全体調査のための事前学習として、訪問地である高橋牧場ミルク工房、ニセコ町役場、図書館「あそぶっく」における国際化や多言語交流活動について、文献、WEB サイト情報、ニセコ町の広報資料等などを調べてまとめた。また、各訪問地について教員が質問リストを作成し、それに関連して学生らの興味関心に基づく質問項目を追加した。質問リストは、教員が調査実施日の3～5日程度前に各訪問地の担当者宛にメールで送信し、主な回答を想定してもらい、当日の聞き取り調査が円滑に進むよう配慮した。グループ調査にむけては、訪問地、調査目的、撮影素材、費用などを検討した行程表を作成すると共に、移動時の交通手段であるオンデマンドバスの予約などもグループごとに行った。

2.2 訪問地①高橋牧場

調査初日の最初の訪問地は高橋牧場ミルク村であった。到着後、ミルク工房の製品販売所、製造工場の一部などを見学しながら、高井氏より事業や商品の特徴などについて説明を受けた（図 1）。その後、学生らと共にゼミの事前学習で作成した質問リストに沿って、高井氏から回答や意見の聞き取りを行った。質問と回答の一部を抜粋し、表 3 に示す。



図 1 高橋牧場の施設見学と聞き取り調査

表 3 高橋牧場の聞き取り調査結果

学生からの質問	担当者からの回答
<p>地元の農産物などを使った製品づくり商品作りにこだわるのは難しいと思います。例えば、その地域で取れるものも限られてくるし、その地域にあった製品・商品が作れるとも限らない点が難しいと感じます。その点 について、コロナ前後で何か状況が変わったことはありますか。</p>	<p>できないものを無理にとは考えていません。例えば、ニセコはジャガイモの産地ですがジャガイモをアイスに入れることはありませんが、グラタンにするとおいしいですね。おいしいことが一番大事です。地域の産品に関して、コロナの状況で変わったことは大きくはないです。余市のブルーベリーなど、規格外品は在庫過剰のように聞いています。</p>
<p>事前学習をつうじて、自社生産の食材を用いたスイーツの開発や販売に力を入れていることを知りました。北海道の観光地などでソフトクリームは多いですが、例えば帯広など他の地域、他者製品、牧場 経営をしていない観光施設との違いや、こだわっているところなどはありますか。</p>	<p>「牧場が作ったから」という独りよがりなこだわらず、愚直においしいものにこだわっていることと、他の牧場とは違う商品群を作るよう心掛けています。例えば、バームクーヘンやミルクチョコレートを作る牧場はありません。</p>

<p>ニセコは有名な国際観光地域ですが、コロナの影響により旅行者がいない期間、高橋牧場の事業や活動にどのような影響がありますか。</p>	<p>国際的といっても、外国人観光客は数字の捉え方にもよりますが実際は1/10です。</p>
<p>ミルク工房はニセコを旅行する旅行者の間で知名度が高く人気地域ですが、未来の高橋牧場は旅行業に参加する計画がありますか。</p>	<p>旅行業には主体的に参加する計画はありませんし、宿泊業も同じです。広く観光業においては同業者がいないから、応援してもらいやすいということも起こります。仮にみなさんが宿泊業をやっていたら、隣のホテルの宣伝はしないですよ？地域に応援してもらいやすい、というのも重要な要素だと考えています。</p>
<p>ニセコに住む外国人が多く、旅行開放後はさらに世界の旅行者が訪れていますが、高橋牧場には現在、外国人従業員がいますか？ いる場合:どんなメリットと不便な点がありますか。近い将来、外国人従業員を受け入れ、国際化していくことを考えていますか。</p>	<p>牧場には常時外国人実習生がいて、店舗の方にも2年に1人くらいいます。我々の店舗で働きたい外国人の方の多くは、外国人の少ないところで働いて、日本語を学びたいという意欲のある方が多いため、大きな不便はありません。働き方への考え方の違いはありますが、そもそも移住者が多いエリアなので、個人差ともとれる範囲です。</p>

調査後はピザショップマンドリアーノで昼食を取り、羊蹄山の美しい景観を楽しみながら、高井氏からお話しいただいた乳製品とチーズ作りのこだわりや品質の高さを実感した。一般利用客は日本人だけでなく、ニセコの地元の外国人ファミリーの姿もあり、国際化するニセコの観光地の実態を観察することができた（図2）。



図2 ピザマンドリアーノのチーズ工房と昼食風景

2.3 訪問地②ニセコ町役場での国際交流員との意見交換

ニセコ役場新棟のホールで、片岡教育長、教育委員の越湖氏、国際交流員2名（ミッチェル・ラング氏、梅冠男氏）からの聞き取りを行った（図3）。ニセコの多文化共生を意識した行政計画のポイント、ニセコ町が目指す英語教育と子ども像と取り組み、ニセコの外国人移住の推移、国際交流員が中心となって運営する外国語講座や異文化紹介イベント、住民と共に活動するニセコ観光圏の観光イベントなどについて、事例に基づき様々な情報を紹介いただいた。特にコロナ禍で運営に苦勞した住民向けオンライン外国語講座や、異文化紹介イベントの活動制限によるラジオ放送への変更など、大学における教育・学習活動に共通する内容もあり、学生らも興味深く耳を傾けていた。国際交流員の2人はもともと留学生として日本に来たという経緯があり、異文化理解やコミュニティへの適応の困難やトラブルについては、ゼミ生や院生も同じ留学生という立場から共感するところが多くあったようである。教育委員の越湖氏からは、「放課後子ども教室」という教育政策の主導ではじまった住民参加の異文化交流活動についての経緯についてご紹介いただいた。ニセコの国際化の進展に伴い、地域の人々が日常生活の場面でのように異文化理解や外国語コミュニケーションを受容していったかについて具体的にお話をうかがうことができた。ここでも、事前に学生が作成した質問に基づき質疑応答を行った。質問と回答の抜粋を表4に示す。

表4 国際交流員との意見交換会 質疑応答

学生からの質問	担当者からの回答
世界各国からの人たちと交流して、勉強に	ミッチェル氏：外国人同士だったら繋がりやすい。コミュニティがしやすい。ニセコ町に住んでいる外国人の国籍はさまざまだが、どこの国の人でも友だちが欲しい。だからニセコに来てすぐつなが

<p>なったことは何ですか。</p> <p>その経験から、ご自身の性格と考え方が変わった実感がありますか。</p> <p>どのような変化があったと思いますか。</p>	<p>って、便利になった。母国語が違って、国籍が違って、そんなに違いは多いわけじゃないから、友だちになりやすいと気付いた。</p> <p>自分の性格はそんなに変わっていないと思うが…例えば今まで接触の機会がない国の人たち、例えば中国人には本当に会ったことがなかった。ニセコ来るまでは。あとアジア人もいろんな国々の人に会った。今までに会ったことがない国籍の人だから、世界について知っていることが広がった。(梅氏に問いかけて)私の性格は変わった？</p> <p>梅氏:(ミッチェル氏の性格は)ちょっと変わったと思う。性格の変化というより人の成長。私だったらやっぱり、今まで留学生の時代からずっと日本に来て、ある程度日本の考え方になじめている。ニセコに来て、ここは外国人いっぱいいて、日本の常識は海外の人にとってそうじゃない。でも、それは間違っていない。とすごく感じている。いろんな価値観を持つ人たちと出会うことで自分も世界が広がっている感じ。寛容性を持つようになった。自分が必ず合っていると思っても、相手にとって必ず合っているわけではなく。そういうようなことを寛容することで、もっと相手を理解できるようになる。</p>
<p>コロナが終わったら、あるいは日本のコロナの感染状況がだんだんよくなってきたら、ニセコはどのようなになってほしいですか。</p> <p>国際交流員の活動として、ニセコの中の人、外の人たちとどのように交</p>	<p>ミッチェル氏:少なくともコロナが終わったら、コロナ前と同じ状況になってもらいたい。いつも通りのニセコ町になって戻ればいいなあとと思う。僕は2017年にニセコ町に来たが、ちょうどブームになっていて、観光客が一番多い時期で、そのニセコしか知らない。コロナになっていきなり観光客が来なくて、またもとのニセコになれば嬉しい。もう少し長い目で考えてみると、そのあとのニセコ、今は持続可能な目的=SDGsにニセコ町は力を入れている。2050年、2100年になってもニセコはまだ持続可能な街になっているととてもいい。今のニセコ町はそのような未来性を考えながら行政企画してみると聞いた。とてもいいと思うし、実現していけばいいなあとと思う。</p> <p>梅氏:持続可能な都市、ニセコのこれからの目標の中に、高い質の教育。そういうふうに私たちの仕事も結構関わっているのかなと思う。やっぱりコロナの影響で、学校に行くときも子どもたちとの接触ができなくなって、いろんなことができなくなっている。特にイン</p>

<p>流していきたいですか。</p>	<p>ターナショナルスクールとも交流がほぼゼロ状態。もしコロナのあと、ここに住んでいる日本人の子どもたちに、もっと英語に触れ合ってもらって、ここに住んでる外国人の友だちや子どもたちにもっと日本語を少しでも教えたい。そういうイベントができたらいいい。さっき話した English Tour もコロナの関係でできなくなった。もし来年とか少しづつそういうような制限が解消されたら、子育てに関係あるイベントを企画したい。</p>
--------------------	--



図3 ニセコ町の国際交流員との意見交換会の様子

2.4 訪問地③図書館「あそぶっく」

ニセコ町役場の向かいには図書館「あそぶっく」があり、多言語絵本を数多く収蔵している（図4）。小規模ながらも、日本人にも読み聞かせなどでなじみのある絵本の多言語版があり、例えば、「ぐりとぐら」シリーズや「はらぺこあおむし」など、日本語とは異なる文字や音で構成される絵本の魅力を垣間見ることができた。学生らは世界の多言語絵本コーナーを中心に施設内を自由に見学した後、職員の方に聞き取り調査を行った。施設の管理体制の変更により、従来の図書の配架とは異なる、多国籍な住民や訪問者のための多言語絵本を媒体として、利用者目線でより使いやすく魅力あるものにするための工夫についてお話をうかがった。インターナショナルスクールとの連携、国際交流員と共同で実施する多言語読み聞かせイベント、生涯教育と異文化理解を組み合わせた企画など、ボランティア精神と事業化の葛藤など、現場の様々な工夫と共に、今後の発展の方向性が期待される話を聞くことができた。



図4 図書館「あそぶっく」施設見学の様子

初日の調査は以上で完了し、宿泊施設「LODGE MOIWA 834」(図5)へ移動した。オフシーズンのスキー場ロッジ併設ホテルを貸切で利用することができたため、学生らのコロナ対策も適切にコントロールすることができた。夕食及び朝食は、レストランなどでの食事はとらず、チェックイン前にコンビニで食料を調達し、ホテルのロビーで飲食した。学生らは初めてカプセルホテルに宿泊した者も多く、フロアやユニットに分かれた二段ベッドに宿泊し、修学旅行のような雰囲気を楽しんでいた。夕食後にロビーに集合し、初日の調査まとめと感想をシェアする報告会を行った。事前学習だけからはわからない、具体的で詳しい現場の様子に触れ、日本人も留学生もそれぞれ印象深かった点などを語り合い、共有した。



図5 LODGE MOIWA 834 の外観とカプセルベッド

2.5 学生主体のグループ調査

調査2日目は学生主体のグループ調査を行った(図6)。留学生のみのグループには教員が同行し、日本人を含むグループはリーダー学生主導で、異動や訪問地を決め、小さな旅を通じてニセコの魅力を体験すると共に、動画の素材を集めた。ニセコ町内では、

ニセコバスが運航しているオンデマンドバスのサービスがあり、乗車地、目的地、人数を事前予約して、既定の運賃でドアツードアの移動が可能である。教員同行のグループは全体移動と同じ大型バスに乗車したが、学生だけのグループはうまくニコットバスを利用して、有島第二ダチョウ牧場、野菜カフェ、ニセコ駅へと移動していた。昼食はグループごとに食事場所を決めて取ることにしたが、それぞれニセコの地元の野菜や食材を使った料理を味わうことができたようである。

ダチョウ牧場では、和牛とダチョウの混合飼育と SDGs に配慮した畜産・観光施設の経営についてのお話を聞くことができた。有島武郎記念館では、ニセコの開拓と有島の農地解放、相互扶助や住民参加という現代のニセコに継承されている開拓史精神の一面を学ぶことができた。ちょうど黒百合会の展示会が同時開催されており、留学生にとっては日本の学生の美術作品を見る機会は珍しかったようで、時間をかけて鑑賞し、写真撮影するなど熱心に観覧していた。



図6 第2有島牧場のダチョウの餌やりと有島武郎記念館見学

グループ調査後はニセコ駅に集合し、全体でニセコの道の駅「ニセコビュープラザ」へ移動し、ニセコの食材や加工品、土産品探しと多言語標識の調査を行った。ちょうどハロウィンの時期だったため、町民が装飾したという美しいオレンジ色のカボチャで作られたジャックオーランタンが各所に見られた。大学生にとっては、まさに SNS 映えする秋のニセコの観光景観を体験することができた(図7)。2年ゼミと大学院生合同で実施した調査1回目の報告は以上である。



図7 ニセコ駅とニセコビュープラザのハロウィン飾り

2.6 訪問地④多言語絵本読み聞かせ（ニセコワイナリー）

10月にスケジュールが合わなかった訪問地について、11月13日（土）日帰りで追加調査を行った。ニセコワイナリーのほんままゆみ氏（以下、まゆみ氏）は絵本作家でもあり、ご主人のライフワークとしてワイン作り、ご本人のライフワークは絵本を通じたコミュニティ作りである。ワイナリーの一室に世界中のさまざまな絵本が展示されており、文庫ライブラリーとして公開されている。近隣の子どもたちはもちろんのこと、ワイン観光に来たファミリーの子どもたちが絵本を読んで楽しみながら待つこともできる。国際交流員と共同で異文化理解イベントや多言語絵本読み聞かせイベントなどを定期的実施しており、10月の調査で訪れた図書館「あそぶっく」や教育関係者とも連携して活動している。

札幌出身であるまゆみ氏は、自身の人生の中で、メディアの仕事から家族の仕事による海外生活、その中での育児や絵本を通じた子育て支援のボランティア、帰国後も継続した海外と日本をつなぐ絵本作家活動などについて、生き生きと語ってくださった。自身の関心や得意とする分野、コミュニティの中での交流を通じた人のつながり、絆からつながる絵本やニセコのワイン作りに向けた新しい挑戦という展開、夫婦のライフワークが別々の分野でありながら相乗効果を生むというダイナミクスは、まさに多文化、多言語を背景とする人々のコミュニケーションを通じた共生社会のありようを反映していた。

調査に同行した院生らは、手分けしてインタビューしながら、記録を撮影した。事前に質問リストを用意したが、まゆみ氏は事前に目を通し、それに沿ってナラティブを語ってくださったため、質疑応答というよりは、日本語の講話を聴くような形となった。文庫に展示されている中国語の絵本や、日本語に訳された中華文化紹介の絵本などを手に取り、子供向けのひらがなの本は逆に読むのが難しい、など言語習得の過程についても考える機会を得た（図8）。



図8 ニセコワイナリーの多言語絵本文庫ライブラリーとインタビューの様子

2.7 訪問地⑤ラジオニセコ

ニセコワイナリーの次にラジオニセコを訪問した。ラジオニセコの設立の沿革や事業概要について説明を受けた後、事前に作成した質問リストに沿って、放送局長の宮川博之氏から聞き取りを行った。国際色豊かなパーソナリティや番組編成について、日本のラジオ局の運営の仕組み、メインの視聴者層や観光客向け番組について、ニセコの観光に関する番組と多言語対応の有無、インバウンド最盛期とコロナ後で変わったこと、特に異文化理解や多言語交流を意識した番組があるか、今後の展望などについて丁寧にご回答いただいた。調査に参加した院生は、中国の放送局の運営や事業、ラジオリスナー層や聞くタイミングなどの違いについて質問し、日中両国のメディア特性の相違、地域に根差して、「住民参加」と「情報共有」を理念とするラジオニセコの方針について、行政、事業主体、地域と住民の関係に関する気づきを得たようであった。質問と回答の一部を抜粋し、表5に示す。

表5 ラジオニセコのインタビュー内容

学生からの質問	担当者からの回答
ラジオニセコのFacebookやWebサイト、ラジオニセコ通信などによると、かなり国際色豊かなパーソナリティや番組編成ですが、ラジオ局設立	(ラジオ局の設立の経緯というのは企業概要で説明あり) 設立当初のラジオ放送はパーソナリティ2人しかいなかった。朝夕の番組、平日2つだった。ラジオ未経験の自分と役場の職員、2人でスタートした。その時にいろんな町民パーソナリティ(ボランティアのパーソナリティ)が当時20人。その20人も自分たちの番組に出てもらい知り合ったことをきっかけにラジオが好きな人を集めて、そのメンバーと一緒に

<p>の経緯や設立当初のラジオ放送の様子などを教えていただけますか。</p>	<p>2人がやってた放送局。徐々にやっているうちに広告収入も増え、スタッフも増えて、今の4人になった。設立当初は町民は「何でラジオ局を作ったんだ」「なんで中央のこの駅前にラジオ局を作ったのか」という、どちらかというアゲインストの風が吹いていた。(9月の)ブラックアウトの大きな影響だと思うが、最近は「ラジオニセコを4人より少なくしちゃダメ」という声が町民から出ている。「町はもっと応援しなさい」という話が出ている。</p>
<p>メインリスナーはニセコ住民ですか。観光客も意識されている番組はありますか・インバウンドや国・地域別に特にターゲットをしぼって情報を提供するなどする番組もありますか。</p>	<p>メインリスナーはニセコ住民。ただニセコ町ではなくニセコエリア、倶知安町の人などもいる。もっと広く聞こえるようにしようとしてニセコ町でも動いている。広く聞こえるようにするのにお金が必要であれば協力するという企業もいる。ただインターネットリスナーもいて割合まではわからないが、いろんところで聴いてくださっている方がいる。スマホアプリで聴いているラジオニセコの登録者は数がわかる。1400人くらい登録している。住民も農業をされている方はトラクターやビニールハウスの中とか倉庫でもラジオをかけて聞いている。農家の方に会うと「朝5時くらいから生放送をやらない？」って言われる。みんな夏場は5時から仕事してるから。「ごめんなさい」って言ってます(笑)夜も7時から放送はしてる。去年までは観光客を意識した番組を週末に放送していた。今は土曜の朝7時から10時までの番組に新しく作ったコーナーとして30分だけ観光客への情報発信をしている。観光客はやはり遠くで聞かなきゃならないので、どちらかというインターネットで情報収集する人も多い。ラジオニセコのFacebookなどにはニセコ町でないイベントとかをどんどん発信している。取材に行ったときの取材の様子など。例えば今朝、緑茶屋さんのマルシェだとか観光名所へ行ったら観光名所のものをホームページに載せて、そちらをご覧くださいと紹介している。</p>

3. 授業実践の成果

3.1 2年ゼミ学年合同成果発表

秋学期授業の最終回に学年合同成果発表会を実施した。新型コロナの蔓延状況に配慮し、オンライン発表会となった。ベトナム人学生と日本人学生が代表でゼミの学習成果をまとめたスライドを作成し、日本語で口頭発表を行うと共に、クラスメートが制作した動画作品の一部を紹介した（図9）。



図9 学年合同成果発表のスライド

3.2 動画作品

学生らの動画企画のコンセプトは、多くが日本、北海道を知らない世界や母国の人々にニセコの魅力を伝えたい、というものであった。そのため、英語のテロップを入れたもの、テキストを少なくして映像、ビジュアル素材、音楽を中心に用いたものなど多彩な表現手法が用いられた。留学生は、日本ででの留学生生活を母国の両親や友人たちに見せたいという意向もあり、日本語を用いた動画作品もあった。それぞれがニセコ町のフィールドワーク、国際協同学習の様子や成果を個性豊かな作品としてまとめ上げ、学修の成果物として完成させた（図10）。



図 10 学生による動画作品 (Youtube 限定公開)

3.3 学習者視点の成果の認識

動画制作の過程で、2年ゼミ生の動画作品について、一緒にフィールドワークに行った修士院生と改善の意見交換を行う課外活動の機会があった。その際、今回の国際協同学習の成果について聞き取りを行ったところ、次のような成果の認識が報告された。

2年ゼミ生 D:Y 先輩と Z 先輩の意見を通じて詳しく有島武郎の思想とかわかってきました。さらに、高橋牧場の写真を追加してもらって自分のビデオの内容が良くなったと感じました。日本語で他の留学生と意見交換する時、時々お互いに相手の意見わからなくて、自分の意見も伝わらないこともあります。一方、日本人の前にしゃべる時ドキドキするじゃなくて、お互いに留学生だから楽しめます。日本語より英語得意人もいるから、伝えないことを他の言語を挟めたらいいと思います。その他、自分もよく使う「武器」は body language です。言語より感情がよく伝わると感じます。

院生 C:D さんの動画に関する意見交換について、お互いにとって有益な学習や交流のやり方だと思う。自分はニセコ町のフィールドワーク 1 回目には参加しなかったが、D さんの動画を見たり意見交換したりすることを通じて、間接的にニセコの風景を楽しむ

ことができたし、様々な情報を得ることができた。

コミュニケーションについては、お互いに日本語の母語話者ではないので、言いたいことと聞き取って理解できることのレベルが足りないと感じた。また、異文化交流では、より相手の言っていることを理解するために、お互いの国の文化や価値観を知る必要がある。

学年や国籍が異なる学生の交流活動はとてもいいと思う。自分の知識を増やしたり、交流したりしながら自分の足りないところにも気付ける。特に留学生にとってはとても有益な学び方だと思う。

院生 Y：TikTok を使って動画編集していたが、ライフスタイルを記録するタイプの動画でとても良い感じ。コミュニケーションについては語彙量の問題。キーワードが言葉で出てこないのを内容を説明してわかってもらう必要がある。人によって考え方が違うので、どうしたいかについて好みも異なる。

院生 Z：動画の内容は豊富だったが、伝えたいことを編集効果（エフェクト等）を使って表現するのはとても難しい。学年は違っても一緒に同じ場所を調査し、各自が必要だと思う観点から調査し、結果を伝え合い、自分が気付かなかった色々な成果を得られたのが最も良いところ。言語コミュニケーションについては、自分が感じていることの説明が単純すぎて、自分の気持ちを完全に詳しく表現できなかった。

3.4 教授設計としての評価

学年や国籍を横断した国際協同学習のグループ構成であり、同じフィールドを調査しても、多様な問題意識、価値観、視点から様々な発見があり、それらを共有することで、創造的な学び合いが実現した。留学生の日本語レベルは差が大きかったが、会話能力が高い者が積極的にリードして、全体のコミュニケーションが円滑に進んでいたように見受けられた。グループ調査計画や事前学習の報告では、先輩にあたる大学院生が2年生らをうまくサポートし、現地問い合わせや行程表の詳細を検討する際に足場架けが成立していた。動画制作の過程でも、修士論文のテーマとして観光プロモーション動画を扱った院生が、構成の修正やエフェクト表現について助言するなどして、成果物のブラッシュアップが実現していた（図 11）。



図 11 動画の改善に向けた話し合いの様子（ベトナム人と中国人）

教授設計上の課題としては、対面、遠隔、ハイブリッドそれぞれの形態で、最適な活動や不向きな活動を適切に配置、設計することが挙げられる。観光学部の学びでは、集団でフィールドに出て、共同で活動や交流を行う学習体験の価値が大きい。新型コロナでこのような従来の活動方式に制限がかかる中、テクノロジーを活用するなど代替手段を講じて、個人による活動、少人数での活動、集団での活動を分類し、到達目標、タスク、方略、評価などの教授設計を最適化する必要がある。今後は、個人で観光地やフィールドの景観について観察、記録し、それらの素材を用いてバーチャルツーリズムと観光ガイドの交流活動を行うことを計画している。VUCA の時代に、観光、メディア、外国語教育を統合した新たな教授設計を開発し、魅力ある教育実践の選択肢を増やしていきたい。

謝辞

ニセコ町のフィールドワーク実施にあたり、資料提供、施設見学・利用、説明ご対応などをご快諾くださいました、ニセコ町教育長の片岡辰三様、同町教育委員の越湖明美様、国際交流員のミッチェル・ラング様と梅冠男様、高橋牧場ミルク工房の高井啓様、ニセコワイナリーの本間眞由美様、ラジオニセコ放送局放送局長の宮川博之様、モイワリゾートオペレーション合同会社（LODGE MOIWA 834）の長島佳純様、その他各施設従業員やスタッフの皆様にご心より深謝申し上げます。

Ⅲ 成果と課題

本調査研究をとおり、以下の成果を見ることができた。

1. ニセコ地域の発酵文化に関する現状把握とニセコ発酵ツーリズム推進協議会の立上げ支援
2. 北海道におけるアウトドア事業の現状把握、とくにカヌープログラムを対象としたアイヌ民俗文化との親和性
3. ニセコの魅力をテーマとした動画制作をとおした地域資源の多様性の把握、あるいはそれをとおした学習手法の検討

また、今後の課題としては、全体としては、ニセコ町との連携協定書に掲げる次の事項を達成するためには、さらなる研究の深化と、ニセコ町および学生との協働による取り組みの展開等が重要である。

- (1) 人材育成や教育・研究などの交流連携に関する事項
- (2) 人的・知的・物的資源の相互活用に関する事項
- (3) ニセコ町の産業・文化の振興、まちづくりのための連携・協力に関する事項
- (4) ニセコ町における諸課題解決に向けた政策の共同研究に関する事項

また本研究においては、とくに食文化、アウトドア事業、言語内容統合学習というテーマを設定し、専門性をもつ教員各自の企画実施により具体的な取り組みを展開した。

各テーマにおける今後の課題をまとめると以下のとおりである。

(食文化)

ニセコの発酵文化について、なぜ発酵文化がこれだけ展開しているのか、郷土食としての現状や課題の把握など、より深掘りすること。また、ニセコ発酵ツーリズム推進協議会の活動支援のために、それらの情報を共有、活動への活かし方についても一緒に検討すること。さらに発酵文化以外のニセコ地域の食文化についても明らかにすること。

(アウトドア事業)

アイヌ民族やアウトドアガイド事業者等が連携し意味のあるトレーニングを行える体制を構築すること。今回のインタビュー等で得た知見を活用した推進体制を検討すること。「地域の伝統的な文化」「コミュニティ」「ガイド育成」という視点を組み合わせたプログラムを実施すること。

(言語内容統合学習)

個人で観光地やフィールドの景観について観察、記録し、それらの素材を用いてバーチャルツーリズムと観光ガイドの交流活動を行うこと。VUCAの時代に、観光、メディア、外国語教育を統合した新たな教授設計を開発し、魅力ある教育実践の選択肢を増やすこと。

令和3（2021）年度「奨励研究費」助成研究
地域の魅力を活かした新スタイルのまちづくり・ひとづくり
～清田区をフィールドとして～

札幌国際大学短期大学部
2022年5月

I 予備的考察

1. 「食と音楽」から「地域の魅力」という研究テーマに至る背景

2020（令和2）年度札幌国際大学短期大学部の奨励研究として採択された『地域の魅力を活かした新スタイルのまちづくり～清田区をフィールドとして～』（以下、「本研究」）は、フィールドワークやイベント実施によってまちづくりにどのような効果をもたらすかを測定する方法に関する研究だった。しかし、コロナ禍によって計画されていた内容が対面実施のものがほとんどであったことから、フィールドワークやイベントの実施が出来ないまま研究年度を終えることとなった。

そこで本研究は上記の研究の再実施のために、フィールドワークやイベント等の対面実施が困難であっても研究成果が得られるよう再構築され、2021（令和3）年度に改めて採択された。しかしながら、コロナ禍は一向に終息せず、フィールドワークやイベント等の実施は依然として困難な状況が続いた。その結果、まちづくりやひとづくりの手段としてのフィールドワークやイベント等の実施ではなく、「清田区と本学の連携活動の歴史の整理」やその基盤となる「地域の魅力」「新スタイル」といった概念を規定することを研究の中心に据えることに方針を転換した。

本研究の先行研究となる『食と音楽によるまちづくり・ひとづくり～清田区における試み～（以下、「前回の研究」）』（2019）という奨励研究では、次の内容が研究のまとめとして提言された。

札幌市清田区（以下、「清田区」）と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部（以下、「本学」）では、2009（平成21）年10月5日に『札幌国際大学と札幌市清田区との連携協力に関する協定書（以下、「包括連携協定」）』¹を結び、『清田区まちづくりビジョン2020』の実現に向けた取組を互惠関係の中で推進していくことが確認された。

そして「前回の研究」（2019）では、清田区と本学との包括連携協定を踏まえて実施されたフィールドワークやイベントを総括し、下記の行動計画を提言した。なお、この提言はあくまでも奨励研究の結果としての提言であり、今後、本学内の担当部署での検討や清田区での検討を経て決定していくのであって、地域行政としてのまちづくりビジョンの今後の方針を述べたものではない。

【行動計画①】本学の個性を明確にした地域連携の推進

本学の実務教育²に基づいた地域連携が推進できるよう、教養教育、専門教育、キャリア教育の充実と連動した地域連携を図る。これは清田区との互惠関係の維持のためでもあり、令和5（2023）年度へ向けて準備中の、総合生活キャリア学科と幼児教育保育学科の2学科におけるカリキュラム改編にも反映させるよう両学科に働きかける。

【行動計画②】教育課程における「地域貢献」の徹底

地域社会を十分理解し、地域の人々と適切に協働して地域に貢献する人材を養成すること、また、広く国際的な視野をもって、地域社会から他の国々へと積極的に発信する人材を養成することは、本学の建学の精神にも繋がっており、また、北海道という地域からの要請でもあると考える。教育課程編成においても、日頃の教育活動においても、建学の精神の一層の徹底を図った地域貢献を進めていく。

【行動計画③】ルーブリックを使用したPDCAサイクルの徹底

本研究は「食と音楽」をテーマとしたまちづくりと人づくりという地域貢献の提言が主題であった。研究の結果、地域と短期大学とが連携した地域貢献とは何かを改めて問い直す結果となった。それは、評価指標の不備に起因すると考えられる。今後は、例示したルーブリック³（次頁図1）等を参考に、清田区と本学が同じ評価指標で点検・改善ができるように、その点検・評価方法を構築していく。

【行動計画④】点検・評価結果の全体化

短期大学の認証評価項目には「地域貢献」が予め据えられている。これは短期大学が「地域貢献」に寄与することがもはや必然であることを意味する。したがって、地域貢献のための連携や、地域連携の点検・評価が一部の教員だけで実施されることを避け、より多くの教職員が関わることを求められる。さらに点検・評価で顕在化した課題について、学内だけでなく清田区やきよたまちづくり区民会議などの住民参加型の組織との課題意識の共有をしていくことが必要である。

そのためには本学の地域貢献、清田区との連携に関する広報及びPDCAサイクルで得られた評価結果の一般開示などを積極的に推進していくことが必要である。

前回の研究で提示された四つの行動計画は、『地域“共育”に関するラウンドテーブル』⁴（以下、「ラウンドテーブル」）で指摘された以下の10項目に渡る内容に基づいている。

①地域連携の目的・目標の明確化と共有の必要性

イベントの実施に際してはイベントをすることが目的化され、それを通して何を期待するのかということが、フィールドとしての地域側も本学側も不明確な場合がある。前回の研究で実施した、スイーツバスやきよたまルシェ&きよフェスについても、清田区と本学の双方に目的と目標が共有されていた面とそうではない面があった。

②地域貢献のテーマを行政側から設定することの困難性

様々な利害関係があるため、清田区側（行政）から地域貢献について本学（学校）にその内容を指定することは難しい。これは区民に対する中立性を保たなければならない行政側の姿勢としては必然である。行政としては区民の声を広く公聴する必要がある、本学はその公聴結果も踏まえながら地域貢献について課題を把握し、それを清田区側に提案していくという構図が求められる。これは、区民の声を行政に活かすことと似ているものの、本学は教育活動として行うのであって行政サービスを肩代わりするわけではない。互恵関係を維持するためには本学からのテーマの掘り起こしが無ければ、教育活動ではなく、単なる労働力の安価または無償提供ということにもなりかねないので注意が必要である。この内容については、「ボランティア」「アルバイト」「教育」といったキーワードで後述する。

③学んだ成果の証の可視化

フィールドワークやイベントを通して清田区の食と音楽について学んだ成果を論文や報告書のようなかたちに残すことは、学ぶ学生にとって励みとなるばかりでなく、清田区にとっても互恵関係の成果のアーカイブになるというメリットがある。

④定期的な点検と改善のための適切な評価のシステムの必要性

課題解決のための計画は、その課題の背景や本質的な問題点の考察などを経て立案される。前回の研究ではこの課題解決をイベントとして具現化した。Plan（計画）→Do（実施）までは、学生も教員も清田区の担当者も比較的容易に内容を把握することが出来た。しかし、これを Check（点検）する仕組みになると、途端に流れが頓挫した。これは、予め到達目標や点検項目を明確化してこなかったことが要因の一つであると考えられる。しかも、点検・評価のためのエビデンスが、参加人数や「面白かった」「楽しかった」などのアンケートの実施に終わってしまっているのが現状であり、これらのエビデンスが「まちづくり」と「ひとづくり」とどのように関連性をもっているのかが明確にされていない。したがって、動員数の多寡や満足度がイベント等の評価となってしまう可能性がある。そもそも「まちづくり」とは何なのかという根本的な議論や共通認識及び、イベント実施とまちづくりとの関連性について前もって検討しておくことが、前回の研究では極めて重要であることが示唆された。

【表1】一般財団法人大学・短期大学基準協会 内部質保証ルーブリック

内部質保証ルーブリック

項目	Development 開発・発展 Level II	Proficiency 熟練・習熟 Level III	Sustainable Continuous Quality Improvement 持続的・継続的な質の改善 Level IV
<p>1 大学の精神を確立している。 教育目的・目標を確立している。</p>	<p><input type="checkbox"/> 大学の精神を公表している。 <input type="checkbox"/> ステークホルダーが理解できるよう説明している。</p>	<p><input type="checkbox"/> 大学の精神を公表している。 <input type="checkbox"/> ステークホルダーが理解できるよう説明している。</p>	<p><input type="checkbox"/> 大学の精神を公表している。 <input type="checkbox"/> ステークホルダーが理解できるよう説明している。</p>
<p>2 学習成果 (Student Learning Outcome) を定めている。</p>	<p><input type="checkbox"/> 学習成果を定めている。 <input type="checkbox"/> 学習成果の獲得を測定する仕組みを定めている。</p>	<p><input type="checkbox"/> 学習成果を定めている。 <input type="checkbox"/> 学習成果の獲得を測定する仕組みを定めている。</p>	<p><input type="checkbox"/> 学習成果を定めている。 <input type="checkbox"/> 学習成果の獲得を測定する仕組みを定めている。</p>
<p>3 卒業認定、学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受入れの方針(三つの方針)を一体的に策定し、公表している。</p>	<p><input type="checkbox"/> 学習成果の獲得を目標とした三つの方針が一体的に策定され、公表されている。 <input type="checkbox"/> 授業科目の成績評価に学習成果が的確に反映されている。</p>	<p><input type="checkbox"/> 学習成果の獲得を目標とした三つの方針が一体的に策定され、公表されている。 <input type="checkbox"/> 授業科目の成績評価に学習成果が的確に反映されている。</p>	<p><input type="checkbox"/> 学習成果の獲得を目標とした三つの方針が一体的に策定され、公表されている。 <input type="checkbox"/> 授業科目の成績評価に学習成果が的確に反映されている。</p>
<p>4 質点検・評価活動等の実施体制を確立し、内部質保証に取り組んでいる。</p>	<p><input type="checkbox"/> 一部の組織(委員会等)において、教育の質保証を促す重役の仕組みが確立している。 <input type="checkbox"/> 上記の項目1～3全てにチェックがある。</p>	<p><input type="checkbox"/> 全専任教員で、教育の質保証を促す重役の仕組みが確立している。 <input type="checkbox"/> 上記の項目1～3全てにチェックがある。</p>	<p><input type="checkbox"/> 全専任教員で、教育の質保証を促す重役の仕組みが確立している。 <input type="checkbox"/> 上記の項目1～3全てにチェックがある。</p>
<p>判定 (三つの意見等に記載)</p>	<p>○ 「専属に改善を要すると判断される事項」: チェックの入らない項目が一つでもある場合、早急に改善を促す。 ○ 「向上・改善のための課題」: 一部の組織(委員会等)において教育の質保証を促す重役の仕組みを、全専任教員で、教育の質保証を促す重役の仕組みにするよう改善を促す。</p>		

学習成果: 学習成果とは、教育課程や教育プログラム、コースにおいて、一定の学習期間終了時に、学生が学習を通して知り、理解し、行い、実践できることを期待される内容を基に示したものである。学習成果は、学生が学習を通して達成すべき知識、スキル、態度などとして示すものである。またそれぞれの学習成果は、具体的で、一定の期間内で達成可能なものであり、学生にとって意味のある内容で、測定や評価が可能なものである(中長教育審議会報告「学士課程教育の構築に向けて(平成30年)」より)。学習成果のアクセスメントと結果の公表を通じて、短期大学のアカウンティングとリテラシーが向上する。

⑤参加人数や意識の変化はあくまでもエビデンスの一つ

ラウンドテーブルの参加者からは、きよたマルシェ&きよフェスなどのイベントの実施に際しては参加人数や参加前と参加後の来場者の意識の変化を把握することが重要であるとの指摘があった。もちろん、これらの把握はエビデンスの一つとして有益であるものの、課題解決や改善のために必要な情報が必ずしも含まれているとは限らず、PDCA サイクルによる改善を図っていくためには参加人数や参加者の意識の変化だけに頼らない評価指標が不可欠である。

⑥「結果」と「成果」の違いを踏まえた点検の必要性

「結果」とは何らかの原因によって最終の状態を引き出すことであるのに対し、「成果」とは成し遂げた結果、特に良い結果を意味する。すなわち、取組によって生じた「結果」の一部が「成果」であると捉えなければならない。前回の研究のような課題解決型の取組では、「成果」に着目しがちであるが、これらの取組が継続的に行われていくためには、失敗例を含む「結果」にも改善を図っていくためのヒントがある場合がある。

⑦事業（イベント）の準備や当日のオペレーションの効率化

学生が中心となった事業（イベント）では、「みんなで頑張った」「一緒に汗を流した」という情緒的な面が大きくクローズアップされ、準備の効率化や費用対効果の検証、当日のオペレーションの効率に関することは、終了と共に忘れられてしまうことが多い。もちろん、一つの課題解決に向かって学生が教員や清田区の職員と共に汗を流す姿はかけがえのない経験の一つであり、否定されるべきではない。それが1回性の事業（イベント）であればなおのことことは重要視される点であろう。しかし、前回の研究で課題解決として掲げているのは継続的な取組の検証の在り方であり、効率化や費用対効果も評価ポイントの一つとなる必要がある。

⑧多様な保育（教育）の一環としての食育の必要性

子どもたちは様々な環境で保育（教育）されている。札幌市内では森林や河川などの自然環境に恵まれている場所が都市機能と隣接する場所にある。しかし、企業内保育や院内保育という施設内の保育所の場合には、必ずしも自然環境が近くにあるとは限らない。そこで、保育者には前回の研究で実施した“モギモギ体験”⁵のような柔軟な発想と、それを生活の中に根付かせていくための仕掛けの提案力が求められている。

⑨食と音楽による福祉的視点に立った教育・保育の可能性

食や音楽の活動を通して把握できる子どもの発達段階の事項は多い。なぜなら、月齢や年齢によって平均的な活動状況を把握できるからである。特に、食と音楽に関しては、先生が一方向的に押しつけるようなことさえしなければ、子どもの関係性を構築する絶好の機会が多数存在する。そのような機会は教室内での活動だけではなく、前回の研究で実施した“モギモギ体験”や、食育に関する音楽の生演奏付き巨大絵本『みーんなたべた みんなでたべた (2019)』⁶ (監修：平野良明、作曲：河本洋一) などを通じても得ることが出来る。絵本の読み聞かせや手遊び、弾き歌いといった保育者の一方的なアプローチによる保育だけではなく、子どもと先生とが双方向に関わりを持ちやすい「食と音楽」という観点からのアプローチは、教育・保育の方法の幅を広げる可能性がある。

⑩SNS の効果的な発信手法の理解と戦略

前回の研究では、「きよたスイーツ」⁷を学生に広く知ってもらうために、本学のマイクロバスをスイーツバス (写真1) と称して運行した。そして、車を使用しないと行きづらい立地のスイーツ店にも案内し、Twitter 等の SNS を通じてハッシュタグを付けた発信を試みた。しかし、どのような情報の伝わり方をしていったのかを



【写真1】スイーツバスときよたスイーツマップ

検証するためには別の経費が発生するため、情報伝達について正確に把握は至らなかった。ただし、情報を発信するという行為そのものに学びの要素、例えば、伝わる文章の作成方法、分かりやすい写真の撮影方法等の学びがあった。これらの教育的意義を明確化し、それを科目としてカリキュラム化することで、本学にとってのメリットにもなり、清田区にとってもきよたスイーツ等の地元の資源を多元的に発信することに寄与することに繋がると考えられる。

このように清田区の地域の魅力の一部として「食と音楽」という点に焦点化した取組が前回の研究であった。そして、清田区誕生 20 周年記念イベントとして、食の魅力を発信する“きよたマルシェ”と音楽交流を推進する“きよフェス”に企画段階から

本学の学生が参画し、清田区の職員と共にイベントの立ち上げに関わり、その成果が「きよたまちづくり区民会議」において高く評価された。これを受けて令和元年度、食と音楽の結びつきによる取り組みを、まちづくりとひとづくりの二つの枠組みで捉え直し、実施事業の効果の検証を行った。これが前回の研究である。大学側のひとづくりとしては、学生の卒業や区職員の異動による人的環境の変化に対応しうる仕組みとして、また本学両学科の教育活動（授業）と結び付けることで、継続性の萌芽を見出すことができた。しかし、取組に対する適切な点検・評価方法の構築を目標に掲げた段階で、新型コロナウイルスの感染拡大の影響から、研究を中断せざるを得ない状態となってしまった。

そこで、2021（令和3年）年度はさらに事業の幅を広げ、本学教育の特徴として、また区側にも利となるよう、継続的に関わりを持つことができる可能性を追求しつつ、昨年度の研究でつみ残した活動の効果について検証し、本学と清田区の連携の在り方についてさらに有益な提言をすることを目的とした。

Ⅱ 「食と音楽」から地域の魅力を活かした新スタイルのまちづくりの提言へ

1. 研究概要

新型コロナウイルス感染拡大という中でも継続可能なまちづくりのテーマとして、本研究では研究領域を「食と音楽」から清田区という地域にある魅力全体に視野を広げるべきであると考えた。また、それらを活用した新しいスタイルのまちづくりやひとづくりについて論じるために、下記の研究計画を立てた。

【課題】

前回の「食と音楽」に限定した研究方針を改め、清田区の魅力となる要素の再発見とそれを活用したまちづくりへ提言へと変更した。また、インターネットの仮想空間も活用した活動へも対応し、学科の教育活動の特徴と結びつけた、アフターコロナにおける諸活動の新たなシステムの効果的なあり方を検討することにした。

【目的】

本研究は地域の暮らしと魅力に結びついた事業展開がまちづくりやひとづくりに及ぼす影響について、効果測定的项目や方法の有効性を明らかにし、今後の清田区と本学の地域連携の在り方について提言を行うことを目的とすると共に、新しい生活スタイルに合った方法を提言することを目的とする。

2. 研究方法

一昨年度（2019）の事業実績（『きよたマルシェ&きよフェス』への企画・運営参加、『きよたスイーツバス』の試運航、北海道農政部食育読本『みーんなたべた みんなでたべた』の生演奏付き巨大絵本読み聞かせ&きよたの野菜レシピ試食会、『おしごとごっこフェス』運営参加、ハンドベルクリスマスコンサート&『一緒に作ろう サンタの街』）を基に、短大2学科有志及びプロジェクト型演習学生で協力し、アフターコロナの新しい生活様式下においても実施可能な今年度の具体的な事業を企画、実施する。その際、効果仮説をたて、効果測定方法を明確化し、仮説の検証を行う。

3. 研究組織

※職名は令和3（2021）年度末現在

◇短期大学部（担当教員）

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科教授（研究代表者）	河本 洋一
札幌国際大学短期大学部総合生活キャリア学科准教授	石田麻英子

◇清田区（担当職員）

地域振興課まちづくり調整担当係長 荒戸 譲治

【包括連携協定に関する補足】

本学と清田区との包括連携協定は、これまで札幌国際大学と札幌国際大学短期大学の学長が兼任であったため、当初「札幌国際大学」のみしか記述がなかったが、事実上は札幌国際大学と札幌国際大学短期大学の両学との連携協定関係が築かれてきた。なお、協定書は令和2（2020）年度末（2021年3月23日）に蔵満保幸学長と平野良明学長の連名で、再調印されている。

【図1】令和元（2019）年度から使用してきている研究の概念図



4. 実施計画と実績

新型コロナウイルスの感染拡大状況などにより、変更もあり得る。詳細は今後の「きよたまちづくり区民会議」の結果を受けて決定する。

（現時点で予定している活動）※YouTube 動画配信用コンテンツを兼ねる

①『きよたミニマルシェ』の場を利用した食に関するアンケート調査

コロナ禍により規模を縮小し『ちびマルシェ（JAとの連携）』として8回に分けて開催。本学との連携は実現しなかった。

◇区役所前ロータリー：2021年7月28日、10月12日、10月26日

◇区役所一階ロビー：2021年4月14日、4月28日、11月16日、12月14日、2022年1月11日

②縮小版『きよフェス』における活動

コロナ禍により中止

③『きよた STAY HOME プロジェクト』応援、および『清田スイーツ応援団』の活動

数件の店舗を訪問、清田スイーツを盛り上げていくためのアイデアの出し合いをボランティアの授業として実施。SNS キャンペーンとして、2021年10月1日～11月30日（スイーツ編）、2021年12月1日～2022年2月28日（グルメ編）を実施

④『おしごとごっこフェス』 企画・運営補助

2022年1月16日オンライン開催、学生の企画・運営は実現しなかった。

⑤『クリスマスコンサート』時の『ワークショップ』 企画・運営

2021年12月18日開催、学生の企画・運営は実現しなかった。

⑥総合生活キャリア学科の夏期休業中の集中講義で、清田産の野菜を活用したレシピの考案と実践また、ボランティアの授業内で、上保木青果の訪問取材を実施した。

以上が本研究の研究計画と事前に計画されたイベントの実績である。本研究は、コロナ禍でも実施可能な研究であることを前提に、「食と音楽」を「地域の魅力」へと拡大させたことまた、直接対面しなくても実施可能なイベントを軸に動画配信用コンテンツの作成を視野に入れた計画として練り直された。当初はこれらのイベントを軸にまちづくりやひとづくりの効果測定の方法についてまで仮説を立て、検証を試みる計画であったが、イベントの計画すらできない状況が今年度も続き、このままでは昨年度と同様に何ら成果を残せないと判断し、研究実施途中で計画内容の変更をすることとした。

5. 研究計画の変更

「地域の魅力」「まちづくり」「ひとづくり」は平易な言葉ではあるものの、その概念規定については本研究では明確に触れないまま研究を進めていた。また、イベントの縮小や中止により本学の学生が研究に関わる機会が失われてしまった。そこで、清田区地域振興課と筆者が協議⁸をした結果、このままの計画で研究を進めていくことは困難であるとの結論に達した。そして、研究の原点に立ち返ったとき、清田区と本学との互惠関係がどのような歴史を辿り今日に至ったかまた、研究の中で用いられている「地域の魅力」「まちづくり」「ひとづくり」という3つのキーワードについて、改めて検討を重ね共通理解をした上で今後の研究や連携協力を進めることが重要であることが確認された。

そこで、本研究の計画を、①用語の共通認識 ②包括連携協定以降の取組の総括という2つの観点からの評論論文の完成を目指すこととし、紙面に動画リンクをQRコードで貼り付けるハイブリッド論文とすることで、双方の担当者が変わった際の参考資料としての有益性ももたせるという方向性に転換した。

Ⅲ 用語の共通認識：清田区における「地域の魅力」「まちづくり」「ひとつづくり」という概念形成

はじめに本学と清田区との連携活動の歴史から概観しておく。清田区地域振興課の記録によれば、両者の連携活動の歴史の記録は、本学の校名が静修女子大学から札幌国際大学となった1998（平成10）年まで遡ることができる。ただし、【表1】に示した歴史は記録として残っているものを掲載しており、清田区が誕生した1997（平成9年）については記録として残されていないだけなのか、全く連携活動がなかったかについては資料が無いため検証できない。

【表1】清田区と本学との連携活動の歴史

※○印は継続中の取組を意味する。

開始	取組の名称	実施期間	状況	具体的な内容や担当者
平成10 (1998) 年度	きよたまちづくり区民会議	平成10年3月～12月		大山先生:議長、第2部会座長
	(※平成20年～再開)			中鉢先生:副議長、第1部会座長
	清田区まちづくりフォーラム'98	平成10年11月		大山先生:基調講演 中鉢先生:パネリスト
平成11 (1999) 年度	区役所周辺地区まちづくり委員会	平成11年～12年		中鉢先生:コーディネーター 飯田先生:委員
平成12 (2000) 年度	区民フォーラム	平成12年3月		大山先生:コーディネーター
		平成12年3月		飯田先生:パネリスト
		平成12年11月		中鉢先生:基調講演 赤城先生:コーディネーター
平成14 (2002) 年度	区役所・連絡所の未来を考える会	平成14年11月～15年2月		赤城先生:司会 飯田先生:討論者
	PMF清田区公演	平成14年、16年～	○	小山先生:実行委員長(～2006) 河本洋一先生:実行委員長(2007～2011) 実行委員(2012～)
	あしりべつ川体験塾	平成14年～平成30年度		学生がボランティアスタッフとして参加(H30年度は台風・地震で中止。R元年度以降は地震の影響で継続が難しい。)
	とんとんランド(H28までは「とんとんまつり」)	平成14年～	○	学生がボランティアスタッフとして参加
平成15 (2003) 年度	健康づくりリーダー養成再研修	平成15年～18年		新井先生:講師
平成16 (2004) 年度	札幌国際大学と清田区の意見交換会	平成16年8月、9月		大学側:北崎先生、小山先生、平野先生、中鉢先生、萩本先生、飯田先生、林美枝子先生 区役所側:地域振興課長、庶務係長、企画調整係長、まちづくり担当係長 継続的に意見交換を行い、区民・区役所・大学の3者協働によるまちづくりを検討し

			ていくことを目的として実施。学生の区役所での総合案内(区役所コンシェルジュ)について話題となり、林美枝子先生(インターンシップ担当)と企画調整係長とが協議・調整し実施に至る。
	清田区コンシェルジュ	平成 16 年 10 月～ 17 年 3 月	期間中の月曜と金曜。15 人の学生が1階ロビーで区役所の案内を実施。1回2時間、一人当たり16回程度。合わせて、来庁者アンケートも実施。 本事業に対する国際大学の評価は高く引き続き実施を希望していたが、17 年度は実施せず、以後、国際大学のインターンシップの受け入れは行われていない。
	ロビーコンサート(ハンドベル)	平成 16 年～29 年	林昌子先生(～27)、須藤宏志先生(28～):毎年 12 月、ハンドベルクワイアがクリスマスソングを演奏 平成 30 年～クリスマスコンサートに変更
	地区センター関連	平成 16 年～17 年	建設ワークショップ 萩本先生、中鉢先生、飯田先生:アドバイザー
平成 16 年～17 年		公開講座 林美枝子先生、飯田先生、蔵満先生:講師	
平成 18 年		建設検討委員会 萩本先生、中鉢先生、飯田先生:アドバイザー	
平成 18 年～19 年		運営を考える会 萩本先生、中鉢先生:アドバイザー	
平成 17 (2005) 年度	指定管理者選考委員会	平成 17 年	飯田先生:選考委員(区民センター)
		平成 19 年	飯田先生:選考委員(地区センター)
		平成 21 年	飯田先生:選考委員(区民センター、地区センター)
		平成 25 年	飯田先生:選考委員(区民センター、地区センター)
		平成 29 年	○ 赤城先生:選考委員(区民センター、地区センター)
	清田区地域防犯ネットワーク会議	平成 17 年～	○ 飯田先生:委員(～18、24～27) 西脇先生:委員(19～23) 品田先生:委員(28～)
		平成 18 年	清田区地域防犯ネットワーク会議ワークショップ(2 回開催) ワークショップの運営:飯田先生
		平成 18 年	清田区民の地域防犯に関するアンケート; 国際大学と協働で実施
		平成 18 年	清田区地域防犯ネットワーク会議フォーラム; 飯田先生パネリスト
		平成 19 年	清田区地域防犯活動実態調査; 調査結果の分析西脇先生
		平成 19 年～21 年	清田区地域防犯ネットワーク会議フォーラム; 西脇先生コーディネーター
		平成 18 年～20 年	新井先生:講師
	平成 18 (2006) 年度	健康づくりネットワーク交流会	平成 18 年
白旗山の魅力を考える会		平成 19 年～21 年	佐久間先生:委員(19～21)
成人の日行事		平成 18 年	フリースタイルダンス:アトラクション披露

		平成 19 年		ハンドベルクワイア:アトラクション披露
	寺子屋ボランティア	平成 18 年		小山先生:清田学びのコミュニティの形成に関する連絡協議会、寺子屋ボランティア勉強会講師 西脇先生:清田学びのコミュニティの形成に関する連絡協議会 伊藤寛先生: “ ” 飯田先生、平野先生、武井先生、永田先生:寺子屋ボランティア勉強会講師
平成 19 (2007) 年度	清田区 10 周年記念事業	平成 19 年		小山先生:実行委員会委員 中鉢先生:区民フォーラムコーディネーター 飯田先生:シンボル事業部会会長、記念式典・フォーラム部会委員 関口先生:記念誌部会委員 河本(洋)先生、内山先生、新井先生:既存事業パワーアップ部会委員 佐久間先生:ウォークラリー、インドア子ども雪合戦に参加 赤城先生、北崎先生:ウォークラリーに参加 乳井先生、伊藤先生:10周年ロゴマークデザイン関係 学生:ウォークラリーのスタッフ、ふるさと遺産パネル展のパネル作成、インドア子ども雪合戦に参加
	北野児童会館「子ども 110 番の家スタンプラリー」	平成 19 年～21 年		飯田先生及び学生の協力の下、児童会館を利用する子どもたちが、子ども 110 番の家をスタンプラリーで回り、不審者に声を掛けられた場合の対応などをシミュレーションで実施
	北野里塚旧道線の整備計画に伴う検討会	平成 19 年～21 年		飯田先生、中鉢先生
平成 20 (2008) 年度	清田ふるさと遺産	平成 20 年～27 年		飯田先生:清田まるごと博物かん事務局長(～27 年度)
	きよたまちづくり区民会議	平成 20 年～	○	中鉢先生:議長(～21 年度)、西脇先生:委員(～23 年度)、飯田先生:委員(～27 年度)、赤城先生:委員(28 年度)、河本先生:委員(29 年度～)
	高齢者便利帳	平成 20 年～22 年		飯田先生:編集委員(20 年度) 河本先生:編集委員(～22 年度)
包括連携協定調印 2009(平成 21)年 10 月 5 日				
平成 21 (2009) 年度	ボランティア除雪	平成 21 年～	○	北海道コカ・コーラボトリング(株)とともに学生がボランティアで実施
	第3回清田区まちづくり活動報告会	平成 21 年		西脇先生:コメンテーター
	やすらぎ歩行空間プラン検討会	平成 21 年～22 年		中鉢先生:議長
	清田ふれあい区民まつり	平成 21 年～27 年		学生によるステージ発表、ブース、設営ボランティア
	白旗山フェスティバル	平成 21 年		国田先生:大学で「正しい歩き方」講座を開催後、同日開催の白旗山フェスティバルで受講者が学んだ歩き方を実践

	広報さっぽろ特集記事掲載	平成 21 年		大月先生:掲載に向けての企画、ゼミの皆さんによる清田の水や原風景をキーワードした歴史などの取材
平成 22 (2010) 年度	成人の日行事	平成 22 年、24 年		吹奏楽部、JAZZ バンド部による演奏
	北野児童会館 20 周年記念祭	平成 22 年		学生がボランティアスタッフとして参加
	清田区スポーツ講演会	平成 22 年～27 年		国田先生:講師(22～23 年度) 小林先生:講師(24～27 年度)
平成 23 (2011) 年度	スポーツフェスタ in 白旗山	平成 23 年～(22 年度は欠出没で中止)	○	国田先生、飯田先生:白旗山ハイキングに学生とともに参加(23 年度) 国田先生、高橋先生、藤沢先生、松井先生:白旗山ハイキングに学生とともに参加(24 年度) 小林先生:体力測定コーナーを学生とともに運営(25 年度)※28 年度は先生の都合により休止。
平成 24 (2012) 年度	きよたの魅力再発見事業	平成 24 年		飯田先生の協力の下、大学の授業を活用し実施。学生が魅力再発見メンバーとして参加(24 年度) 飯田先生の協力の下、学生3名が「イチ押しきよたをみつけ隊」メンバーとして、地域情報誌「きよたの」を区と協働で制作(25 年度) 国際大学の協力の下、「にぎわいのあるまちづくり事業」として実施予定(26 年度)
	協定 3 周年記念パネル展	平成 24 年		協定締結から丸 3 年を迎えたことに伴い、飯田先生及び学生(魅力再発見メンバー)の協力の下、大学と区役所でパネル展を開催
平成 25 (2013) 年度	きよたスイーツPR事業	平成 25 年		飯田先生の協力の下、学生2名が札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)において、「きよたスイーツ」のPR等を行った
	インターンシップの受け入れ	平成 25 年		学生1名をインターンシップとして受け入れ、「清田区防災訓練」や「旧国道 36 号花壇づくりワークショップ」など、区の事業に積極的に従事された
平成 26 (2014) 年度	きよたの web～きよたネーゼ情報局	平成 26 年～27 年		きよたの web 編集委員会に飯田先生がアドバイザーとして参加。
平成 27 (2015) 年度	清田区町内会応援隊	平成 27 年		飯田先生の協力の下、大学の授業を活用して実施。清田中央地区を中心とした地域行事に参加。ニュースレターや情報誌を作成して情報発信
	清田区民フォーラム	平成 27 年		清田区の歴史を内容とする、オリジナルの演劇を、劇団テアトロが上演。
	イキイキ健康増進教室	平成 27 年～	○	国田先生の協力の下、スポーツ人間学部の学生が指導する、ストレッチとダンベルの運動教室を月2回開催。

	マジめしプロジェクト	平成 27 年～	○	札幌国際大学スポーツ指導学科学生を対象に食育に係る講話と調理実習を実施。事後啓発として大学食堂にて栄養卓上メモの設置を行った。
平成 28 (2016) 年度	高齢者の運動を通じた健康の維持・増進	平成 28 年～	○	国際大國田先生、日本医療大学清田先生、健康・子ども課、清田 Hi 遊会：ウオーキング姿勢の測定やウオーキング中の心拍数の測定等を行い、成果をシンポジウムで発表。
	清田区防災訓練	平成 28 年		国際大の構内駐車場を訓練会場の駐車場として借りる
平成 29 (2017) 年度	きよフェスプロジェクト	平成 29 年		20 周年記念音楽イベント「きよフェス」の企画運営を担う「きよフェスプロジェクト」を、札幌国際大学の学生が中心となって結成。河本(洋)先生の協力を得て、企画検討や事前取材、SNS を活用した PR、当日の出演、子どもブースの運営など担った。
	ガーデニング写真の撮り方講座	平成 29 年～	○	区役所主催の標記事業を、札幌国際大学において実施。講義に使用する教室と、撮影に使用する庭園(イネーブルガーデン)を無償で使用させていただいた。
平成 30 (2018) 年度	きよたマルシェ(事前)	平成 30 年		学校祭における「きよたマルシェ&きよフェス」開催のPRのブース提供
	きよたマルシェ(当日)	平成 30 年～	○	キッズエリアでのブース運営(野菜もぎもぎ体験など)
	清田区クリスマスコンサート	平成 30 年 12 月		幼児から小学生を対象に、読みきかせの後、ハンドベルクワイアによるハンドベル演奏
	絵本と音楽のクリスマス			ハンドベル演奏:須藤宏志先生
令和元 (2019) 年度	きよたマルシェ(当日)	令和元年～	○	健康増進フロアにおける子供向けの読み聞かせや試食などの食育活動
	きよたスイーツ	令和元年～	○	大学のバスを活用してスイーツ店を巡る「スイーツバス」を実施するなど、PR に協力
	きよフェス			事前の企画会議から学生が参加し、当日食育コーナーを設置、大型絵本の読み聞かせ、清田野菜を活用したおやつ試食とレシピ配布を行った他全体運営にボランティアとしても学生が参加
	清田区スポーツ講演会	令和元年度～	○	札幌国際大学女子バレーボール部に当日のスタッフとして従事。
	おしごとごっこフェス			総合生活キャリア学科の学生 17 名がボランティアとして当日運営に参加。
	HAPPY CHRISTMAS in 清田区役所	令和元年 12 月～	○	札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科保育プロジェクト演習造形表現コース所属の学生が企画する幼児～小学生を対象とした子ども向け造形遊びイベント。その後、続けて、ハンドベルクワイアによる、クリスマスコンサート
	「一緒につくろうサンタの街」とハンドベルクワイア			幼児教育保育学科:朝地先生 ハンドベルクワイア:須藤先生

1 清田区における「地域の魅力」という概念の萌芽

2007（平成19）年11月4日
（日）清田区民センターを会場に、『清田区誕生10周年記念区民フォーラム』（写真2）が開催された。このフォーラムには約200名の区民が参加し、第1部では

（株）植松電機専務取締役（当時）植松努⁹の記念講演『ひとづくりまちづくり～赤平から宇宙への挑戦』が開催された。植松は講演の中で「思い続けていれば夢は実現するものです。失敗を恐れることなく、どうせ無理とあきらめな



【写真2】清田区誕生10周年記念区民フォーラムの様子

て新しいことに挑戦してほしい。」¹⁰と語った。この記念講演のタイトルにも称されているように、清田区は10周年を迎えた年に新しい区としての「まちづくり」と「ひとづくり」を区民と共に考えていこうとするメッセージを、植松の言葉を借りるかたちで明確に発している。

この区民フォーラムの第2部では、本学の観光学部中鉢令兒教授（当時）がコーディネーターを務め、長谷朋之：新しい清田の街づくりを考える住民の会幹事長（当時）、筒井幸司：清田区民シニアスクール担任（当時）、一瀬ヒロ：北野地区福祉のまち推進センター運営委員長（当時）、林進一：YOSAKOIソーランチーム「清田舞童里夢」（当時）、新畑和博：清田南小学校校長（当時）、堀岡輝：清田区ジュニアサミット¹¹代表（平岡中学校生徒会長：当時）がパネラーとなり、『みんなで創ろう明日のきよた』というまちづくりディスカッションが開催された。これらのパネラーは清田区のまちづくりに関わってきた人物であり、それぞれの立場から持論を展開した。

【パネラーの発言内容の要約】¹²

◇長谷朋之：10年間のまちづくり活動の中で構築された人的ネットワークを、今後の清田のまちづくりのために実践的・有効的に活用していきたい。

◇筒井幸司：清田区民シニアスクールでは、学習の場を提供してくれる三里塚小学校の子どもたちと、休み時間にあや取りやけん玉で遊んだり、秋には子どもたちが育てたイモを掘って一緒に食べたり、心温まる交流を行っている。

◇一瀬ヒロ：北野地区の子どもたちは、福祉除雪やあしりべつ川の清掃など、いろいろなボランティア活動をしている。困っている人を見かけたら声掛けをする。そんな小さなボランティアのできる、やさしい心をもつ子どもたちをそだてていくまちを創っていきたい。

◇林進一：『清田ふれあい区民まつり』で築かれた人のネットワークは清田区の大きな財産。このネットワークを最大限に活かせる区民まつりが、今後 20 年、30 年と続き、区のシンボルとなっていくように頑張っていきたい。

◇新畑和博：清田区の財産は身近にある豊かな自然。この財産を未来の子どもたちへ引き継ぐために、区民一人一人が知恵を出し、行動を起こしていかなければならない。

◇堀岡輝：ボランティア活動の一つとして行っているリングプル回収で、清田区の学校やお店が団結してリングプルを一カ所に集め、お年寄りの人たちに早く車椅子を届けられたらと思う。

パネラーの発言からは、「ネットワーク（繋がり・交流）」「自然」「ボランティア」といった共通するキーワードを抽出することができる。これらのキーワードは、それらが不足しているという意味ではなく、さらに発展させたり守ったりしていくべきという主張を語る意味で用いられている。さらにこれらのキーワードが、「まちづくり」や「ひとづくり」といったキーワードと関連付けて語られている点が、区民フォーラムの話題の中心であったと言えよう。そして、その背景には清田区の地域としての魅力を大切にしていくことが異口同音に語られている。

このフォーラムでは「地域の魅力」とは何かについて掘り下げられることはなかった。しかし、清田区 10 周年事業実行委員会¹³のシンボル事業部会担当（清田区地域振興課まちづくり推進係）が中心となって区民から公募アンケートにより決定した、「3 つのシンボル」と「12 の清田ふるさと遺産」が 10 周年記念式典で披露され『広報さっぽろ 2007（平成 19）年 11 月号』で発表されている。

2-1 「地域の魅力」に選定された「3 つのシンボル」

10 周年事業実行委員会シンボル事業部会（以下、「シンボル部会」）では、清田区を一つの博物館に見立てるエコ・ミュージアムという概念の下、清田区内の自然や景観、文化や産業、生活などの資源のうち、後世に残したりさらに活性化させたりしたいものを区民から公募し選定した。¹⁴ 選考基準は以下の通りである。

- ①区民に親しまれていること、あるいは、これから親しまれる可能性が高いこと
- ②一過性のものでなく、後世に残ること
- ③今後のまちづくり活動に幅広く活用することが期待できるもの
- ④清田区に特徴的であること
- ⑤清田区のシンボルマークに込められた、緑、安らぎ、触れあいを体現するものであること

公募による推薦が区民から 132 点寄せられ、シンボル部会で 6 点に絞り、さらに 10 周年事業実行委員 2 名を加えた拡大シンボル部会で 3 つのシンボルが選ばれた。¹⁵

【清田区の3つのシンボル】¹⁶

◇白旗山

清田区の南西部に位置し、標高は321.5m。その一帯は札幌市最大の市有林として大切に保全され「白旗山都市環境林」として整備されている。白旗山競技場は、冬はFIS（Fédération Internationale de Ski：国際スキー連盟）公認の距離競技場として、夏は天然芝のサッカー場として通年利用されている。このほか自然観察の森の区画では自然体験学習や自然観察を、ふれあいの森の区画では散策が楽しめる。

◇平岡梅林

清田区唯一の総合公園である平岡公園の西側に梅林が整備され、開花期には梅の名所として道内各地から観光客が訪れる。平岡公園には豊後性の紅梅種と白梅種が4：6の割合で、約1,200本植栽されている。

◇あしりべつ川

札幌市を流れる一級河川。流路延長41.7km。豊平川の最大支流で、空沼岳山頂付近を源流とし、下流で豊平川に合流している。清田区の中心部分を南北に縦断しており、両岸に樹木や花々が栽培されるなど緑地として整備され、散策やパークゴルフを楽しめる憩いの場となっている。

2-2 「地域の魅力」となる「12の清田ふるさと遺産」

「清田区ふるさと遺産」の選定は、「清田区の3つのシンボル」と同様に、清田区誕生10周年記念事業の一環として、『広報さっぽろ』など通じて区民への公募の告知をすることから始まった。その結果、85点の宝物の応募があり、その中からシンボル事業部会が13点に絞り込み、最終決定は実際に「清田区ふるさと遺産」として適切かどうか、ウォークラリーを通して市民が評価して決定するというプロセスを踏んだ。

ウォークラリーは2007（平成19）年10月14日に開催され、下記の選考基準を基に評価が実施され、「清田区ふるさと遺産」として12の宝物が選定された。専門家による選考委員会に一任するのではなく、市民参画型の仕組みで選考することにより市民に寄り添った「ふるさと」の遺産が選考された。

【ふるさと遺産選考基準】

- ◇清田らしさ：清田区固有の自然、歴史、景観、生活、文化等の資源であること
- ◇学術的価値：歴史性・希少性などの存続価値、美的価値（景観、デザイン）の高さ
- ◇活性化の可能性：今後活性化していける可能性があること

◇区民との関わり：区民と何らかの関わりがあること、または関わりを期待できること

◇思い入れ価値：後世に残していきたいという思い入れが強いこと

【清田ふるさと遺産】¹⁷

A：白旗山

ふれあいの森には、木工館・陶芸窯などの施設があり、気を使った工作や陶芸を体験できるほか、炭火焼きコーナーではバーベキューが楽しめる。自然観察の森では、季節によって森林浴・山菜採り・キノコ狩りを楽しむことができ、冬季にはかんじき散策も体験できる。

B：あしりべつ川

「厚別川」は、清田区では昔から「あしりべつ川」と呼ばれている。厚別川橋付近には清田の発展に大きく寄与した吉田用水の記念碑が建立されている。河川敷に広がる厚別川緑地は多くの区民に親しまれ、ウォーキングコースやパークゴルフコースとして利用されている。夏にはあしりべつ川体験塾などのイベントが行われるほか、北野ふれあい橋周辺では北のふれあい夏まつりが開催され、花火大会も催されている。

C：あしりべつ郷土館

実際に使われていた農具や生活用具の展示、いろりばたのある農家の様子を復元展示している。清田区民センター2階に設置されており、開拓時代からの開発の歴史を実感できる。

D：厚別神社

1885（明治18）年に、豊作や村民の安全を願って厚別川東側（旧36号線との交差点付近）に建立された。1917（大正6）年に現在の場所に移設された。境内には清田地区開拓100周年の記念碑があり、石段を登って振り返ると広がる眺望は大変素晴らしい。

E：平岡公園

梅林の名所として知られ、ゲートボール場、パークゴルフ場、テニスコート、野球場までもがあり、清田区民だけでなく多くの札幌市民に利用されている。また、梅林と厚別中央通をつなぐ「梅の香橋」からは、湿地に生息するホタルをはじめ、様々な動植物を観察することが出来る。

F：平岡樹芸センター

平岡在住の竹沢三次郎（故人）から、全道各地の樹木、石を集めた庭園の寄贈をうけ、1984（昭和 59）年に開園した。園内には日本庭園や西洋庭園、ロックガーデンがあり、イチイ、松、ツツジ類などが植栽されている。春は桜のトンネル、秋はのむら紅葉のトンネルが見事である。

G：有明の滝

ミズナラ、ホオ、イタヤカエデなどの広葉樹が茂り、緑のトンネルのような散策路を歩くと、落差 13 メートルの滝が現れる。1 時間ほどの散策で滝を巡ることが出来る。

H：清田南公園

起伏のある地形と清田川貯水池のある公園である。この公園にある清雲橋は、清田川で分断されていた清田団地の西地区と南地区を結ぶため、1990（平成 2）年に開通した。子どもを対象とした「清雲橋まつり」も開催されている。

I：北野たかくら緑地

1924（大正 13）年に高倉佐輔（たかくら さすけ）が牧場として開拓した区域の一部を緑地にした。回転ゲートから入る木道は清浄な空気と静けさに満たされ、コナラの森には野鳥や昆虫が生息し、地域住民の絶好の自然観察ポイントになっている。

J：旧道沿いの原風景¹⁸

緩やかに蛇行・起伏する旧国道 36 号線は、古くから地域の人々の生活を支えてきた。道路沿いには、レンガ倉庫、桜並木、推定樹齢約 200 年と言われるヤチダモなどが点在する。宅地化が進む中で、清田緑地が自然林のままで残っている。また、清田小学校のゆめ田んぼ、区役所裏にあるホタル池などは、開拓当時の清田の田園風景を再現している。

K：住宅街に残る原風景¹⁹

開発が進む一方で、三里塚小学校の校庭にある推定樹齢約 140 年のイチイ、自然を活かしたレクリエーション施設、アオサギが飛来する森など、住宅街にも清田の原風景が残っているとされている。

L：清田の水を活かした食品産業

清田の家庭では、かつて生活用水には井戸水（地下水）を使用していた。現在では水道水に切り替わったが、良質で豊かな清田の地下水は、現在でも区内の飲料²⁰や食品の製造工場で使用されている。

3 地域の魅力の創出とは何か

3-1 住民共通の思いを具現化した清田区の魅力作り

西脇（2011）によれば、地域の魅力の創出において留意すべきは、地域の記憶を呼び覚ますことが重要ではあるが、一方でごく一部の特定の記憶を選び出すことで、別の記憶を背景へと退かせることになりかねないと警鐘を鳴らしている。²¹ 1997（平成9）年に札幌市の10番目の区として誕生した清田区は、豊平区から分区して誕生した。2007（平成19）年の10周年記念事業の一環として始められた「清田区のシンボル」や「清田ふるさと遺産」といった事業は、清田区のまちづくりを区民みんなで考えようとする原動力に据えられた。²²

しかし、元々生活基盤があった土地の行政区を変更することが、新たな魅力の創出ではなく、西脇（2011）が指摘するような別の記憶を背景に退かせることがあってはならない。

清田区民が選出した地域の魅力である「清田ふるさと遺産」は、住民の記憶や歴史が基盤となっており、その集約と整理が段階を踏んで行われ、選出に至った。多くの住民が共通の思いを抱き、過去から未来へと繋いでいくという考え方は、モーリス・アルヴァックス：Maurice Halbwachs（1877-1945）（以下、M, アルヴァックス）の『集合的記憶』（1950）で述べられた「集合的記憶」を基にした考え方と符合すると言えるのではないだろうか。

3-2 地域の魅力と「集合的記憶」

「集合的記憶」とは、M, アルヴァックスによれば、他者の記憶を頼りにしながら、過去においてある集団の成員たちが体験した出来事を現在において思い起こし、共通の思い出として再構成する共同作業²³のことをいう。

この概念の特徴として西脇（2011）は、①記憶の集合性 ②記憶の多様性 ③記憶の現在性 ④記憶の物質性・空間性という四つを挙げている。以下は西脇が指摘した「集合的記憶」の特徴である。

①記憶の集合性

個人的な記憶は集合的記憶の一つの観点に過ぎず、過去を思い起こし記憶する主体はあくまでも個人としている。ただし、「個人が思い出すのは自分を一つないし多くの集団の観点に身を置き、そして一つないし多くの集合的思考の流れの中に自分を置

き直してみるという条件においてである」²⁴という言説を引用し、記憶を集合的現象として捉えている。つまり、記憶そのものはあくまでも個人的なものであるが、それを思い起こすというという行為と集団は不可分であるということを示している。

②記憶の多様性

個人多様な集団の中に身を置くことができる。したがって、過去の出来事についても多様な集団の存在に応じて集合的記憶も多様性をもつことになる。

③記憶の現在性

集合的記憶は過去の出来事の再構築であるため、史実として忠実に再現性をもっているわけではない。つまり過去の出来事を今再構築しているという点において、記憶は現在のものとして認識される。

④記憶の物質性・空間性

西脇は「昔の人々の構想は物的配置の中に、すなわちこの事物の中に、結晶化される。そして地域の伝統の力はこの事物から集団へと生じているのであり、伝統とはこの事物のイメージなのである。」²⁵と述べており、M, アルヴァックスの「集合的記憶」の概念を基に、人々が記憶を思い起こすという行為は物質や空間の中の痕跡を通じて行われるという特徴を挙げている。

このように地域の記憶は、記憶そのものは個人的であっても集団的な背景をもち、それらの集合的な認識が「集合的記憶」として存在する。そして、「原風景」とはこの「集合的記憶」を背景に人々の記憶に強く残っている「モノ」や「コト」を「風景」という言葉に象徴化していると考えることができる。清田区誕生10周年記念事業を通して取り組まれた「3つのシンボル」と「清田ふるさと遺産」の選定は、M, アルヴァックスが提唱した「集合的記憶」を顕在化させ、それを地域の魅力として再認識させたと言えるのではないだろうか。仮にその事業が「集合的記憶」という概念に基づいていなかったとしても、結果としてこの概念によって説明することができ、個人や少人数の恣意的な思いではなく、区民の思いが反映される手順によって構築されたコメモレイション（commemoration）＝記念碑的存在が地域の魅力と捉えられたと考えることができる。

IV まとめにかえて

本研究は「地域の魅力を活かした新スタイルの人づくり・まちづくり」を掲げて当初は研究を進める予定であった。前章で述べたように、地域の魅力とは「集合的記憶」に基づくものであり、既に認識されている地域の魅力であれば、「3つのシンボル」や「清田ふるさと遺産」を活用すべきである。また、新たな魅力作りを目指すのであれば、人々の記憶に残っていくような「モノ」や「コト」のスタートアップが必要であると考えられる。ただ、本研究の構想当初では、地域の魅力が既存のものに依拠するのか、新たな魅力を創出するのかについての設定はされておらず、曖昧なまま研究が開始された。この点については、フィールドワークができなかったことによる想定外の“副産物”と言えるだろう。つまり、フィールドワークができなかったことで、「地域の魅力」について熟考することになったということである。

「地域の魅力を活かす」という研究をする場合、「集合的記憶」に依拠する地域の魅力と、「集合的記憶」そのものを作り出すという二つの異なる方向性があることがわかった。本研究では、これまでの「食と音楽」という領域から地域の魅力という領域に拡大して人づくりとまちづくりの研究に取り組もうとした。「食」は主に「きよたスイーツ」²⁶であり、「音楽」は地元のアーティストを中心としたであった。

一方、本研究は「地域の魅力」を主体にした研究となった。しかし、「地域の魅力」とは何かについて十分な検討が成されておらず、「きよたスイーツ」という現在進行形の食文化しか実際には想定されていなかった。その意味では本研究でフィールドワークができなかったことは、研究の対象である「地域の魅力」について明確な姿勢を確認する機会になった。

さて、本研究は研究の対象が曖昧であったものの、「新スタイル」という点については、インターネットをフル活用したまちづくりとひとづくりを想定していた。例えば、YouTubeを使った動画配信やSNSを使った情報発信である。ただ、これらのツールを用いて、人々が能動的にまちづくりやひとづくりに関わる方策については、研究を進める中で明らかにしていくという計画であった。YouTubeもSNSも単に情報を受け取るだけではまちづくりやひとづくりについて、能動的な市民を育成することには繋がらない。むしろ、受動的で思考が停止してしまうという危険さえ伴うことが予想される。そこで、フィールドワークを通じてインターネットツールを使った能動的なまちづくりやひとづくりのあるべき姿を模索しようと計画した。

結果的には具体的な成果物ではなく、地域の魅力を活かしたまちづくりやひとづくりの概念形成に必要な要素を整理する評論論文の作成で1年間の研究を終えることとなった。今後コロナ禍が終息しフィールドワークが自由にできるようになる時期を見据え、「地域の魅力」とは何かを客観的に検討した上で、まちづくり・ひとづくりの「新スタイル」について実践研究をしていく。

また当初は論文中に QR コードを付け、動画や写真を観られるハイブリッド論文にする予定であったが、時間的な制約の中で動画の完成までには至らず、従来型の文字のみによる論文となった。本稿のようなフィールドワークを伴う論文は、今後動画などと共に読むことができるようなハイブリッド論文が広く普及していくことが望ましいと考えている。

時代の流れと共に清田区と札幌国際大学の職員構成が変わっても、両者の「集合的記憶」が守られていくためにも、次の機会が与えられたならば、市民と学生が共に思いを共有し共に発展し続けていくような「新スタイル」の実践研究をしていく考えである。

【謝辞】

本稿の執筆に際しては、西脇裕之氏（元本学、現札幌大谷大学教授）に資料提供や「地域の魅力」に関する文献について多大なるご協力を頂きました。

また、札幌市清田区地域振興課の皆様には、これまでの本学との連携活動の年表の基礎資料の提供を頂きました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

【弔辞】

本来なら謝辞で西脇裕之氏と共に感謝を申し上げなければならない飯田俊郎氏（元本学、青森公立大学教授）が本稿の完成直前に急逝されました。清田区と本学との包括連携協定は飯田氏が本学に勤務していた時の地道な活動があったからこそ調印できたと言っても過言ではありません。ようやくその頃のご努力が身を結び始めた矢先の訃報に驚きを禁じ得ません。論文の末筆に弔辞を述べるのは異例ではありますが、敢えて併記させていただきます。

◇執筆：河本洋一（札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科教授）

◇執筆協力：石田麻英子（札幌国際大学短期大学部総合生活キャリア学科准教授）

荒戸譲治（札幌市清田区市民部地域振興課まちづくり調整担当係長）

※職名は 2022（令和 4）年 3 月 31 日現在

発行 2022（令和 4）年 5 月 31 日

- ¹ 2009(平成 21)年 9 月 14 日の大学教授会で飯田俊郎教務部長から連携協力に関する協定を結ぶことについて報告があり、札幌市清田区長:石倉昭男(当時)、札幌国際大学学長:村山紀昭(当時)の間で、2009(平成 21)年 10 月 5 日に協定書が交わされた。協定書の名称に短期大学部は入っていないが、当時は札幌国際大学と短期大学部の学長は兼務だったため、名称に短期大学部が含まれていなくても慣例として短期大学部も含まれるという認識がなされていた。その後、大学と短期大学部に 2018 年(平成 30)年度からそれぞれ学長が配置されることとなり、2021(令和 3)年 3 月 23 日に、協定内容に包括連携を明記した上で、小角武嗣清田区長(当時)と蔵満保幸大学学長・平野良明短期大学部学長が連名で包括連携協定書を交わした。
- ² 「実務教育」に関しては、定義は様々である。一般財団法人実務教育研究所では「職場に必要な事務系・技術系の、各種実務の知識・技術、家庭生活に必要な知識・技術ならびに学生・生徒の進路の選択や、その後の適応について必要な知識・技術の教育」とされているが、
- ³ 例示したものは一般財団法人大学・短期大学基準協会が定めた内部質保証の点検のために用いられているルーブリックである。
- ⁴ 2020(令和 2)年 2 月 21 日、コロナ禍が始まる直前、短期大学部のステークホルダー(就職先、自治体、高等学校など)と本学との間で本学の教育の在り方について外部からの評価機会を得るために実施された懇話会である。
- ⁵ 清田区内で収穫される農作物の模造品を作り、その作物が土の中に埋まっていたり、つるにぶら下がっていたりする様子を再現し、それを収穫するという遊びを称している。子どもが模擬収穫した作物は、本物を保護者にお渡しするという企画である。
- ⁶ 北海道農政食品政策課制作の食べ残しを減らすための幼児向け啓発教材である。Web から著作権フリーで使用できたが現在ではリンク切れとなっている。(2022 年 3 月 4 日現在)
- ⁷ 清田区内菓子店・農業生産者等の団体が協力・連携し、幅広い世代が関心を持つ「お菓子」の特性を生かして、「きよたらしさ」をアピールできるお菓子の創作及び イベント等を行い、清田区の魅力向上を図るとともに、お菓子を清田区の魅力のひとつとして幅広く認知させ、地域の活性化に貢献することを目的としている『きよたスイーツ推進協議会』に加盟する清田区内のスイーツの総称。前身の「きよたでお菓子を食べてよう！キャンペーン委員会」は 2013(平成 25)年 4 月 9 日に発足し、2019(平成 31)年 4 月 9 日に「きよたスイーツ推進協議会」に改称された。
- ⁸ 2021 年 12 月 22 日清田区地域振興課まちづくり推進係長飛騨野孝幸氏(当時)、まちづくり調整担当係長荒戸譲治氏(当時)、地域活動担当係長幸田一直氏、総務企画課広聴係長宮村拓也氏(当時)と河本洋一との打ち合わせ
- ⁹ 植松努は TED(2014)でも講演しており、幼少期に母親からもらった「思うは招く」という言葉を引き合いに出し、自分がなぜ赤平という小さな町工場で世界が注目するロケット開発をしているかを語っている。
- ¹⁰ 広報さっぽろ清田区民のページ 2007 年 12 月号 p.1 清田区市民部総務企画課広聴係
- ¹¹ 清田区ジュニアサミットは、区民フォーラムとは別に、2007 年 10 月 27 日に小学校児童会と子ども会育成連合会リーダーも参加して清田区内の中学校生徒会の交流会を拡大し、39 名の参加者で開催された。
- ¹² 同上掲載ページから筆者が文体を統一して引用
- ¹³ 10 周年事業実行委員会では、「記念式典・フォーラム部会」「記念祝賀部会」「記念誌(歴史探索)部会」が結成され、シンボル事業部会もその一つである。この事業部会の座長を本学ビジネス実務学科(当時)の飯田俊郎学科長(当時)が務め、清田区全体をエコ・ミュージアムと捉えて、シンボルや遺産を選定し、まちづくりの活動を促進しようという試みが行われた。
- ¹⁴ 西脇裕之『清田区 10 周年シンボル事業における学科教育の取組』札幌国際大学北海道地域・観光研究センター年報 2008 p.15
- ¹⁵ 同上
- ¹⁶ 広報さっぽろ 2007 年 12 月号 p.12 きよた区民のページに記述された説明を筆者が要約
- ¹⁷ 同上
- ¹⁸ 原風景は人々の記憶に基づいており、個々でその記憶は異なる事から、原風景の捉え方は慎重に進めなければ恣意的になってしまう可能性がある。この点については、M,アルヴァックスの「集合的記憶」という考え方に基いて後述する。
- ¹⁹ 同上
- ²⁰ 北海道コカ・コーラボトリング(株)では、清田区内の地下水を「いろはす」として販売している。
- ²¹ 西脇裕之『地域の記憶の制作と到来「清田まるごと博物館」の活動を例に』北海道地域文化学会『北海道地域文化研究』第 3 号 2011 p.4
- ²² 広報さっぽろ 2007 年 12 月号 p.12 きよた区民のページ
- ²³ M,アルヴァックス著・小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社 1989 pp.1-44 を筆者が要約
- ²⁴ 同上書 p.8
- ²⁵ 西脇裕之『地域の記憶の制作と到来「清田まるごと博物館」の活動を例に』北海道地域文化学会『北海道地域文化研究』

第3号 2011 p.3

²⁶ 脚注7に同じ。

2021 年度(令和 3 年度) 札幌国際大学 地域・産学連携センター共同研究費
一般社団法人北海道商工会議所連合会と人材育成に関する産学連携プロジェクト報告書
-早期の企業訪問による就業・キャリア意識向上についての研究-

統括: 千葉里美(キャリア支援センター長)
共同: 松浦秀太(大学・副センター長)
和田早代(短期大学部・副センター長)
キャリア支援センター職員

1. 研究の背景-本連携協定(6 年間)の研究成果と課題

一般社団法人北海道商工会議所連合会(以下、道商連)と札幌国際大学・札幌国際大学短期大学部の連携協定は、2015 年(平成 27 年)に締結され、その目的は「北海道における人材育成」であった。表 1 は、連携後の共同研究テーマと事業概要を簡単に整理したものである。最初の 2 年間は本学の学生と社会(企業)の実態環境を把握するための定量調査と、社会人の考えに触れさせ本学学生の就業意識を高めることを目的とした「社会人講座」であった。そして 4 年目より、「地方創生」をテーマに「地方で働く」をテーマとした「社会人講座」に絞った学生プログラムへと進化している様子がうかがえる。その際のプログラム設計としては、経営者の「働く」を本学で一定程度理解させた上でその会社に訪問させる方法であり、報告書からは、経営者からの講話から描く単なる働くイメージからその地域にある経営者の企業に訪問することで、より具体的に個々人の学生の中に地方で働くことが自分ごと化として落とし込んでいる様子がうかがえる。この様に「地方で働く」ことを理解するための効果的プログラム設計に関しては概ね整理できているものの、6 年間の共同研究は年度ごとの研究メンバー教員の研究活動として個別に実施していたため、参加学生が研究教員の所属学部や学科に偏っていたこと、また単年度ごとの研究で研究メンバー教員も変化することから「社会人講座」を受けた学生の意識の定着を検証することができないこと等は、2020 年度報告書にも触れられている課題である。

表 1 連携協定以降の研究活動概要

共同研究テーマ	事業概要
2015 年度 「人材育成に関する産学連携プロジェクト-企業・学生ニーズ調査を中心に-」	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の就業意識実態調査 ・地域の中小企業就業への可能性に関するアンケート ・社会人との接点を増やし就業意欲の醸成の場「社会人講座」(スポーツ人間学部のみ)
2016 年度 「人材育成に関する産学連携プロジェクト-企業・学生の実践的調査を中心に-」	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の企業に向けた採用活動課題や新入社員教育支援内容に関するアンケート調査 ・前年度同様の「社会人講座」
2017 年度 「早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究」	<ul style="list-style-type: none"> ・短大学生を対象とした「社会人講座」と講座プログラムの内容の検討(例:地方中小企業の若手経営者を招聘+講座招聘企業先の訪問)
2018 年度 「早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究」	<ul style="list-style-type: none"> ・「地方創生」をテーマに学生(4 大・短大)に訪問企業の選定をさせた「テーマ性を持たせた社会人講座」の実践+最終発表会 ※若手経営者の招聘+企業訪問のプログラム設計は変更なし
2019 年度 「早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究」	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度同様の「地方創生」をテーマに、道商連が推薦する商工会議所の若手経営者との「社会人講座」(懇談会含む) ※若手経営者の招聘+企業訪問のプログラム設計は変更なし
2020 年度 「早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究」	<ul style="list-style-type: none"> ・学生と歳が近く活発な取り組みをしている商工会議所青年部との「社会人講座」の実施 ※若手経営者の招聘+企業訪問のプログラム設計は変更なし

2. 本年度事業計画の経緯と目的

道商連との共同研究は、前述した通り 2018 年度より「地方で働く」ことを理解する学生プログラムとなり、2021 年度予算も同様のテーマで計上されていた。こうした中、これまでの共同研究成果を就職支援という形で本学学生に平等に提供する部署として、2021 年度より所管がキャリア支援センターに移管された。そこで引き継がれた研究テーマ「早期の企業訪問による、就業・キャリア意識向上についての研究」を実施するに至り、後述する継続事業①だけでなく新規事業②の実施について道商連と打ち合わせをした。

① 継続事業：「社会人講座」(実施内容一部修正)

→従来の「地方で働く」だけではなく「地方で暮らす」ことも理解させるプログラムに修正。

コロナ感染拡大の影響から、人の往来回数を減らし、現地宿泊による 1 泊 2 日の短期プログラムとしたい。

筆者が所属する観光学部卒業生だけの情報であるが、地方企業を離職する本学卒業生の離職理由として職場環境以外に地方で暮らすことの理解欠落も多い(札幌での生活ができないことやコミュニティの違いによるカルチャーショック)ことから、仕事時間以外の地域での暮らし方も学びに取り入れたい。

② 新規事業：「地方企業のインターンシップ先開拓+導入希望企業への勉強会開催」

→「地方で働く」と「暮らす」を早期から理解できる場の提供として、インターンシップ先の開拓は本学学生または企業にとっていい学生との出会い創出の場として共に有効である。しかしながら、企業の中には、インターンシップに興味があってもプログラムの作り方や導入方法がわからない場合もあると考えられる。そこで企業向け勉強会開催も打ち合わせで提案させて頂いた。

結果、道商連より新規事業②のニーズがなかったことの報告を受け、以下 2 事業について実施することとなった。

-2021 年度実施事業-

■座談会「経営者トークセッション」

目的: 就業意識の醸成(働くことの意義、やりがい、求める人物像)

対象: 本学 3 年生(約 150 名程度)

運営: キャリア支援センター就職支援プログラム「就職ガイダンス」の一部プログラムとして実施
キャリア支援センター職員中心に運営

■社会人講座「地方で働くx地方で暮らす 早期キャリア講座 in 帯広」

目的: 若手社員参画による地方で働くと暮らすことの双方向理解

求人票では見えない地方での就職についての総合的な理解

対象: 地方での就職を検討している大学 1.2 年生と短期大学部 1 年生

運営: キャリア支援センター長、大学・短期大学部副センター長、キャリア支援センター職員
大学 1.2 年、短期大学 1 年のキャリア教育科目にて告知

3. 事業報告

(1) 座談会「経営者トークセッション」

- ① 開催日時: 2021年11月9日(火) 16:20-17:50
- ② 開催場所: 本学2号館2階221教室「創風」
 ※当初、教育効果を鑑み対面での実施を予定していたが、当日、悪天候のためZOOMからの参加学生が多くなってしまった
- ③ 内 容: キャリア支援センター前川課長がファシリテーターを務め、登壇している経営者の方々に、働くことの意義、仕事のやりがい、企業が求める人材像などについてのトークセッション
- ④ 登壇者: 札幌近郊の中小企業経営者3人
 クオリ(株) 代表取締役 井村正太郎様
 (株)三笠生産事務所パートナー保険サービス 代表取締役 越前良太様
 オフィス上森(株) 取締役 上森直樹様

(2) 社会人講座「地方で働く×地方で暮らす 早期キャリア講座 in 帯広」

- ① 開催日・行程: 2021年12月11日(土)～2021年12月12日(日)の1泊2日

表2 社会人講座2日間の行程

1日目(12/11)		2日目(12/12)	
9:00	引率教職員集合(211教室)		各自起床後、ホテル朝食(各自)
9:15	学生集合(211教室) 自己紹介・概要説明・チームビルディング	9:00	フロント集合・移動
10:15	移動(車内で昼食済ませる)	9:30	企業様とのグループワーク-ホテルグ ランテラス帯広2F「リーフ」 グループワーク
14:00	企業訪問①(宮坂建設工業(株))		11:30 学生発表・企業からの感想
14:45	終了・移動	12:00	昼食
15:00	企業訪問②(ニューパックとがし)	13:15	大学へ移動
15:45	終了・移動	16:30	大学着
16:00	企業訪問③(株)e-style)		
16:45	終了・移動		
17:00	コンフォートホテル帯広チェックイン		
17:30	企業視察まとめ・交流会-ホテルヌプカ1F		

※コロナ感染拡大防止のためホテルは学生も教職員もシングルユースとした。

※バスは大型車を利用したが、コロナ対応の徹底により2座席1人での着席を指示されたため、最大人数は20名であった。

- ② 参加学生・引率者: 計17名

学生・・・大学2年13名(内訳:臨床心理2名、観光ビジネス学科7名、国際観光学科4名)

※留学生(ベトナム)2名の参加があった

※短期大学部は、検定試験と重なり参加が叶わなかった

引率者・・・キャリア支援センター長、大学・短期大学部副センター長の3名、

キャリア支援センター職員1名、道商連担当職員1名

③ 参画頂いた企業: 帯広市近郊の 10 社 11 名

表 3 本プログラムに参画頂いた企業と参加者

企業名	参加者 (役職)	業種	1 日目交流 参画可否	2 日目グル ーク参画
アルマージ	加藤 愛子様(代表)	飲食	○	○
阿寒湖温泉民宿山口 SORANOMORI CAFÉ 合同会社ノーサム 他	円城寺 篤様※本学 OB (代表、代表、代表社員)	宿泊 飲食 まちづくり	×	○
SPACE COTAN (株)	易 康行(テクニカルチーフ) 申 美佳(マーケットチーフ)	宇宙	○	×

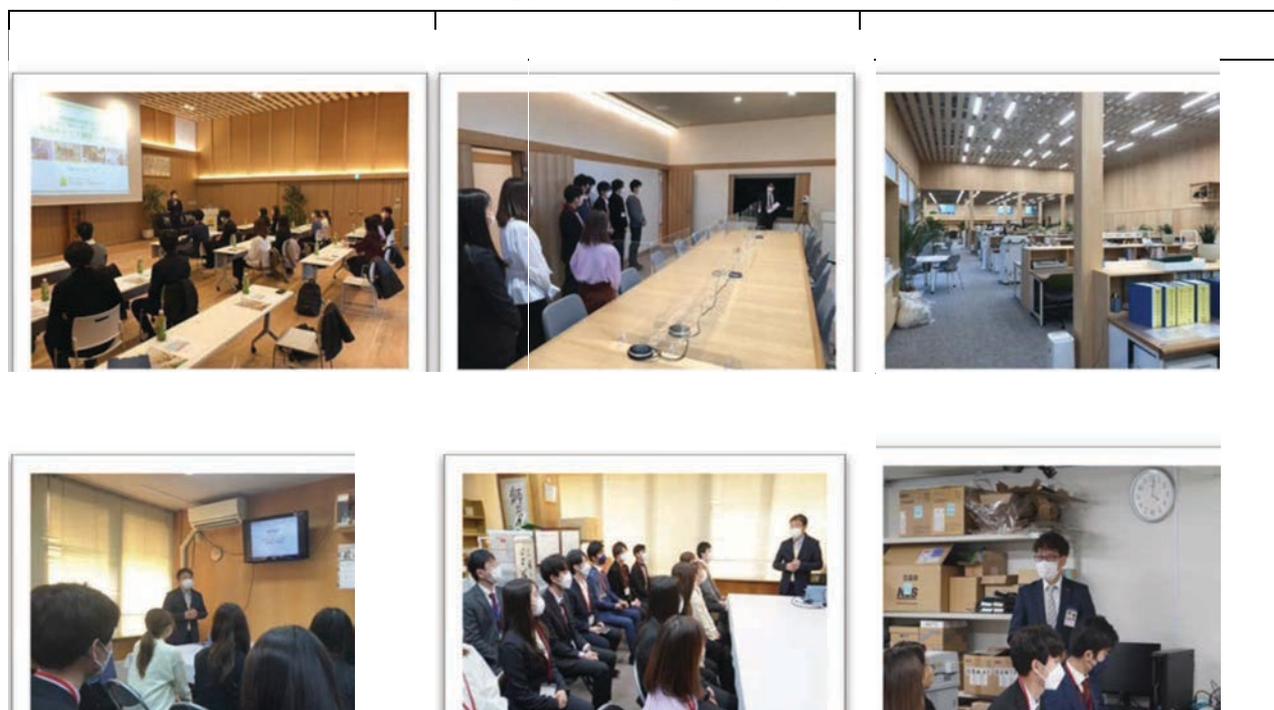
④ プログラムごとの内容

【企業視察】

社内視察後に企業説明を頂戴し、学生の質疑応答から更なる理解を深めた。視察日が土曜日ということもあり、平日までではないが働いている方を数人でも目にすることができた事は、学生にとって良い刺激となった。

また視察中、一緒に回っていただいた社員の方々に随所で学生の積極的な質問が見られた。

写真 1 企業視察の様子



【交流会】

ホテルヌプカの1階スペースで軽食を用意しながらの様々な業種の社員と、1日目の感想や気づきをテーマにしながら、更なる個々人の「働く」と「暮らす」理解を深めるため交流会を実施した。学生数13名に対し企業からの参画は10名であったことから、企業の方と密な交流となった。

写真2 交流会の様子



【学生と企業とのグループワーク・発表】

2日目は、本講座の最終目的である「地方で働く」と「暮らす」についてグループワークを実施した。このプログラムも1日目交流会と同様、学生数13名に対し8名の企業参画を頂戴した。そのため、学生3-4名で構成する4つのグループに企業の方が2名ずつ入り、グループ内で活発な意見交換ができる環境が整った。グループワークのテーマは「地方で働く」と「暮らす」で、学生今の生活拠点である札幌と比較しワークシートに整理させ議論が見える化できるように教材を作成した。また参加学生が2年生であり、意見集約の技術に個人差があると推測し、進め方は引率教員の方で統制した。具体的には、付箋を活用したブレインストーミングからKJ法で学生意見を整理させたのち、同じテーブルに参画頂いている方へヒアリングを通して更なる整理をしていく流れとした。グループワーク終了後は、チームごとの発表を行い、アウトプットの情報共有と企業の方より講評をいただいた。

写真3 グループワークと成果発表の様子

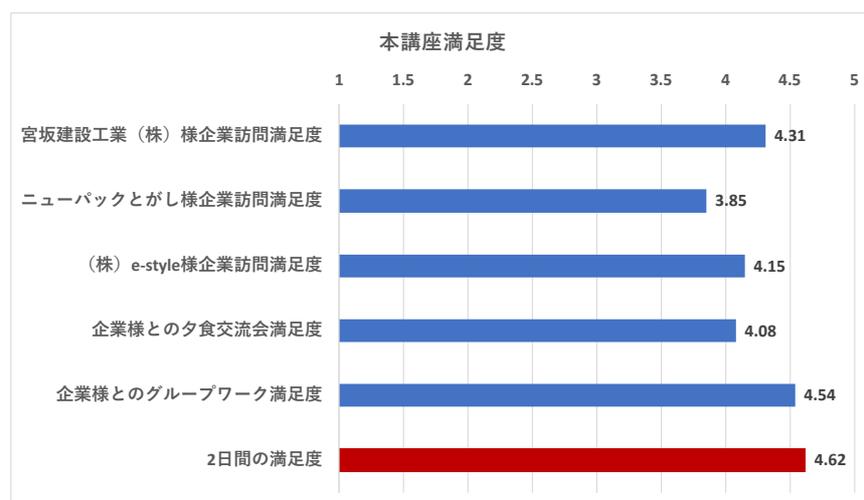


⑤ 本講座の成果と課題

【各プログラムの満足度】

表2の通り進めたプログラム行程ごとの満足度を最低1、最大5で評価してもらった平均点の結果が図1である。1日目の宮坂建設工業(株)、(有)ニューパックとがし、(株)e-styleの企業訪問、企業職員との交流会に関する満足度は概ね4ポイントと満足度が高い傾向にあるが、2日目に実施した企業との意見交換をしながらのグループワークの満足度は4.54と高評価であった。これは、学生の価値観と企業様の価値観をぶつけながらの理解と発表に向けて考えを整理できたことが要因と考えられる。また、本講座2日間の満足度に至っても4.62と高評価であった。

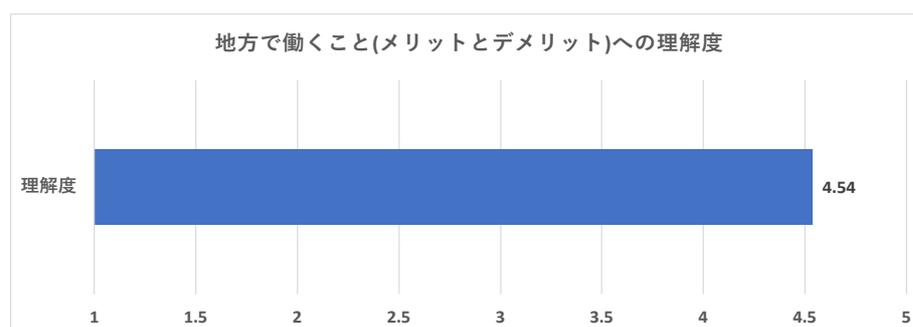
図1 講座の満足度



【地方で働くことへの理解度】

本講座開催の目的である地方で働くことへの理解度(最低1、最大5)は、4.54ポイントと満足度同様に高評価であった。

図2 地方で働くことへの理解



【学生の感想】

表 4 は、講座終了後に収集した学生 13 名の感想である。本講座の目的である「地方で働くと暮らす」を札幌と比較したことで理解が深まり効果的なプログラム内容であった様子がうかがえる。

表 4 学生の感想

2日間で勉強になったこと(感想含む)
いつでも地方であっても、「働く」ことにそれぞれメリットデメリットがあると理解できた。今後は、自分がどこに大事にすることが重要になると感じた。
にハッキリとした目的を持たずにこの講座に参加してしまったので、企業の方と話す時に話題づくりなど困ってしまいました。ではの仲間意識であったり働くことのメリットデメリットを知れたので、地方で働くことについての意識を少しではありますでしたができました。食事会では社会のマナーも少しだけ学ぶことができました。
どか都会で働くかは、仕事のスタイルだけではなく、生活のスタイルもメリットデメリットがあり、自分の性格や価値観が合っても重要になるなということが分かりました。

【学生から寄せられた改善要望】

表 5 は、学生から寄せられた次年度に向けた改善要望である。中でも考慮すべき点として取り上げたい内容は、上から 3 番目のリアルな働くに対する要望である。今年度はコロナ禍での実施のため、大人数の学生を企業の中に入れることは企業側より懸念された点で実現できなかった。しかしながら社内視察をさせて頂く為に、事前の PCR 検査と抗原検査の徹底を参加者全員に課した。今後のコロナの状況次第であるが、次年度は、企業視察を平日にできるだけ社員の方々の方が働いている企業の姿を見せられるよう道商連や受け入れ側企業と綿密な打ち合わせをし改善に向けて努力していきたい。

表 5 改善要望

学んでいる内容と身近な観光系企業の訪問がもっとあったらいいなと感じました。
り時間がもう少し欲しかった。
輩にして実際に社員の方が働いている姿を見たい。
やグループワークと特定の人しか話すことができなかつたため、席替えなどをして全員と話す時間が欲しかった。

⑥ 道商連からの評価

道商連側の本講座担当者より本講座終了後に意見をいただいた。寄せられた原文をそのまま紹介する。「普段学生と接する機会が少ない企業は、若い学生の価値観を理解する上でこのような事業は大変貴重であり、参加企業より実際に今後もこのような事業を継続してほしいとの声が上がっている。また地方にある中小・小規模事業者でも、魅力的な企業は数多くあり、本事業はそれを知るきっかけとなり地方で働くことも視野に考える大学生が増えることを引き続きサポートしていきたい。」

4. 本事業を振り返って

2021年度は、これまでの道商連との共同研究を概観・継承する形で、2つの事業を実施した。1つは、就職活動が目前に迫る大学3年生を対象にキャリア支援センターが実施している就職支援プログラム「就職ガイダンス」にて、札幌近郊の経営者等に登壇いただき、働くことの意味や楽しさについての考えに触れさせ、就業意識の醸成を促す目的のトークセッションである。しかし昨今の就職活動は企業や就職サイトが実施する3年時の夏季または冬季のインターンシップからスタートする流れが存在していることから、この時期の就業意識の醸成は遅いとの指摘がある。よって次年度は、キャリア教育部と調整し次年度の事業を検討したい。

2つ目は、求人票では見えない地方の働くを理解するため「社会人講座」を実施した。これは継続事業ではあるが、今年度からキャリア支援センター所管となり、センターの就職支援プログラムの1つとして全学部学科に声がけをして実施できたことは、本学学生へ平等にその機会を提供することにつながった。またコロナ対応も含め、これまでの研究成果に地方で暮らす理解を企業の方と一緒にできたことは、学生だけでなく参画頂いた企業の方にとって高い評価であった。こうした講座をもう少し多くの学生に提供できれば、働くエリアから企業を選びたがる本学の学生思考から地方の優良企業に眼を向ける学生が一定程度増えることに繋がり、地域へ優秀な学生を輩出する使命をもつ本学の存在意義にも繋がる事業に発展できると考える。また地方に会員企業を持つ道商連にとっても、優秀な学生との接点をもつ機会を会員企業へ創出することができたり、昨今の学生の思考理解の場を提供することは地方の人材確保に寄与できる取り組みと考えられる。ただし、参加した学生が地方で働くことを選ぶかは学生の自由で、また札幌での生活に溶け込むことにより定着力は弱まることが予想される。そう考えると、社会人講座による学びから、更にインターンシップ経験を通し地方で働くことと暮らすを理解する次のステージを用意するのが優秀な人材を地方で確保する自然の流れであると筆者は捉えている。2021年度の道商連との打ち合わせでは叶わなかったが、再度、地方でのインターンシップ開拓を提案してみたい。

【謝辞】

本事業を進めるにあたり道商連の窓口であった佐々木様には、先方との折衝など多大なる力添えをいただきました。また、「座談会」や「社会人講座」にご参画いただきました各企業の皆様には、コロナ感染拡大が懸念される中、土日の参画にご協力いただき感謝申し上げます。それ以外にも、道商連より就職活動に関する書籍を学生に提供いただくなど様々な心遣いに深謝申し上げます。

2020 年度(令和 2 年度)奨励教育研究

2021 年度(令和 3 年度)地域・産学連携センター共同研究年報

報告書

産学連携で築く新たな観光ビジネス教育に向けた挑戦
-キャリア教育、国内インターンシップ、共同研究の検討-

<研究代表者>

札幌国際大学観光学部観光ビジネス学科 千葉 里美

<共同研究者>

日本航空株式会社 北海道地区

2022 年 3 月

【目 次】

1. 本研究の背景と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p.2
 - 1-1. 先行研究から見るキャリア教育の課題
 - 1-2. 先行研究から見る観光人材育成の課題
 - 1-3. 共同研究の目的・研究内容

2. 共同研究①JAL 社員参画による職業教育プログラムの実践と成果・・・・・・・・p.7
 - 2-1. 本プログラムの構想とカリキュラム上の位置付け
 - 2-2. 学修フレーム・シラバス・授業運用方法
 - 2-3. KH Coder 分析から見た成果

3. 共同研究②国内外のインターンシップ開拓とプログラム開発・・・・・・・・p.16

【引用・参考文献】

【謝辞】

1. 本研究の背景と目的

本学が（株）日本航空(以下 JAL)と産学連携を締結したのは2017年で、その際の連携協定目的は「観光学部航空科目の充実」であったと記憶する。以降、観光学部2年次選択科目「航空ビジネス実務」の授業にて最新の航空ビジネスに関する知識習得のため JAL 本社より講師招聘をお願いし講演頂いたほか、2年次選択科目「航空演習」の首都圏企業視察の受け入れ、2-4年次の航空ゼミの研究等でのご協力を頂いてきた。

2020年、産学連携の窓口が本社から北海道支社に移行したことを契機に産学連携のあり方に関して再検討がなされ、その可能性は両者間の打ち合わせにより多岐に広がりつつあるところである。

本論では、観光人材育成に資する新たな産学連携に向け、大学生のキャリア教育や観光人材に関する先行研究より課題を整理した。

1-1. 先行研究から見るキャリア教育の課題

(1) 高等教育機関卒の離職率と奨学金受給の現状

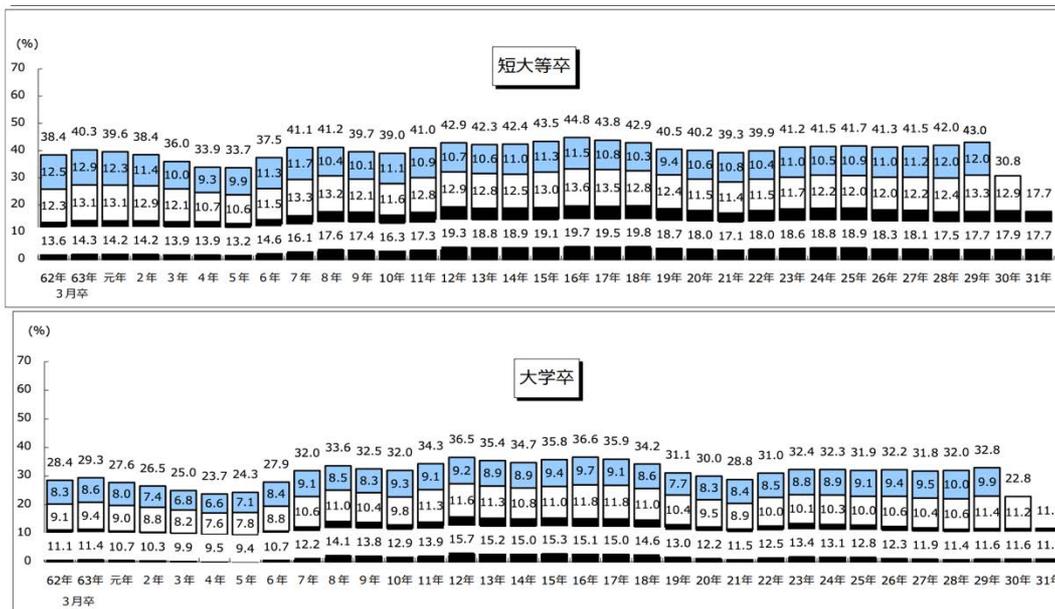
厚生労働省(2020)「新規学卒離職者状況(H29.3卒業者)」¹によれば、高等教育機関である専門学校や高専を含む「短大等卒」も「大学卒」も共に、新卒入社3年以内の離職率は平成7年から現在まで改善の兆しは見られず、「短大等卒」では4割強、「大学卒」では3割強のままにある(図1)。加えて同省では離職率の高い上位5産業についても公表をしているが、「大学卒」では宿泊業・飲食サービス業が52.6%と突出して高く、次いで「生活関連サービス業・娯楽業」46.2%、「教育・学習支援業」45.6%、「小売業」39.3%、「医療、福祉」38.4%と続き、観光関連産業の離職率が高いことがうかがえる。

一方、独立行政法人日本学生支援機構が発表した「平成30年度 学生生活調査」(2020)²によると、奨学金受給率は大学(昼間部)が47.5%、短期大学(昼間部)が55.2%と若干の減少は見られるものの以前半数近くにあり、この傾向に変化はみられない(図2)。すなわち、卒業後、返済が生じる受給学生にとっては、卒業後の就職先選定と業界理解は大変重要であると言える。こうした奨学金受給者が多い状況を鑑み、日本学生支援機構は2020年12月、同機構から学生時代に奨学金を借りた本人に代わって勤務先企業が返済できる新制度を2021年4月から導入すると発表している他、2020年4月1日からは「大学無償化制度(正式名称:高等教育の修学支援新制度)」が実施されている。

¹ 厚生労働省 HP https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000177553_00003.html
(2021.3.31 検索)

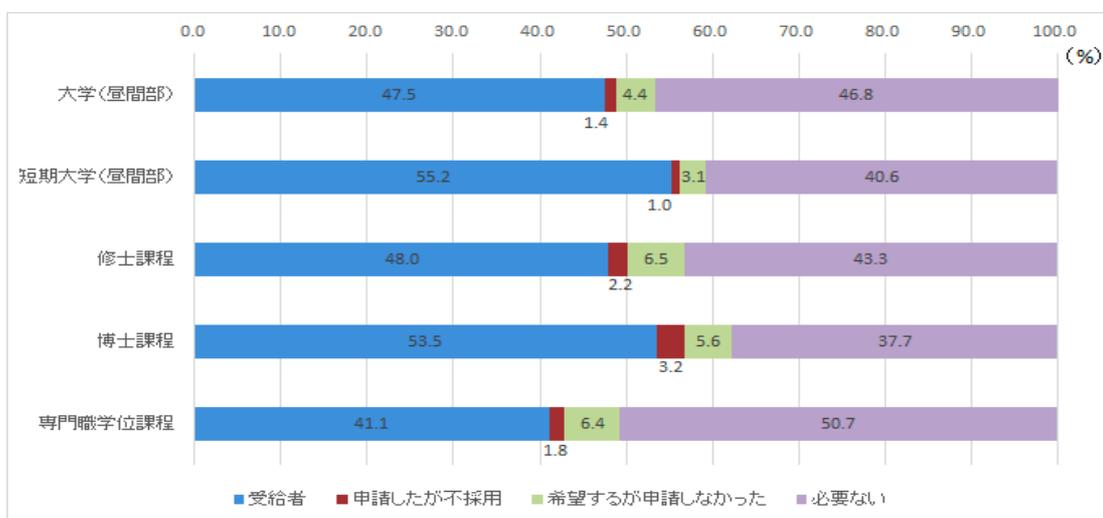
² 日本学生支援機構(2020)「平成30年度学生生活調査結果」
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2020/03/16/da18_all.pdf (2021.3.31 検索)

図 1 経年別新卒入社 3 年以内離職率(短大等卒と大学卒)



出典:厚生労働省 HP

図 2 奨学金受給率(2017.3 卒)

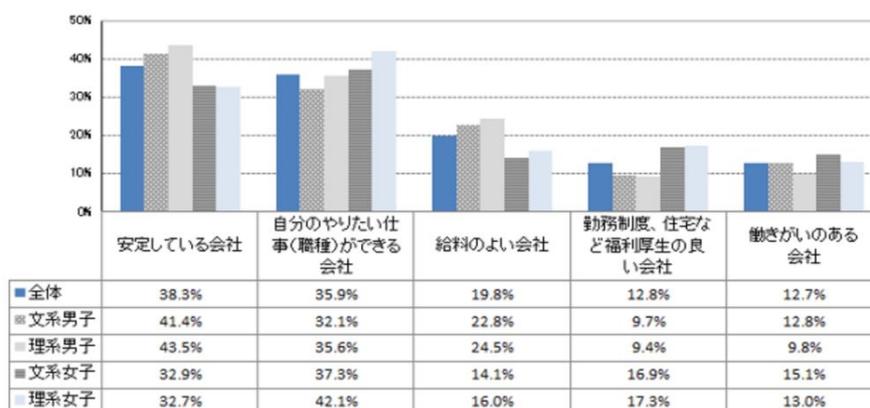


出典: 独立行政法人日本学生支援機構

(2) 就職サイト等の調査結果から見る新卒大学生の職業観と離職理由

大手就職サイトの(株)マイナビは、1979年卒以降より大学生の就職意識を調査しており、最新版「2021年卒大学生就職意識調査」(2020)³によれば、企業選択の理由として「安定している会社」(38.3%)が前年より微減でありながらも前年に続きトップ理由であり、本学のような文系学生の安定志向は、女性より男性の方が高い結果であった。また職業選択の理由の2番目は「自分のやりたい仕事(職種)ができる」(35.9%)であったが、こちらは男子文系学生より女子文系学生の方が強い傾向が見られた(図3)。他方、敬遠したい会社は、「ノルマのキツそうな会社」が初めてトップ理由となり、次いで「暗い雰囲気のある会社」、「休日・休暇が取れない会社」、「転勤の多い会社」、「仕事内容が面白くない会社」であり、ノルマや転勤を嫌う傾向は近年顕著である。

図3 2021年卒大学生就職意識調査



出典: マイナビ(2020)

一方、就職サイト Adeco Group は、新卒入社3年以内に離職をした大学生を対象にした調査「新卒入社3年以内離職の理由に関する調査」(2019)⁴を報告しているが、それによれば「離職してよかった」と回答した人は77.3%、後悔した人は13.0%で、圧倒的に自身の判断を肯定する結果であった。なお、その理由の上位は、「自身の希望と業務内容のミスマッチ」(37.9%)、「待遇や福利厚生に対する不満」(33.0%)、「キャリア形成が望めないため」(31.5%)、「長時間労働のため」(31.2%)であった。

³ マイナビ(2020)「2021年卒大学生就職意識調査」

<https://saponet.mynavi.jp/wp/wp-content/uploads/2020/04/%E3%83%9E%E3%82%A4%E3%83%8A%E3%83%932021%E5%B9%B4%E5%8D%92%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E7%94%9F%E5%B0%B1%E8%81%B7%E6%84%8F%E8%AD%98%E8%AA%BF%E6%9F%BB.pdf> (2021.3.31 検索)

⁴ Adeco Group(2019)「新卒入社3年以内離職の理由に関する調査」
<https://www.adecogroup.jp/power-of-work/061> (2021.3.31 検索)

こうした結果より、入社3年未満の若手社員の多くが、自身の希望する職種でのキャリアを積むことを重視していることが伺える。しかしながら入社後の配属は会社が決めることであり、入社からすぐに自身が思い描く職種に就けることはかなり難しい。そこで、こうしたギャップに打ち当たった際の考え方や、若手社員はどのようにキャリアを積んでいくのかなどを理解させることは大学のキャリア教育としての使命であるところである。

1-2. 先行研究から見る観光人材育成の課題

観光庁(2017)「観光産業における人材育成をはじめとした課題と今後の対応について」⁵によれば、日本の労働生産性(付加価値ベース)は米国\$116,817の約6割\$72,994にとどまっているほか、国内全業種の労働生産性(従業員1人当たりの付加価値額)平均5.02百万円と比較し、観光主要産業である旅行業は7.0百万円、運輸郵便業は4.8百万円、宿泊業2.56百万円と低いことが指摘されている。また、従業員が不足している上位10業種については、旅館・ホテル業が4位、運輸(倉庫業も含む)は10位で、観光産業を牽引する人材や新たなビジネスを創出できる人材の不足、観光客に対応する(特にインバウンド)現場スタッフの不足が課題にある。

観光庁(2020)「観光産業における実務人材確保・育成事業」⁶によれば、観光業界における人手不足と獲得した人材の定着率が喫緊の課題として取り上げられており、誰もが働きやすい職場への変革と同時に観光業界の実務基礎知識を座学や就業体験等による推進を掲げ、2021年度も継続事業となっている。

こうした中、小林(2009)⁷は、2006年頃より急増する観光学部・学科を設置する大学の潮流をいかに観光産業へ繋ぐ教育にすべきかについて調査し、インターンシップを含めいかに地域や企業に触れ合う機会を学生のために作り自分ごと化させるかが重要と述べている。他方、今後も更なる成長拡大が見込まれる観光産業に女性の活躍が必要との思いから、2018年、ニューヨーク大学プロフェッショナル教育東京主催によるイベント「日本の観光と女性人材」が東京で開催された。観光業界の女性活躍の現状とその可能性をテーマに、日本の観光と女性人材の現状を問題提議した上で、女性のキャリア構築(特に出産後のキャリアアップ)やそれを支える企業の工夫に関する情報共有が企業側や観光業に就きたい女性への教育が始まっている。

こうした観光人材育成に向けた課題を整理したことで、これまで学生のニーズに一部でしか対応できなかった航空業界のインターンシップ開拓とプログラム開発による現場理解、働いてから生じるライフイベント時での壁等について観光業界で働く方の参画を得ることでリアルに学生が自分ごと化し、就職後、しなやかな考えを持てる逆境に強い人材育成につなげることは観光産業の成長に寄与する連携内容と考えられよう。

⁵ 観光庁(H29)「観光産業における人材育成をはじめとした課題と今後の対応について」p.6

<https://www.chusho.meti.go.jp/koukai/shingikai/kihonmondai/2017/download/170210kihonmondai03.pdf>

⁶ 観光庁(2020)「観光産業における実務人材確保・育成事業」

<https://www.mlit.go.jp/common/001346797.pdf>

⁷ 小林奈穂美(2009)「観光庁(2020)「観光産業における実務人材確保・育成事業」、駿河台大学論集第39号,pp.197-226

<https://www.surugadai.ac.jp/sogo/media/bulletin/Ronso39/Ronso.39.197.pdf>

1-3.共同研究の目的・研究内容

1-1 並びに 1-2 で前述したように、観光業界で働く方の参画を頂き職業理解を深めること、そして就職後のしなやかな思考を育むためのベストプラクティスを提供することが、成長産業として期待される観光人材に寄与することを目的に、以下 4 事業を共同研究とし実施することと計画した。しかしながら、COVIT-19 感染拡大の中、学外活動ができたのは 1 度だけであり①以外は保留状態にある。よって、①の共同研究を中心に報告し、②はフレームのみの簡単な報告とする。③④に至っては、引き続き 2022 年度の地域・産学連携センター継続事業として持ち越しの共同研究とする。

【共同研究内容】

- ① JAL 社員参画による職業教育プログラム
- ② 国内外インターンシップ開拓とプログラム
- ③ 航空ゼミとの共同研究
- ④ 自己成長に繋ぐ若者のボランティアツーリズム(本学学生のボランティア活動)

なお、表 1 と表 2 は、千葉他(2020)「2019 年度奨励研究 ビジネス社会から見た本学キャリア教育科目の検証と外国人キャリア教育に向けた提案」で示された本学キャリア 1-3 年次の配置と科目ごとの学修目標である。2 年次「キャリアデザイン」の修学目標が共同研究①JAL 社員参画による職業教育プログラムに合致することから、2 年次キャリア科目で試行することとする。

表 1 本学が示すキャリア教育スタンダードの流れ

	1年(前期)	1年(後期)	2年(前期)	2年(後期)	3年(前期)	3年(後期)
必修	キャリア形成論I		キャリアデザインI		キャリア研究I	キャリア研究II
選択必修		キャリア形成論II		キャリアデザインII		
選択			ビジネス実務総論 インターンABCD	ビジネス実務演習		

表 2 キャリア科目ごとの学修目標

	1年	2年
前期	【キャリア形成論I】 目標:世の中の産業、職業、労働について幅広く理解し、自分の人生目標を掲げ、学修プランを設定できること。	【キャリアデザインI】 就労の基本的な枠組み、関連する法律や制度等についての知識を習得。ワークライフバランスや職業生活変化適応力を身につけ、しなやかさを育む。
後期	【キャリア形成論II】 社会(学外授業)へ出る楽しさと、外(社会・地域)へ出る必要な姿勢やスキルを身につける。	【キャリアデザインII】 就労知識に関する世代別理解によるキャリアデザインIの発展と進路選択に向けた具体性を描けるようにする。

2. 共同研究①: JAL 社員参画による職業教育プログラムの実践と成果

2-1.本プログラムの構想とカリキュラムの位置付け

これまで本学のキャリア教育は、就職(出口)を意識させるために観光産業に就いて活躍する卒業生を招聘し、仕事内容ややり甲斐などに焦点を当ててきた。しかし、観光庁(2020,2021)「観光産業における実務人材確保・育成事業」によれば、他の産業と比較し観光産業(特に宿泊)の人材不足が年々増加傾向であること、それに加え離職率が高いことから人材の定着の2点が喫緊の課題として掲げられていることから、広い意味の労務や入社後の課題に焦点を当てた事業が求められている。そこで、前述したように観光業界に就いてからのライフイベントごとの職業理解を目的に職業選択が本格的に始まる前の2年次で展開することとした。その際、昨今の学生は安定思考が強いことを鑑み、COVID-19で一変した観光業界が外部環境の変化に対し企業や個人はどの様にチャレンジしているのか(=企業や個人のレジリエンス力)、そして、私大連盟報告書(2019)「新たな時代の就職・採用のあり方教育」の中で示された新項目部分、特にSDGsに関連する職場内でのダイバーシティ対応についても本プログラムに盛り込んだ。

2-2.学修フレーム・シラバス・授業運用方法

1)学修フレーム

JAL 参画授業を体系的かつ効果的な学修に繋げるため、JAL 社員様参画の授業日の前週は科目担当教員による一般的な知識について一方向型の講義を実施。その後、与えた知識を学生に自分ごと化させるため他者との意見交換のため3名程度のグループワーク実施(遠隔授業の際は、ZOOM ブレイクアウト機能を使用)。授業終了後、教員からの講義内容と他者との意見交換内容を踏まえ、JAL 社員様への質問を各自3点以上作り大学LMS manaba に提出。後日、学生から寄せられた質問を担当教員が整理し、JAL 担当者様に提出。後日、JAL 担当者様より登壇者の社員様に学生からの質問事項として共有して頂いた。JAL 参画授業の当日の流れとしては、登壇者自己紹介の後、科目担当教員がファシリテーターとして登壇者へ学生の質問を投げかけ、登壇者よりたくさんの意見や考え方を引き出すことを意識し実践した。

図4 学修フレームのイメージ



2)シラバス

本プログラムは、2年次必修科目「キャリアデザインI」の中で5回実施した。本科目のシラバス内容は、表1の通りである。なお、JALプログラムは赤網掛けをした部分で示す。コロナ禍かつ140人の大人数クラスの為、全授業ZOOMによるライブ型遠隔授業とした。

表 1 シラバス

回	授業内容
1	ガイダンス
2	外部環境と個人のキャリアデザイン、ライフステージごとのキャリア発達課題
3	企業組織論 1-企業組織図、組織内 3次元モデル
4	観光関連産業の動向と GW 中の課題説明
5	あなたの周りの働く人のキャリアアンカー
6	企業組織論 2-若手職員の仕事内容と仕事への葛藤、暮らしを想像してみよう!!
7	企業研究・業界研究 1-味方・調べ方など
8	企業研究・業界研究 2-JAL グループへの理解とコロナ禍(外部環境の変化)の変革・挑戦
9	企業組織論 3-JAL グループ若手社員様の仕事内容・葛藤・暮らし
10	企業組織論 4-ライフステージごとに変化するライフワークバランスを想像してみよう!!
11	企業組織論 5-JAL グループ社員様から学ぶ結婚・妊娠・産休・育児期とキャリア
12	企業組織論 6-企業の多様性
13	企業組織論 7-JAL グループ社員から学ぶ外国人と「働く」を考えよう!!
14	企業組織論 8-JAL グループ外国人社員から学ぶ日本で「働く」に必要な能力
15	まとめ、定期試験のポイント説明

3) 授業運用方法

大人数クラスかつコロナ禍での授業のため、ZOOM によるライブ型遠隔授業とした。このプログラムの最終目標は、職業生活適応力のバリエーションを増やし就職後に備えることであるから、登壇者と学生の意思疎通を活性化させるために、ZOOM チャット機能を使用した質疑応答とした。毎回、5-10 件の質疑があがる画期的な授業となった。

写真 1 授業の様子



2-3.KH Coder 分析から見た成果

1)分析概要

JAL プログラム終了後、学生に毎回、簡単な感想を manaba に提出させたことから、この感想をテキストマイニングの一種である KH Coder 分析をし、学生がどのような気づきをしたのかを明らかにし本プログラムの成果を示したい。

2)分析結果

【授業内容: 企業組織論 3-JAL グループ若手社員様の仕事内容・葛藤・暮らし】

■単語出現頻度

図 5 は、授業内容「企業組織論 3-JAL グループ若手社員様の仕事内容・葛藤・暮らし」の単語出現頻度である。左から名詞、動詞、形容詞に分けた単語と出現頻度である。出現頻度とは、文中に出てきた回数を示している。(例: 名詞の「仕事」の出現頻度は 58 回) また、「スコア」とは、特徴的な言葉を点数化したものである。

青の名詞を見ると、「JAL」以外に、「池畑」という言葉のスコアが高いことから、池畑さんの発言内容に影響された学生が多いと理解することができます。同じように動詞では、「学ぶ」「乗り越える」のスコアが高いことから、この講話では、数々のことを学んだり、葛藤への乗り越え方が印象に残っていると推測でききる。

図 5 単語出現頻度

名詞			動詞			形容詞		
単語	スコア	出現頻度	単語	スコア	出現頻度	単語	スコア	出現頻度
仕事	7.85	58	思う	4.07	85	良い	0.60	21
jai	545.59	57	できる	6.43	72	よい	0.41	14
お話	23.76	40	聞く	8.80	61	多い	0.49	13
入社	97.88	35	いく	3.20	41	いい	0.08	10
大切	18.66	31	感じる	5.03	31	大きい	0.85	9
経験	14.22	27	言う	0.75	30	強い	0.35	9
大事	3.67	22	学ぶ	29.50	28	近い	0.61	7
講話	150.95	21	出来る	1.51	24	遅い	0.43	7
社会	15.94	21	おく	3.13	23	少ない	0.42	6
今回	2.39	21	考える	1.49	23	無い	0.10	5
会社	3.54	19	持つ	0.74	16	厳しい	0.35	4
同期	17.75	18	続ける	2.15	15	上手い	0.19	4
上司	10.67	18	わかる	0.38	14	辛い	0.11	4
池畑	199.44	17	乗り越える	9.93	12	すごい	0.04	4
謙虚	40.91	16	働く	1.95	12	しやすい	0.58	3

■頻出語の共起ネットワーク

頻出語の共起ネットワーク図 6 より、この回の授業内容「企業組織論 3-JAL グループ若手社員様の仕事内容・葛藤・暮らし」を次の 2 つに整理し理解したと考えられる。1 つ目は、「仕事を覚えるペースが遅くても、そんな自分から逃げず、そんな自分を素直に上司らに知ってもらい謙虚な姿勢で柔軟に対応することで、力を抜いて仕事に取り組める」ということ、そして 2 つ目は「今回の講話で JAL ナビアの S さんの話にあったように、できるだけ業務のことをしり、ギャップがないように準備することで希望していた職種が担当できない・・・とはならない」ことを学び取ったと考えられる。

■ 頻出語の共起ネットワーク

図8の女子学生共起ネットワークから見る女子学生の学びは、次の3点に集約できる。1点目は「育児と仕事の両立は大変だが、結婚して子供を産み、育休を取りながら仕事ができる」こと、2点目は「働く女性の方々の話が聞けてよかった」こと、3点目は「JALは育休制度があるが、育休取得=よかったねではなく、育休中は1日中の育児で意外とストレスを感じてしまうことが多い」、すなわち仕事をして育児を忘れることも重要と言った感想が多かった。

図8 女子学生の共起ネットワーク

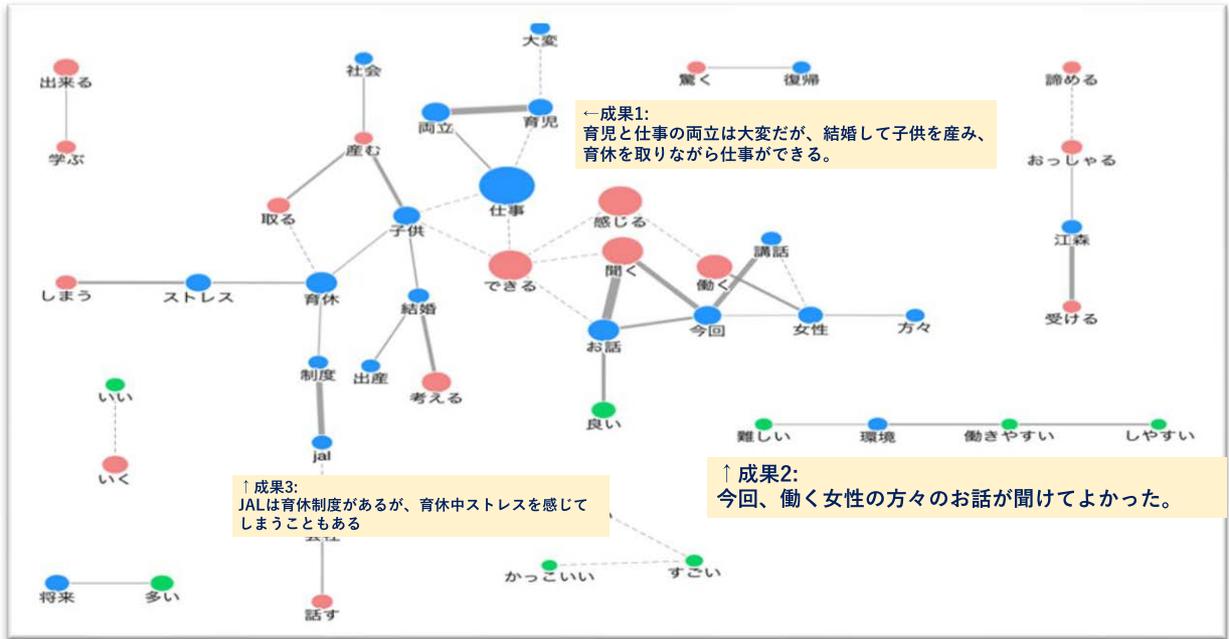
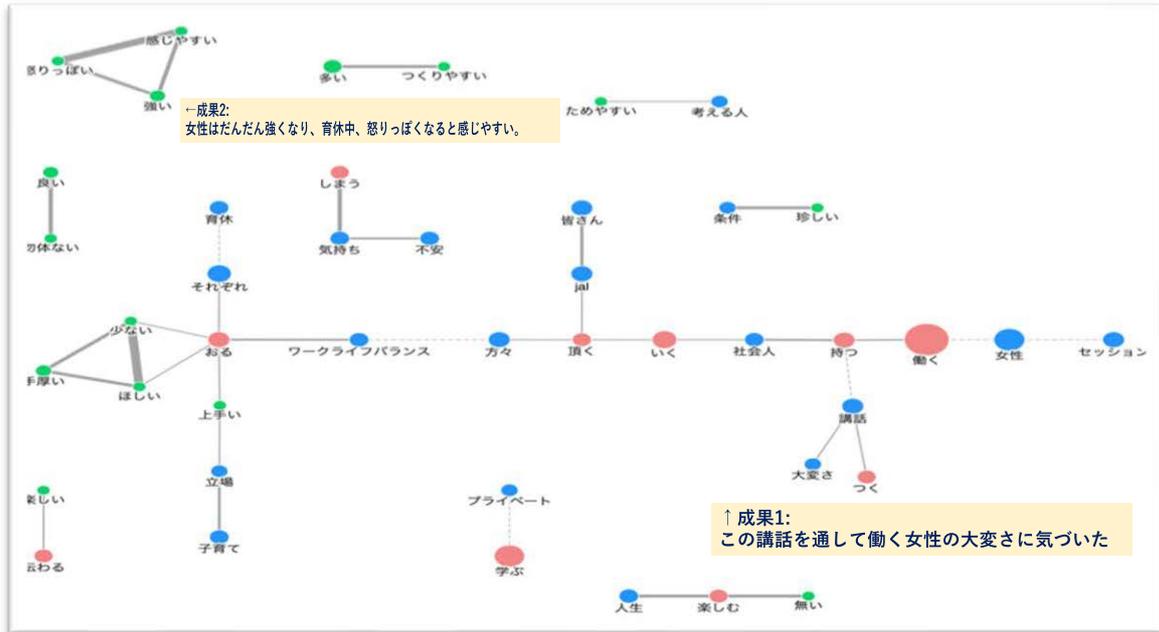


図9の男子学生共起ネットワークから見る男子学生の学びは、「この講話を通して働く女性の大変さに気がついた」、「女性はだんだん強くなり、育休中、怒りっぽくなる。」という2点であった。

図9 男子学生の共起ネットワーク



【テーマ:外国人と働くためのスキル】

■ 単語出現頻度

図10は、授業内容「外国人と働くためのスキル」の単語出現頻度である。名詞を見ると、「外国人」「文化」、動詞では「働く」の出現頻度が高い特徴が見られる。

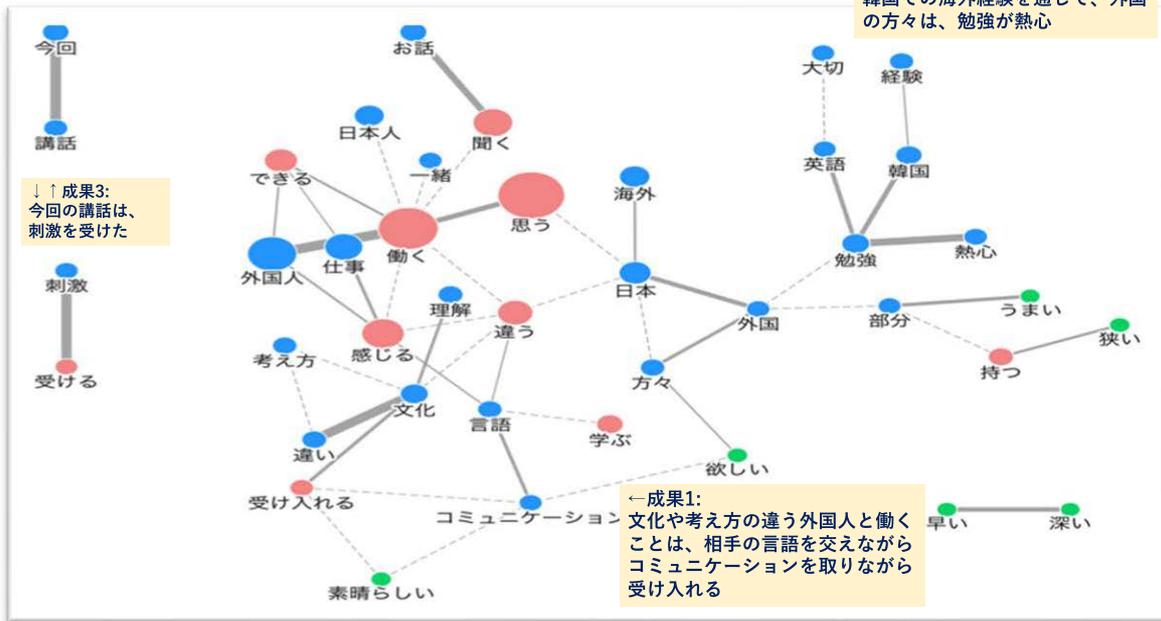
図10 単語出現頻度

名詞	スコア	出現頻度	動詞	スコア	出現頻度	形容詞	スコア	出現頻度
外国人	241.03	87	思う	6.78	110	多い	2.57	30
仕事	7.07	55	働く	89.43	94	良い	0.16	11
日本	11.06	38	感じる	14.68	54	難しい	0.65	9
海外	23.49	33	聞く	5.51	48	すごい	0.14	8
日本人	28.17	32	違う	5.46	38	いい	0.05	8
文化	35.29	26	考える	3.23	34	高い	0.15	5
勉強	5.68	26	できる	1.37	33	強い	0.11	5
jal	190.10	23	いく	1.02	23	無い	0.10	5
お話	8.52	23	言う	0.44	23	狭い	0.69	4
韓国	15.35	22	学ぶ	13.65	18	素晴らしい	0.22	4
今回	2.62	22	知る	0.64	16	欲しい	0.04	4
教育	23.79	19	持つ	0.65	15	うまい	0.09	3
理解	4.81	18	出来る	0.52	14	面白い	0.03	3
違い	5.99	17	受け入れる	6.68	11	早い	0.02	3
言語	24.77	16	分かる	0.38	10	よい	0.02	3

■ 頻出語の共起ネットワーク

頻出語の共起ネットワーク図 10 より、この回の授業内容「外国人と働くためのスキル」を次の3つに整理し理解したと考えられる。1つ目は、「文化や考え方の違う外国人と働くことは、相手の言語を交えながらコミュニケーションを取りながら受け入れること」。そして2つ目は、「外国の方々は勉強熱心であること」という理解である。こうした職場での異文化理解の話は、学生にとって多くの刺激を受けたようである。

図 10 頻出語の共起ネットワーク



【テーマ:このプログラムを振り返ったあなたが描くライフデザイン】

■ 単語出現頻度

図 11 は、4 回にわたる JAL 社員参画による得た知識からあなたが描く就職後のライフデザインについての感想の単語出現頻度である。名詞は「仕事」、動詞は「思う」「働く」の出現頻度が高い。

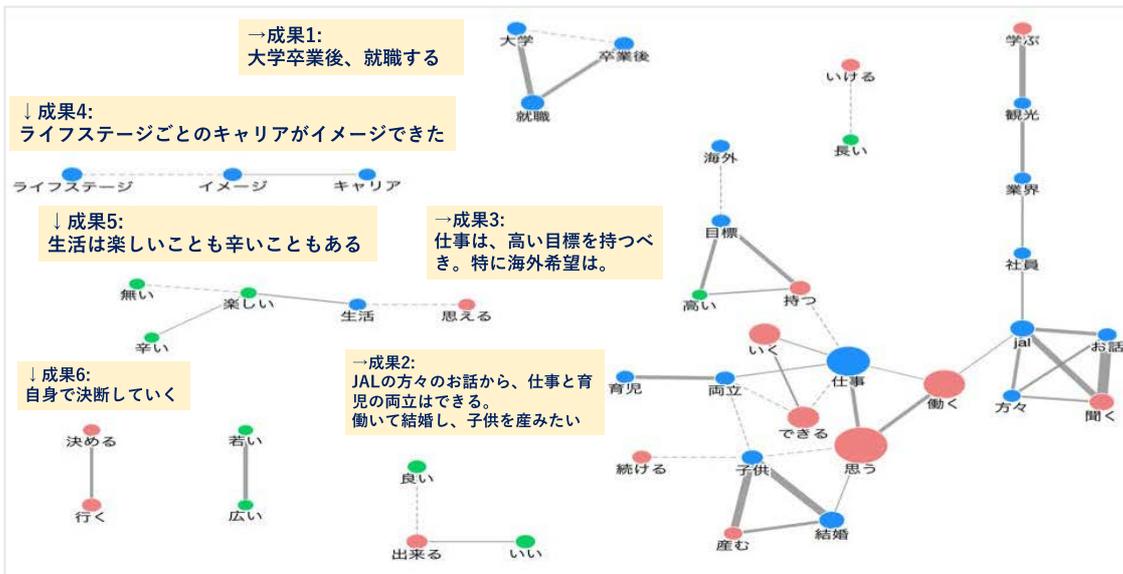
図 11 単語出現頻度

名詞	スコア	出現頻度	動詞	スコア	出現頻度	形容詞	スコア	出現頻度
仕事	19.23	92	思う	5.39	98	いい	0.13	13
結婚	15.54	84	働く	51.96	69	臭い	0.16	11
jal	269.53	31	できる	2.43	44	長い	0.29	5
就職	31.27	29	いく	3.52	43	楽しい	0.06	5
子供	5.08	22	考える	4.89	42	無い	0.06	4
ライフステージ	165.40	20	聞く	1.65	26	欲しい	0.04	4
経験	7.40	19	感じる	2.57	22	よい	0.03	4
卒業後	65.59	18	持つ	0.84	17	広い	0.33	3
キャリアアップ	98.65	17	出来る	0.76	17	深い	0.20	3
両立	35.45	17	働く	30.42	13	大きい	0.10	3
大学	4.43	16	行く	0.13	13	高い	0.05	3
将来	10.17	15	続ける	1.39	12	多い	0.03	3
目標	7.11	15	進む	9.03	11	働きやすい	0.40	2
お話	3.78	15	学ぶ	5.59	11	若い	0.09	2
イメージ	2.62	15	いける	0.54	11	小さい	0.08	2

■ 頻出語の共起ネットワーク

図 12 は、あなたが描く就職後のライフデザインについての頻出語の共起ネットワークである。その結果、「大学卒業後は、就職する。」「仕事と育児の両立はできる。」「働いて結婚し、子供を産みたい。」「仕事は、高い目標を持つべき。特に海外はより高い目標を持つべき。」「ライフステージごとのキャリアがイメージできた。」「生活は楽しいことも辛いこともある。」「ライフデザインは自身で決断していかなければならない」の5つに集約できよう。

図 12 共起ネットワーク



以上、テーマごとに学生が抱いた感想と自身のライフデザインに向けた決意について客観的に成果を概観した。試験的に2年間実施した本プログラムではあるが、就職後は幸せばかりではないこと、自身のライフデザインを描くには常に決断が必要なこと、そして女子学生の履修が多かったこの科目の学生の多くが働きながら育児と両立したいというポジティブな思考を自身のライフデザインに描いたことは、これまで筆者が課題としてきた出口教育視点によった職業教育やキャリア教育から一定程度、脱することができたと評価できよう。

3. 共同研究②:国内外インターンシップ開拓とプログラム開発

航空業界でのインターンシップについては、双方の打ち合わせにて、国内外での実施場所については概ね決定した。しかし、COVIT-19 感染拡大の影響から、2020 年度、2021 年度の 2 年間、実施できていない状況が続いている。しかしながら、派遣に至る際にどこで JAL の参画を頂くかについて先方の了解が得られたことから、その部分のみ報告する。なお、海外インターンシップは 2023 年度からの新カリキュラムで取り扱うことから、2022 年度に確定するシラバス内容に沿って盛り込む必要がある。そこで本章では、国内インターンシップ版のみの報告とする。

表 2 は、本学の国内インターンシップのシラバス内容である。赤色の網掛け部分は、JAL の職員参画の上、選考を行うこととしている。ただし、都合がつかない場合は、ZOOM 等のオンラインウェアを代用する。なお、学びの連続性を重視するため、派遣先が空港以外の航空系企業を希望している学生は「航空ビジネス実務」、空港のグランドスタッフを希望する場合は「航空ビジネス実務」に加え「グランドスタッフ実務」の 2 科目が履修済みであることを条件とする。その為、インターンシップは 1 年次から履修が可能であるが、2 年次と 3 年次とする。

表 2 インターンシップシラバス(国内版)

回数	シラバス内容	特記事項
1	初回ガイダンス	派遣先の希望と関連科目の履修状況を確認。
2	【講義 1】 インターンシップ授業の意味・心構え インターンシップで意識が変わる(前年度派遣学生の発表)	
3	派遣希望エントリーの提出	
4	【講義 2】 企業研究 企業研究シート書き方説明	
5	派遣先選考・面談	JAL 参画による選考を実施。 ※選考結果のフィードバック
-	派遣先発表	
6	【講義 3】 プロフィールシートの記入方法 通勤時のビジネスカジュアル	
7	【講義 4】 社会人基礎力 コンプライアンス	
8	【講義 5】 日誌の書き方 誓約書、承諾書の書き方と提出方法 お礼状の書き方	
-	派遣	
-	派遣後の個別指導(お礼状、報告書)	※報告書内容は先方にフィードバックする
9	全体報告会	

【引用・参考文献】

1. アデコグループ(2019)「新卒入社3年以内の理由に関する調査」
2. 一般社団法人日本私立大学連盟(2019)「新たな時代の就職・採用のあり方と大学教育ー未来を拓く多様な人材育成に向けて」
https://www.shidairen.or.jp/topics_details/id=2465
3. 観光庁(H29)「観光産業における人材育成をはじめとした課題と今後の対応について」
4. 観光庁(2020)「令和2年度観光産業における実務人材確保・育成事業」
5. 厚生労働省 HP 「新規卒就職者の離職状況(平成29年3月卒業者の状況)を公表します」
https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000177553_00003.html
6. 千葉他(2020)「2019年度奨励研究 ビジネス社会から見た本学キャリア教育科目の検証と外国人キャリア教育に向けた提案」
7. 日本学生支援機構(2020)「平成30年度学生生活調査結果」
8. 小林奈穂美(2009)「観光庁(2020)「観光産業における実務人材確保・育成事業, 駿河台大学論集第39号, pp.197-226
9. 樋口耕一(2020)『社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して - (第2版)』ナカニシヤ出版
10. マイナビ(2020)「2021年卒大学生就職意識調査」

【謝辞】

本研究で紹介したプログラム実施に向け、(株)日本航空北海道支社の近藤部長ならびに黒井マネージャーには、参画いただく社員様の調整に骨を折っていただいた。お陰様で、授業テーマ内容に沿った社員様の選出は、学生だけでなく授業を運営する教員にとっても有意義なプログラム内容にすることができ一定の教育効果を果たすことができた。ここに深謝の意を評します。

札幌国際大学地域連携センター年報 第6号

2022(令和4年)年6月 発行

編集 札幌国際大学地域・産学連携センター

発行 札幌国際大学

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4番1号

電話011-881-8844 FAX011-885-3370
